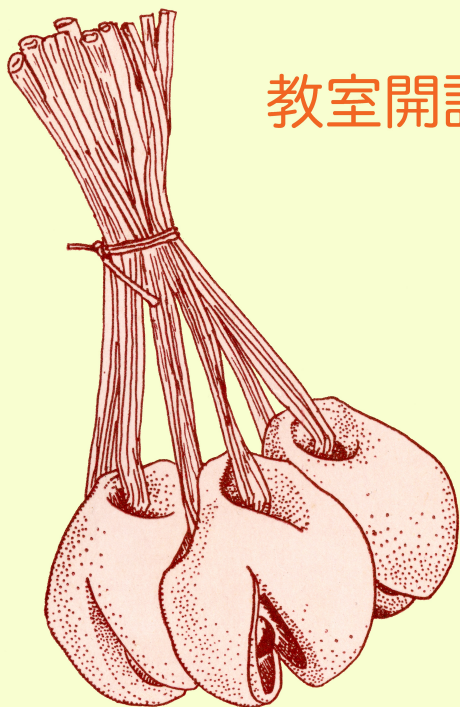


ひこさん がらがら

教室開設百周年記念号



13 号

京都府立総合資料館

目 次

昆虫学教室開設百周年と「ひこさんがらがら」	(広渡俊哉) ... 1
私の昆虫学事始め	(051) 平嶋義宏... 4
私の名誉教授（九州大学）時代のご奉公	(051) 平嶋義宏... 13
私が宮崎公立大学の初代学長をひきうけた経緯	(051) 平嶋義宏... 19
私の名誉：天皇陛下（現上皇）より勲二等瑞宝章を賜る	(051) 平嶋義宏... 22
忘年会の思い出	(080) 村上陽三... 23
昭和 30 年代初期の昆虫学教室学生大部屋物語	(086) 三枝豊平... 24
疎開した標本	(088) 矢野宏二... 40
九大昆虫学教室時代の思い出	(091) 宮武頼夫... 42
<i>Diapriidae</i> の分類をやりなさい。君は明日から世界的権威者です	(106) 中筋房夫... 47
最初の頃の論文	(121) 嶋 洪... 52
大部屋の最後が走馬灯のように	(132) 上宮健吉... 54
私の思い出深い大学院時代	(137) 矢田 脩... 57
九州大学農学部昆虫学教室の図書室	(152) 上田恭一郎... 59
パプア・ニューギニア海外調査の思い出とミクロネシア	(154) 多田内修... 62
自分に正直に生きたいですね	(160) 山本 優... 68
彦山生物学実験所 —人とむしと—	(164) 大原賢二... 71
昆虫学教室 1976–1990	(171) 緒方一夫... 75
中西先生の思い出	(182) 前藤 薫... 78
箱崎キャンパス昆虫学教室での研究生生活	(186) 直海俊一郎... 80
昆虫学教室開設百周年に寄せて	(187) 小西和彦... 82
学生時代の思い出	(188) 広渡俊哉... 84
福岡から大阪、そして箱崎から伊都へ	(188) 広渡俊哉... 88
啐啄同時	(196) 阿部芳久... 92
九州大学農学部昆虫学教室の昭和～平成	(200) 野村周平... 93
昆虫学教室の思い出	(209) 八尋克郎... 96

九州大学昆虫学教室に在籍して.....	(210)	竹松葉子...98
1990年代の飲食生活と学会発表の思い出.....	(217)	紙谷聡志...101
昆虫学教室にまつわる諸々.....	(220)	東浦祥光...105
標本箱.....	(237)	後藤秀章...110
ヴィッテは神社の馬の像にまたがったのか？.....	(240)	保科英人...111
コーヒータイム.....	(245)	徳田 誠...115
再び昆虫学教室に戻って.....	(295)	吉松晶子...118
昆虫学教室で出会った方々.....	(317)	金尾太輔...119
虫と酒.....	(329)	吉田貴大...121
英彦山での経験と先輩方.....	(336)	屋宜禎央...123

昆虫学教室開設百周年と「ひこさんがらがら」

九州大学農学部は、2019年に創立百周年を祝し、記念式典、記念講演会、「農学部百年の至宝展」などを開催しました。昆虫学教室としても、標本や資料展示を行うなどこの記念事業に参画しました。一方、昆虫学教室は、2021年（令和3年）をもって開設百周年を迎えましたが、昨今の新型コロナウイルスの影響もあり、記念事業の開催を自粛しました。しかしながら、歴史的に節目となる昆虫学教室の開設百周年を祝うとともに、教室の歴史と伝統を次世代に繋げることを祈念し、教室の機関誌である「ひこさんがらがら」を四半世紀ぶりに刊行することとなりました。

「ひこさんがらがら」は、1956年3月に第1号（写真1）が発行されました。昆虫学教室の開設は1921年ですので、ずいぶん時間が経ってから発行されたこととなります。当時の教室には、江崎悌三、安松京三、平嶋義宏の各先生と大熊千代子さんの他、計17名の学生や職員が在籍されていたようです。内容としては、江崎先生が「昆虫学教室のあゆみ(I)」と題して、研究室の歴史や構成員の移り変わりをまとめておられます。その後、1963年までに「ひこさんがらがら」2～9号が発行されました。そのうち、3～5号は江崎先生の追悼号ですが、それ以外の号には、何気ない日常の出来事が紹介されていて、思わず吹き出してしまうようなエピソードもあります。学生たち（後に著名になった先生方）が気兼ねなく日常を語っていることから、当時の先生方と学生が親密に接しており、信頼関係があったことが伺えます。その後、1968年に10号（安松先生還暦記念号）、1997年に11号（大熊千代子さんの追悼号）が発行されたのが最後でした。

「ひこさんがらがら」発行の経緯については、平嶋先生がエピソードを交えて詳しく紹介されています（平嶋、2006、月刊むし No. 430）。それによると、当時、中尾舜一、木船悌嗣、神谷寛之（後の佐々治寛之）の各先生（当時は学生）が中心となり、「教室の連絡誌、あるいは自由に何でも書ける雑誌のようなものが欲しい」ということで「ひこさんがらがら」が誕生しました。木船先生と神谷先生がガリ版の名手であったこともあったこともそれを後押ししたようです。そもそも、ひこさんがらがらは彦山生物実験所があった英彦山参拝の土産物で、日本最古の土鈴とも言われています。神谷先生が「ひこさんがらがら」1号に書かれたエッセイによると、寮の元同室の先輩が「ひこさんがら

ら口ばかり、ふるとがらがら音がする。おまえたちみないなもんや！！」と言ってがらがらを持って来られたとか。神谷先生は、「だれかがホラを吹くと、風でカラカラと音をたてるのであった。そのたびごとに三人（神谷先生と寮の同僚）は、“Boys be ambitious! 大ボラ必ずや実現せしめん”とてお互いの将来の成功を誓いつつ、カンカラカラと希望に満ちた爆笑は天地に響いたのである」と当時の様子を記述されています。ちなみに、そのひこさんががらがらは、寮の部屋の入口に掛けたそうですが、これとは別に当時の昆虫学教室の学生部屋入口にも掛けてあったようです。教室の連絡誌が「ひこさんががら」になったのは、先輩方の将来への希望が込められていたのです。そういった思いを知るべくもなく、現在でも昆虫学教室の資料室の入口に掛けてあります（写真 2）。もちろん、当時のものではなさそうですが、山口大輔さんによると教室で保管してあったかなり古いもののようです。

「ひこさんががら」11号が発行されて四半世紀が経過しましたが、昆虫学教室は諸先輩方が築き上げた伝統を継承し、多くの昆虫学者を輩出してきました。この間、箱崎から伊都へのキャンパス移転、昆虫科学・新産業創生研究センターの設立など、大きな変化がありました。一方で、ひこさんががら発祥の地、英彦山の彦山生物研究所（現在の彦山生物学実験施設）は、教員のポストが引き上げられるなど施設自体の存続が危ぶまれる時期もありましたが、現在は地元の添田町とも連絡を取りながら、「日本の昆虫学の聖地」ともいえる同施設を活用・宣伝すべく開設当時の雰囲気を保ちながらリニューアル工事を進めています。

（広渡俊哉）

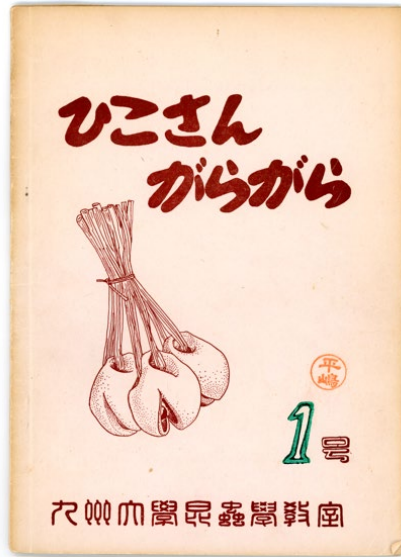


写真1 「ひこさんがらから」第1号
表紙のデザインは神谷（佐々治）寛之先生



写真2 現在の昆虫学教室に掛けられたひこさんがらから
(2021年12月撮影)

私の昆虫学事始め

(051) 平嶋義宏

(1) はじめに

私は終戦の翌年、すなわち昭和21年4月に、九州帝国大学農学部に入學した。当時の農学部には、農学科、農芸化学科、林学科、農業工学科、水産学科と農業経済学科の6学科があった。私が選んだのは農学科であった。

農学科には、農学第一（育種学）、農学第二（作物学）、園芸学、昆虫学、蚕学、栽培学、植物病理学の7講座があった。当時の大学は学科制・講座制で、講座（教授1名、助教授1名、助手1～2名、稀に講師1名）があつて、講座がその専門分野の教育と研究の全責任を負うのである。学生は3年生（当時は旧制大学で、学部は3年間。医学部だけが4年間）になると、卒業資格を得るために希望の講座に所属して卒業論文を書かねばならない。その講座選びが将来の専門家としての道に直結するのである。

私は躊躇なく昆虫学を選んだ。理由は、特に昆虫が好きだったからではない。また、将来は昆虫学者になりたいと思つた訳でもない。その教授（江崎悌三先生）と助教授（安松京三先生）が特に優れた学者であつたから、大学では立派な先生の指導をうけた、という誇りで世の中に出よう、そして日本の復興のために努力しようと思つたからである。

私は無事に昆虫学教室に入室を許され、卒業論文に取り組むことになつた。私が貫つた研究テーマは、「農作物の花粉媒介昆虫に関する研究」であつた。農作物といっても幅が広い。果樹もあれば蔬菜もある。1年間の研究ではとてもカバー出来ない。そこで私はナタネを主題に選んだ。

当時、九州ではナタネ栽培が盛んであつた。特に福岡県は全国の栽培特定県に選ばれていて、春先になると、田園地帯一円が黄色い絨毯を敷きつめたような、見事な風景になる。このナタネの花には多くの昆虫が集まって、蜜を吸い、花粉を食べるのである。それがナタネの花粉媒介につながる。

ナタネの時期には、福岡市とその近郊を走り回つて、昆虫採集に没頭した。採集と標本作製は直結する。ナタネの花期が終わつたときには、私にとっては莫大な昆虫標本が集まつた。とくに多かつたのがハナバチ（花蜂）とよばれるミツバチの仲間であつた。詳しいことは後述するが、そのハナバチの研究が私の一生の仕事となつたのである。

さて、いよいよ卒業となり、就職が問題となつた。私は早々に私の指導教

官であった安松先生から、教室に残れ、と言われた。すなわち、昆虫学者になれ、ということである。

私は先生に、不遜にも、昆虫学者では飯は食えません、とたてついて、辞退した。しかし、そんなことでへこたれる先生ではなかった。なんとかかんとか、適当にあしらわれて、とうとう教室の助手にされてしまったのである。

当時、教室には蝶の白水隆さんが助手をしておられた。彼が新設の教養部の助教授に栄転して出てゆくことになっていたが、その発令が遅れた。私が助手（すなわち文部教官）の辞令をもらったのが、昭和24年9月2日付けである。それまでの5ヶ月間は無給助手（当時そう呼ばれていた）を務めたのである。いうなれば助手見習いであった。

(2) 最初の仕事 昆虫図鑑用の絵を描く

助手見習いになって、思わぬ仕事を命じられた。それは、早速江崎先生からこれこれの虫（カメムシ類）の図を描いてくれ、と頼まれたからである。それは、北隆館発行（昭和25年11月）の「日本昆蟲図鑑 改訂版」のための付図であった。少ないながら稿料も出るというので、喜んで総数21枚を書いたように覚えている。その幾つかを図1に示した。この中のシロヘリクチブトカメムシは良くできた、と江崎先生に褒めて貰った。これが昆虫学研究者としての最初の業績である（図1）。

(3) ガガンボの世界的大家アレクザンダー博士のためにガガンボの図を描く

また、江崎先生を通じてアレクザンダー博士のためにガガンボの図を1枚描いてあげた。お礼にサイン入りの教科書 *College Entomology* を頂戴した。この教科書はかねて欲しいと思っていたものなので、大変嬉しかった。

(4) 私の助手時代（昭和24年～昭和33年）

助手の辞令を貰ったからには、よし、日本一の昆虫学者になるんだ、と覚悟を決めた。

私はいわゆる昆虫少年あがりではない。昆虫と向き合うのは初めてである。それでは、まず昆虫の名前を覚えるのが先決ときめて、教室所蔵の標本をひっぱりだして、虫を覚え、虫の名前を覚えたのである。幸い、教室には日本一の大きな昆虫コレクションがあった。標本の管理は助手の重要な仕事

の一つである。しかし誰に遠慮することはない。勤務時間が終われば、私の天下である。自由に標本を引っ張り出して、毎晩夜遅くまで教室に居残って、昆虫の勉強に励んだのである。

助手の仕事は、教室の業務全般をこなさねばならない。仕事は山ほどある。標本管理のほか、教授や助教授の先生からの頼まれ仕事（これが結構多い）、図書管理（整理整頓）、図書や消耗品の購入、教室備品の管理（1年に一度備品検査があった）、標本製作、学生諸君の世話や苦情受け付け、来訪者への対応など、全くきりが無い。助手は高等小使いと称されていた。しかし、幸いなことに、自分の研究は許されていた。

(5) 私の処女論文

卒業論文で集めた標本を整理していたら、オスマア（ツツハナバチ）の標本がよく集まっているのを見られた安松先生から、これをまとめてみたら、と示唆された。おまけに本州産の標本や韓国産の標本を追加して貰ったので、元気百倍、それではと研究に取り掛かった。オスマアの雌蜂は種ごとの形態的な特徴が顕著なので、区別は簡単についた。1年後には日本産のオスマアを2亜属5種にまとめ、論文を書き上げた。それを安松先生が教室発行の *Mushi* という学術雑誌に発表して下さいました。これが私の処女論文である。勿論安松先生との共著論文であるが、私が書いたものに間違いはない。

この論文では、さらに韓国産のオスマア1種を新亜属と認め、これに *Cryptosmia* という学名を与え、そのタイプを新種 *satoi* と命名した。クリプトオスマアとはギリシア語で〈隠れたオスマア〉という意味。いままで発見されなかった（隠れていた）オスマアという意味を示す。また、*Osmia* とはギリシア語で〈匂いの〉という意味。この蜂に特有の匂いがあるためである。種小名はこの蜂の採集者で、農事試験場の佐藤覚さんに因む。

この私の処女論文は世界的にも高い評価を得たのは嬉しい限りであった。また、この論文では安松先生から私の語学力を高く評価して頂くというおまけがついた。

(6) オスマアの習性の研究

当時の農学部構内の一隅に農機具小屋があった。その棚の上に〈葦簾〉が放置されていた。ある日、ふと気がつくと、その〈葦簾〉の上を夥しいハナバチが飛びまわっている。葦簾の中に営巣していたのである。捕虫網を振り

回して捕えてみると、処女論文で扱ったシロオビツツハナバチ *Osmia excavata* であった。これは良いものがみつかった、と大喜びして、早速にそのハチの習性研究を始めたのである。

その観察のために、いろいろな工夫をした。まず<葦簾>を新たに買ってきて、これを適宜に切断して巣の材料をこしらえ、数十木まとめて縛る。縛ったものを1単位として、これを10単位ばかり入れる蜂小屋を作っておくと、ハチは自由に営巣活動を始めるのである。私は朝出勤してきたら、手早く事務をかたづけ、弁当持参でハチ小屋の前に座り込んで、ハチの行動を観察した。

ハチは花粉をいっぱい腹の下にくっつけて巣に帰り、巣の中に花粉を落とし、また花粉集めに飛び立ってゆく。これを10回ばかり繰り返して花粉団子をつくり、その上に卵を一つ産みこんで、今度は泥をくわえてくる。これを数回くりかえし、泥壁をつくる。これで一つの虫室が完成する。そして同じように虫室を作り続け、最後に巣の入口を泥でぬりかためて、一つの巣が完成する。ハチは勤勉である。休む暇なく、別の葦筒を選んで巣作りを始めるのである。ハチの個体を識別するために、ハチにマークをつける方法も工夫した。

巣の中の蜂の動作（行動）を観察するために、ガラス管に営巣させた。それにはある工夫が必要であった。そして、ガラス管を巣の材料として、虫室や産卵や泥壁つくりを繰り返すハチの行動を詳しく観察した。実に面白かった。

毎年、春になると午前中は教室の業務をほったらかして、ハナバチの観察に精出した。研究が一段落するまでの7年間、私は春のハナバチの活動期間は、午前中は教室にいなかった。よくもそういう私の我儘を許して下さったものだと、いまでも江崎・安松先生に感謝の気持ちで一杯である。

(7) オスマリア習性観察の結果発表

観察と実験結果の発表は、九州大学農学部学芸雑誌に4編の論文として和文で発表した。第1報（1957）はシロオビツツハナバチの生活史、第2報

（1958）はシロオビツツハナバチとオオツツハナバチの営巣習性、第3報

（1959）はシロオビツツハナバチの巣内での雌雄の産み分け、第4報（1959）はシロオビツツハナバチとコツノハナバチ（のちにマメコバチと改称）の処女生殖に関する研究であった。

多くの独創的な研究成果を発表したが、1、2重要な発見を示してみたい。

シロオビツツハナバチは 例外なく繭の頭を巣の入り口（出口）に向けている。中の蛹の頭は繭の頭にある。従って、翌春、蜂が成虫となって巣から脱出するのに、単純に前の方に進めば良いのである。何故そうなるのか。種々の実験でこれを解明したのである。

また、この蜂の巣の中には秘密があった。1本の巣の中に例えば15個の虫室があったと仮定しよう。巣の奥の方に雌が5匹（5虫室）、入口のほうに雄が10匹（5虫室）位いるのが普通である。春先、このハナバチが活動を始める時は、まず雄蜂が現れる。あとから出てくる雌蜂を巣の出口付近で捕まえて、強引に交尾するのである。そのためには雄が雌より早く巣から脱出しておかねばならないのである。

もし、雌が巣の出口付近にいて、雄が巣の奥にいれば、春先、雄は巣から出られなくなり、巣の中で死んでしまう。これを避けるために、営巣する母蜂は、自分の子供の雌雄を産み分ける、という事実（曲芸とか至芸といってよい！）を実験によって解明したのである。

ミツバチ（蜜蜂）では、受精卵から雌（女王蜂と働き蜂）が生まれ、不受受精卵から雄蜂が生まれることが知られている（図2）。オスマアでもそうであろうと推定し、これを独創的な方法で解明したのである。私の結論は、オスマアの母蜂は、自分の子供の性を意識して産み分けている、ということである。詳しいことは私の論文を参照してほしい。

ところが、この大発見には日本の昆虫学者は殆んど無関心である。

私はこのオスマアの習性を研究していて、このハチは農作物の花粉媒介に利用できる、と思いついて、その論文を書こうと思っていたら、途方もない知らせが舞い込んだ。それは、青森県のある篤農家が、リンゴの花粉媒介にこのオスマアを利用している、というのである。衝撃的な情報であった。

このツツハナバチは*Osmia cornifrons*という種類である。東北地方ではこれをくマメコバチとよんでいるという。そこで私は早速にこのハチの和名をマメコバチと改称して、青森の篤農家に敬意を表したのである。

マメコバチの利用に関する研究は、私の教え子の一人である東北農業試験場の前田泰生博士（後に島根大学農学部教授、現島根大学名誉教授）が大いに研究し、実績を上げてくれた。嬉しい話である。

(8) 私が観察した昆虫の衝撃的な行動、其の一

オスマヤの習性研究に引き続いて、私は野外でのハナバチの営巣習性の観察に精を出した。ハナバチはオスマアのように地上孔筒に営巣するものと地中に営巣するものがある。私は地中営巣のハナバチの行動を観察していて、その近くにベッコウバチの巣があるのに気がついた。ベッコウバチの獲物（幼虫の食べ物）はクモである。ベッコウバチはクモを狩ってきて、巣の入口付近におき、巣穴にもぐりこんでから、頭からでてきてクモの脚をくわえ、あとずさりしながらクモを巣の中にひっぱりこむのである。私はその習性を知っていたから、クモを巣の中にひっぱりこむのを興味深くみつめていた。

クモがまさに姿を消そうというときに、突然、（空から）パラパラと白いものが降ってきた。吃驚して巣の上をみたら、小さなハエが20センチばかりの高さでホバリングしていい、クモを狙らって<白い爆弾>を落としていたのである。一瞬の呼吸をおいてこのハエを捕まえた。ヤドリバエの一種であった。

私はこのとき大きなミスをした。それは、この<白い爆弾>がハエの卵だったのか、1令幼虫だったのか、確かめなかったのである。ハエを捕まえて安堵したせいであろう。しかし、これはまさに一期一会、千載一遇のチャンスであった。私の野外調査の本拠地の福岡市郊外の香椎の丘での観察である。

(9) 私が観察した昆虫の衝撃的な行動、其の二

同じ香椎の丘で、ヒメハナバチの一種の地中営巣の行動を観察していた。脚に黄色い花粉をつけたハチが帰ってきた。巣穴の上を大きく旋回している。すると、1匹のハエがそのハナバチの後ろにくっついて飛んでいるのが目にはいった。ハナバチの後ろにぴったりくっついたハエは決して離れない。何だ、これは！ハチが巣穴の入り口近くに着地して、すぐ穴にもぐりこんだ。ハエも同時に着地して、10センチばかり離れたところから、巣穴をにらんで静止している。やがて巣の中で仕事を終えたハチがでてきて、再び花粉と花蜜を求めて飛び立った。すると、そのハエがするすると近づいてきて、巣穴にもぐりこんだのである。なるほど、そうだったのか、と納得した。

これに興味を覚えて、その近くを探したら、ハエが地上に静止しているのが目についた。ハナバチが巣にかえってきたとみるや、さっと飛びあがって

ハナバチにくつつくのである。よく目がみえるものだ、と感心する。

また、巣穴に潜り込んで、でてきたハエの行動が実に面白い。落ち着いた動作でてきて、悠然として、入口付近で口をこすったり、頭をなでたり（勿論前脚を使つてのハエの独特の動作）する時は、うまく産卵できたときで、してやったり、という時のように見受けられた。ところが、慌てまくつて出てきて、サッと巣穴から離れてゆくときもある。これは産卵に失敗した時で（花粉団子がまだ小さい）、〈みつからないうちにそれ逃げる〉という表現のように感じられた。

むかし、虫に表情があるか、ないか、という論争があつたように記憶している。私の観察結果では、虫には確かに表情がある、といえる。

(10) 採集旅行と新種の発見

私の助手時代の記憶に残る国内の昆虫採集旅行といえ、大隅半島（江崎先生と朝比奈正二郎・長谷川仁・加納六郎・中根猛彦の4先輩同道）、屋久島（武谷直先生同道）、四国の石槌山（石原保先生、宮武睦夫・久松定成君同道）と北海道（2回）である。特に北海道は思い出の多い、また、収穫の多い旅であつた。これは林業試験場北海道支場の井上元則博士の配慮によるもので、同博士のご厚意にはいまでも感謝している。

北海道旅行の最大の収穫は、日本から未知のハナバチ2属4新種を発見したことである（下記参照）。また、石槌山からはハナバチの4新種を発見し、命名発表した。その中でも*Nomada kaguya*（竹取物語の女主人公かぐや姫に因む）は美麗種であり、思い出が深い。

ノマダ*Nomada*はアンドレナ*Andrena*ほかのハナバチに寄生するいわゆる労働寄生蜂である。ノマダについては、助手時代にかなり力をいれて研究し、いくつかの新種を命名した。また、日本産ノマダの研究は、後年、福井大学の某先生が新種を書きなぐつて混乱していたのを、私の孫弟子にあたる三田井克志君が整理してくれた。これも嬉しい話である。

(11) 助手時代の私の最大の手柄

助手時代の私の最大の手柄は、日本未知であつたメリッタ*Melitta*とマクロピス*Macropis*（どちらもケアシハナバチ科）を北海道で採集し、おのおの2新種を発見し、命名記載発表したことである。この2回の遠征（？）の2回目の旅行には随分と私費を使い、家計を圧迫して家内に迷惑をかけたが、思い返す

と楽しくて有益な旅行であった。詳しい内容は日本昆虫学会の機関誌Kontyû (24: 247-255, pl. 1, 1956) を参照して頂きたい。

(12) 私の助教授時代 (昭和 34 年～昭和 47 年)

私の助教授時代は14年間で、年齢でいえば34才から47才までの、実に私の壮年期といってよい時代であって、気力、体力、知力が充実して、分類学的研究でも、海外調査でも、国内のどの研究者よりも多くの実績をあげたと自負している。また、ホノルルのビショップ博物館に1年間留学して研究し、そのあと米本土とヨーロッパの有名博物館を歴訪して (2ヶ月間) 知識を広げると同時に、かねて文通のあった旧知の研究者と会い、友好の絆を深めることができた。これは非常に大きな収穫であった。

また、海外の探検活動としては、日米科学協力研究の一環として海外調査 (占領下の沖縄、マレーシア、香港) に参加したことや、特にビショップ博物館の英領北ボルネオ探検隊とパプアニューギニア探検隊に参加したことが印象深い。この2つの探検隊については別記したい。

国内では、日本昆虫学会の編集幹事に任命され、機関誌「昆虫」の編集に携わった。

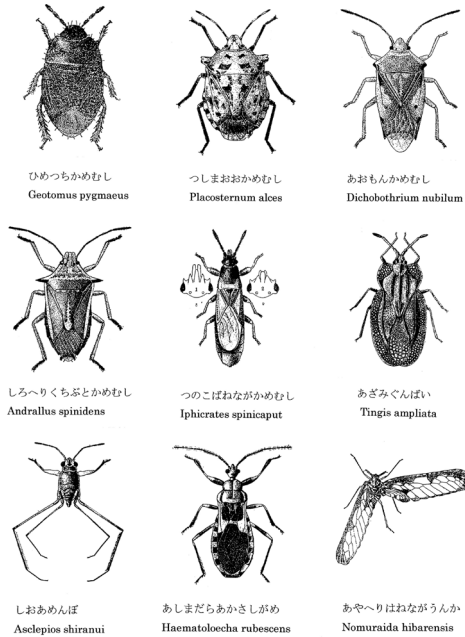


図1 小生（平嶋義宏）が描いた「日本昆虫図鑑 改訂版」の付図の一部



図2 東南アジアのミツバチ3種。東南アジアに行くと、写真に示した3種のミツバチが普通にみられる。右端はセイヨウミツバチで、日本にも普通。中央はコミツバチで、非常に小さい。左端はオオミツバチで、気が荒い。

私の名誉教授（九州大学）時代のご奉公 —バングラデシュでの体験記—

(051) 平嶋義宏

バングラデシュは私が九州大学名誉教授になってからの最初の訪問地であり、最初のご奉公をした国である。JICA（国際協力事業団、現在は国際協力機構）主宰のバングラデシュ農業大学院計画（IPSA）のチームリーダーとして赴任した。家内同伴で1年間首都のダッカに滞在した。

この計画については、多くの人がいろいろ書いているから、紹介は省略するとして、私はここで私の体験を通じて感想や見聞記を述べたいと思う。写真を16枚添付した。

(1) バングラデシュはハータル（ストライキ）が横行

ダッカでは労働者のハータル（ストライキ）が頻繁に行われた。大勢の労働者が一団となって道路を歩くので、そこでは道路が封鎖されたようになる（写真1、2参照）。そうなると私共はダッカ市内から農業大学院のある田舎の地までは行きつけないので、その日は臨時休業として仕事を休んだのである。

(2) バングラデシュではよく洪水があつて、橋が流される。

其の被害は大きい。橋の修復や再建には大きな資金がいる。これには日本の資金や労力が投入された。修復された姿を写真3で見て下さい。

(3) ジュートの栽培

ダッカの郊外といえはジュートの栽培である。写真4でその全体像をつかんで頂きたい。其の乾燥には写真5のように道路わきが利用される。愉快的写真である。

ジュートの製品は写真6にみるような敷物である。

(4) 建築に竹を利用するダッカの文化

ダッカの市内では、建築物の大小に関わらず建築現場では太い竹材が活躍している。

写真7はトラックで大きな竹材を大量に運搬しているところである。写真8は

建造物の作り始めで、多くの竹材が利用されている現場を撮影したものである。竹は日本のモウソウチク（孟宗竹）に匹敵する太さである。

(5) マンゴーは食べ放題の果物

甘美な味のマンゴーはインド・バングラデシュあたりが原産地のようである。ダッカでは種類というか品種というか、実の熟する時期に差があるので、かなり長い間マンゴーを楽しむことができた。写真9に見るように、実がついたら壮観である。実が熟したら小鳥も食べにくるので、騒がしい。

(6) パラミツは甘美な果物

パラミツはダッカでは人気のある果物である。写真10と11に示すように、大きな果物である。現地では精がつく果物ということで、教養のある人達は食べたがらない。

(7) 小生の部屋の入り口の名札

写真12に示すものがそれで、特に言う事は無いが、Team Leader（フルキャップ）が目立っている。

(8) 来訪した外国からの要人を歓迎する行為

日本の総理大臣海部俊樹閣下が訪問された時の歓迎模様を写真13と14に示した。空港からダッカ市内までの主要道路脇に歓迎の大きな立て札と日本の国旗が掲揚された。

(9) 長距離バス

長距離バスは何時も超満員で、はみ出した人はバスの屋根裏に乗っている（写真15）。

(10) 教え子との再会

私の九州大学在学中にバングラデシュからの留学生が2名いた。一人はアンワルルール・アジム君で、カルカッタ大学出身、昭和35年に修士課程を修了している。もう一人はカジ・アブドス・サハド君といい、マイメイシン農科大学の出身、九大の修士課程をへて昭和58年に博士課程を修了、農学博士の学位を取得している（写真16）。

アジム君はすでに農務省を退官していた。カジ君は働き盛りで、カジ君の奥さんがよく訪ねてきてくれた。彼女は日本での生活の経験もあり、私たちを慰めるために、バクグラの料理を日本の重箱につめて持ってきてくれた。カジ君の活発な男の子も元気であった。さすがにアジム君は年をとったな、という感じであった。私が数年前に最初にバングラデシュを訪れた時にもアジム君とカジ君には会っている。外国にも教え子がいる、ということは大学教授の嬉しい一面である。なお、アジム君とカジ君を覚えている「がらがらの会」の会員もおられると思う。

(11) ダッカでの私生活

さて、写真の展示は以上で終わり。最後に私たち（家内と私）の私生活と公的生活の一端を述べてみよう。

(A) ダッカではこちらの身分の関係もあって、住む邸宅は至って豪勢なものを借りて住んでいた。

そこには現地人の若者を使用人として使役していた。先ず、料理と買いもの専門のコック、食事の運搬と身の回りの掃除係りの男、夜警の男、屋敷の入り口の門番、庭木の手入れ係りの男、自家用車の運転手、以上の6名である。コックのヘンリーという男は英語が喋れたので、家内も随分楽をしたようである。言うまでもなく、屋賃や使用人の給料は私の給料から支出した。

(B) ダッカでは家内ともどもゴルフを楽しんだ。

家のすぐ横の線路をこえると、そこは立派なゴルフ場（クルミトラゴルフクラブ）であった。早速に会員権を買ってメンバーとなり、専用のキャディをつけて、楽しんだ。バングラデシュの大統領もよくゴルフ場に現われた。お伴数名と同行。必ず銃で武装した護衛兵が要所要所を固めるので、すぐ分かる。

私のキャディーはハンディ6、私は日本のハンディ15でまともには争えなかったので、いろいろ工夫して、五分五分で遊んだ。

(C) ダッカから海外旅行ができた。

ダッカでは、3ヶ月勤務したら、買い出し旅行と称してバンコックに出かけられた。

その旅行は1週間ほどである。シンガポールまで足を延ばすことも出来た。また、私の滞在中、インドネシアのジャカルタでチームリーダー会議が開催されたので、私はこれにも参加した。外国から外国への出張である。ジャカルタでの数日間の会議中、昼飯のおやつにドリアンがでた。果物の王者といわれる代物で、その味を堪能した。

(D) ダッカでの食事はカレーが主力である。

カレーは味付けの香辛料の良し悪しがものをいう。うちのコックはそのへんのことは良くご存知で、いつも美味しいカレーを食べさせて貰った。

(E) 家内が貰った勲章か。

私共が1年の勤務を終えて、いよいよ帰国という時に、珍事が起きた。家を離れるその時に、使用人6名が、全員涙を流して別れを惜しんでくれたことである。私はそれを眺めていて、これは家内が貰った勲章だと思ったのである。私共が使っていた使用人たちは、人情の機微を弃えていたのだろうとしか思われなかった。



写真1-8 (説明は本文参照)



写真 9-16 (説明は本文参照)

私が宮崎公立大学の初代学長をひきうけた経緯 —宮崎公立大学の設立者（故）長友貞蔵さんの思い出—

（051）平嶋義宏

宮崎市長（故）長友貞蔵さんは、かねて宮崎市に宮崎公立大学を新設するのに非常な熱意をもち、その準備に奔走されていた、ということである。その念願が現実のものになり、いよいよ新設 OK となったまでにはいくつかの難関があったようである。その第一の難関は誰を学長にするか、ということであった。それにはいくつかの経緯があったようであるが、いつのまにか白羽の矢が私にたったのである。そして長友市長さんから学長になって欲しいとの直接の打診があった。私は 1989 年（平成元年）に九州大学を停年退官し、名誉教授となり、すぐバングラデシュのダッカに赴任し、国際協力事業団（現在の国際協力事業 JICA）が主催していたバングラデシュ農業大学院計画（IPSA）のチームリーダーとなり、1 年を過ぎて帰国したばかりで、かねて念願の著述に精出していたときである。宮崎公立大学は私にとってはよその大学である。そういう大学には関心がなかった。そこで学長就任をお断りしたのであるが、市長は諦めるどころか福岡にまでこられて、私を説得しようとしたのである。長友市長さんとは初対面であったが、会ってみて「これは信頼するにたる豪快な人物だ」と一目で惚れ込んだ。しかし学長就任とは別である。ところが話半ばに、市長さんは何気なく「実は中村健郎は私の従兄弟です」と申されたのである。この一言は私にはまさに青天霹靂の珍事であった。中村君の従兄弟である長友市長さんの希望を断るわけにはゆくまい、と思い直し、ではお引き受けしましょう、と変心したのである。長友市長さんの遠望深慮にひっかかったのである。

中村健郎という人

中村君と私が親しい仲だということを長友市長さんはどこで知られたのか、今は聴きただすことは出来ないが、遠望深慮のことであった。実は中村健郎君は 50 年ばかり前の熊本陸軍幼年学校の同期生で、第 44 期生の第 1 訓育班で机をならべて勉学と体育に励んだ仲である。彼は宮崎市出身、私は都城市出身で、同県人であるからすぐ仲良しになった。彼は学業も優秀であったから、私はひそかに尊敬していたのである。今時陸軍幼年学校といっても理解できない。実は当時の幼年学校は全国に 6 校（仙台、東京、名古屋、大阪、広島と熊本）あ

って、全国から優秀な若者を募集し、将来は陸軍将校中のエリート将校を養成するのが任務の学校であった。教官も優秀な人達であった。終戦後は全くのフリーとなり、私共は九州帝国大学（のち九州大学）に入学した。彼は工学部、私は農学部であった。学生時代も二人の交流は続いた。卒業後は彼は通産省のお役人になったが、しばらくしてそこを飛び出し、民間の会社に鞍替えした。日本工営株式会社といった。彼はすぐ頭角を現し、副社長に昇進し、外国出張に励んだ。かれの外国出張は優に100回を超えていたそうである。私は彼がアフリカから帰国直後に東京で会ったのが最後である。相変わずの温顔であった。それからしばらくして彼は病を得て昇天したのである。惜しい人物を早々と失ったのである。その中村君の名前がでて、どうして私がそれを無視できようか。「平嶋よ、俺の従兄弟を助けてやってくれ」と彼が言っているようなものである。事はそのようになったのである。私の新規の学長就任にはこのような経緯があったのである。

長友貞蔵氏さんの思い出

ここに一枚の写真がある。いよいよ念願がかなって、文部省の高等教育局の局長さんから宮崎公立大学の設立認可のお達しを受けている時の写真である。長友貞蔵市長さんの顔には、遂に念願を果たした、という安堵の気持ちがあるようにも見える。市長さんを写した貴重な写真の1枚である。



写真 文部省にて（高等教育局）。宮崎公立大学の認可式。1992年12月21日午後1時半。文部省は女性の局長、当方は長友貞蔵市長、平嶋義宏初代学長予定者、他二人。

長友貞蔵さんの榮譽（1）

宮崎市在住の歌人藤原光雄さんが、長友市長の死去を悼み、彼の大きな業績を知ってほしいと、追悼歌5首を宮崎日日新聞社に寄せられた。その5首とは

- (1) うつつなく父が呼びしと目をあけし臨終（いまわ）の君を聞けば切なし
- (2) 学び舎の君との縁（えにし）五十年後先（あとさき）ありて一生（ひとよ）偲ばぬ
- (3) がむしゃらに君が遂げにし業あまた語るも空し今日のみ葬（はふ）り
- (4) 国道をはるかに走る菜種の道ていぞう道路とぞ車のしげし
- (5) 顧みる君の業績輝かしわけて大学と敬老乗車と

長友貞蔵さんの榮譽（2）

長友貞蔵さんは学界にも名を留めた。それは昆虫学者の野村周平博士（国立科学博物館）の業績の一つとして、昆虫のアリズカムシ（蟻塚虫）科のなかに、新属新種のヒュウガ・モリ・アリズカムシ（新称）*Hyugatychus teizonabgatomoii*が誕生したからである。1996年に命名された。勿論この学名は永久に学界に名を留めるもので、（故）長友市長の榮譽と言って差し支えないものである。市長の御生前に命名されたらなお良かったと思う。

私の名誉：天皇陛下（現上皇）より勲二等瑞宝章を賜る

(051) 平嶋義宏

私は思いかけず天皇陛下（現上皇）から勲二等瑞宝章を賜るという幸運に恵まれた。

聞くところによると、勲二等という位は現役の大学学長もしくは学長経験者でないと下賜されない、ということで、私が宮崎公立大学の初代学長をつとめたことを認めていただいたものと思われる。有り難いことである。

賞状は縦約 40 cm、横約 56 cm の大きなもので、その内容は次の通り。

「日本国天皇は平嶋義宏を勲二等に叙し

瑞宝章を授与する

平成十五年四月二十九日 皇居において璽をおさせる」



忘年会の思い出

(080) 村上陽三

私は1954年4月農学部進学と同時に昆虫学教室に入れていただき、2年間の学部生、5年間の大学院生、1ヶ月の研究生を経て1961年5月から半年間助手を務めさせていただきました。進学当時の教授は江崎悌三先生、助教授は安松京三先生、助手は平嶋義宏先生で、大熊千代子さんが事務を担当していました。

写真は、私が進学した年の忘年会の折のもので、東中洲の肉屋「ちんや」2階和室で撮ったものです。教室員のほか教養部の白水隆先生や宮本正一先生なども写っていて、教室員以外の関係者も一緒だったようです。

その当時、忘年会は毎年「ちんや」で行っていました。アルコールが回るに従い宴会は賑やかになり、ある年は隣の部屋との境の襖を開けて、その部屋で忘年会を楽しんでいた玉屋の女店員さん達と合流したこともありました。

この写真を見ていると、私が知らないだけで、現在もお元気で過ごしておられる方々もあると思いますが、すでに大部分の方々は鬼籍に入られました。しかし、私の心の中では、お一人お一人との思い出が、今なお鮮明に蘇ってきます。とりわけ同期の森本桂・木元新作両君、日浦勇、高橋三雄、中尾舜一各先輩や大熊さんとの楽しかった思い出が、つい昨日のことだったように感じています。



写真 東中洲「ちんや」での忘年会（1954年12月）

昭和 30 年代初期の昆虫学教室学生大部屋物語

(086) 三枝豊平

I 初めに

私が九州大学農学部農学科に進学し、昆虫学教室への所属を認められたのは昭和 31 年 (1956 年) の後期だった。当時は 2 学期制だった。今は令和の時代、平成を超えてもっと昔の昭和、しかもそれを更に 30 有余年遡った時である。子供の頃に親が大正を超えて明治時代の話をするのを聞くと、それは遙か遠い昔の話のように感じていた。昭和 30 年代初期、想えばすでに 60 年前のこと、半世紀を過ぎている。そんな昔の九大昆虫学教室の学生大部屋の話である。近年、特に記憶が不鮮明になり、正確さに欠ける点もあるかと気がかりではあるが、その点は勘弁していただきたい。

私は昭和 31 年秋から 35 年度 (36 年 3 月) までの 4 年半を昆虫学教室の学部学生、院生として大部屋の方々と虫を相手の掛替えのない幸せな日々を送ることができた。修士課程を修了後に幸い当時の九大教養部生物学教室の教務員 (当時は文部技官) として採用され、六本松キャンパスでの勤務が始まったが、それを期に結婚した後も何年か箱崎キャンパス近くに住んでいたので、勤務の帰途にしばしば昆虫学教室の大部屋を訪れていた。今、大学は伊都に移り、全く新しい環境の中での昆虫学教室の状況からは想像もつかない日々が、箱崎にはあったことを以下に書き残したい。なお、今回は私が学部 2 年から 3 年にかけての時代の事柄にほとんど限って書き綴ることにする。

九州大学農学部昆虫学教室の開設百周年、この間、初代の江崎悌三先生から現在第 7 代の広渡俊哉先生まで 7 名の教授に親しく接していただいた者は、もう私など二、三の者だけになってしまった。光陰矢の如し、時代が足早に過ぎ去っていく。“目を閉じていればいくつも あざやかな場面が”。

II 建物

九州大学の箱崎キャンパスは、今は完全に更地になって、当時の面影はほとんど失われている。当時は、キャンパスの東、戦後建設されたコンクリート建ての理学部本館から道一つ隔てた先から東に、今の貝塚駅に向かって広がっていたのが農学部キャンパスであった。九州大学キャンパスの南を走る市道から農学部に入る農学部正門があり、ここから正面の農芸化学科 (当時) のコンクリート二階建ての建物に向かって幅広い道路が伸びていて、この道を挟んで両

側にコの字型の木造2階建ての農学科などの建物が並んでいて、東側が1号館、西側が2号館であった。農芸化学科の建物前のソテツ植栽を回るロータリーから右に折れた道路は、東の端の西鉄津屋崎線競輪場前駅（今の貝塚駅）に行く東門まで延びて、その両側に他の学科の木造の建物が並んでいた。

昆虫学教室は主に2号館の南の袖を占めていて、この建物にはほかに動物学教室、林禎二郎教授の蚕学教室、小嶋均教授の植物学教室、吉井甫教授の植物病理学教室などが入っていた。ネズミの平岩馨邦教授や甲殻類の三宅貞祥助教授、ネズミやコウモリの内田照章助手が在籍していた動物学教室は畜産学科であったが、昆虫学教室の兄弟講座のような存在であった。南側の袖の一階の端が昆虫学教室の学生・院生用の大部屋で、建物に入る数段の石段を上ると、その右に大部屋に入る重い引き戸があった。また大部屋とは道を挟んで北側に6坪程の平屋の昆虫飼育室の建物があり、ここはその後天敵関係の研究室兼学生室になっていた。大部屋の先の階段を昇って2階に行くと、大部屋の上が蚕学教室の学生室、突き当りの廊下を窓際沿いに右に曲がるとすぐ右側が、昆虫学教室の標本室兼会食室、部屋の左奥にある扉の先の隣部屋が教務員の大熊千代子さんと助手の平嶋義宏先生の部屋で、ここには一部の図書や標本類（北上四郎先生のアミカの液浸標本も）が置かれていた。更にその先が安松京三先生の助教授室、その隣が昆虫学教室の図書室となっていた。その先は一階へ降りる階段、階段を下りずに窓際の廊下を左に曲がると2号館の中心部で、ここに江崎悌三先生の教授室があった。

標本室に入ると左側は木造の標本ダンスが並び、右側はガラス戸棚、その先の窓際には大きな会食机が置かれ、ここで先生方の会食、会議、接客、大学院の単位になる標本整理など諸々が行われていた。国内外の多くの昆虫学者がこの部屋を訪れていた。2号館の木造建物がE字型になるように中央から1階の渡り廊下が伸びて、その先に用務員室、またその途中の南側に写真用の暗室があった。

私達が学んだ2号館はその後取り壊され、その跡には全学の図書館、1号館の跡には数階建ての農学部本館が建設され、昆虫学教室もそこに移転した。更に大学の伊都キャンパスへの移転によって、箱崎九大の本部、法文系建物、工学部、理学部と農学部や講堂などの全建物や植栽などは、その伝統とともにすべて消え去り、九州大学の歴史に大きな断絶が生じることになった。当時あった市電とそれに沿う道を隔てた北側の文系キャンパスも、また六本松の旧教養部キャンパスも無くなってしまった。将に今は昔、である。「私の九州大学」

は消え去って、今の大学は“伊都大学”である」などと、私は冗談半分にぼやく昨今である。

III 先生方

教授の江崎悌三先生は昆虫学教室の初代の教授で東大理学部動物学科を卒業されてすぐに農学部へ赴任された。北大の松村松年先生と並び称される世界的な昆虫学者であった。大変残念なことに私が進学した時には先生はすでに肺癌を患われておられ、十分に大きな声が出ないので、昆虫学の講義もメガホンを使われておられた。進学早々、私がミノガ科を研究したいと申し出たら、進学したばかりの2年生の私に、後に付いてくるように言われて、農学部の図書館に行き、二階の書庫で何冊かの図書をあたかも無造作に取り出され、下の事務室で借り出しを済ませて、私に手渡され、「これらはミノガについての論文で、ミノガは生態が大変面白いからよく研究しなさい」と言われたことを、今でも鮮やかに覚えている。年少の者にも分け隔てなく親身に対応してくださる先生だった。先生はそれからほぼ1年後の昭和36年12月にお亡くなりになった。先生が見通された通り、著しく多様性に富んだミノガ科の生態と形態の進化を私は研究して、その概要を論文にまとめることができたが、それを第一にお見せすべき先生がすでに他界されていたのが誠に残念であった。

安松京三先生は私が進学したときはアメリカにご出張中で、カリフォルニアで天敵の研究をされていておられた。先生はナナフシの成長の研究や有剣類の分類学の研究者であったが、ルビーロウムシの天敵であるルビーアカヤドリコバチを発見されたのを期に天敵研究に集中され、帰国後は我が国の天敵研究の発展に努められた。江崎先生の後を継いで第2代の教授に就任し、のちに生物的防除研究施設の設定に尽力された。また、後述するように先生は学生たちの就職について大変に力を尽くされた。私についても、昆虫作図能力を買っていただいて、ハワイ大学で Research Assistant にならないかとか、国立科学博物館への就職を勧められたこともあったが、厚かましくも私はそのいずれも遠慮もうしあげた。

平嶋義宏先生はこう言ったら失礼かもしれないが、当時は院生・学生たちの兄貴分のような存在で、気軽にいろいろな相談に乗っていただいた。ハナバチ類の分類と生態を研究されていて、花粉媒介昆虫としてのマメコバチの普及などもされておられた。第3代教授として安松先生の後を継がれ、のちに郷里の宮崎公立大学の学長を務められた。現在は96歳のご高齢ながら大変御壮健に

しておられ、時折お掛けする電話口では元気なお声をお聴きすることができる。

大熊千代子さんは高校を卒業後にクモの研究でご指導を受けていた江崎先生のご推薦で教室の教務員となり教室事務をしながらクモ類の研究を続け、その研究は定年で退官された後もお亡くなりになる直前まで続けておられたという。学位を「アシナガグモ類の研究」で取られた。千代子の名前から「チョンさん」の愛称でよばれ、教室の優しい姐御的な存在で、私などには弟のように接していただいた。研究に限らず思想面でも民主的な確たる立場を保ち続けた信念の女性だった。

以上の先生方が当時の昆虫学教室のスタッフであった。

IV 大部屋の学生、院生

農学部に進学した私は、当然のことで大部屋では最年少学生。当時の先輩達は以下のような錚々たる顔ぶれが大部屋におられた。おおよその学年あるいは年齢順では、中尾舜一、山本英穂、高橋三雄、日高輝展、川島健治郎、木船悌嗣、木元新作、森本桂、神谷寛之、尊田望之の皆さん、それに私。また昆虫飼育室には野原啓吾さんと村上陽三さんがおられた。中尾さんはセミの発生消長等生態学的研究で後に久留米大学教授になられた。山本さんは確か愛知教育大学を出られて昆虫学教室の研究生になり、中学の教諭をしながら、研究の中心は教養部の白水隆先生の所に置かれ、そこでゼフィルス系の系統進化の研究などをされていた。高橋さんは東京農工大学から大学院に入り、ガガンボやホソカノ分類学を専攻し、のちに国立予防衛生研究所（今の感染症研究所）で日本脳炎の媒介蚊などの研究をされた。大熊さんと同様に確たる民主的思想の持主で、私も多くの影響を受けた。日高輝展さんは宮崎大学から大学院に入り、ナガカメムシ科の分類を専攻し、教室の助手を経て農水省に入られた。川島健治郎さんは東京教育大学（現筑波大学）から大学院に入り、脈翅目の分類で、のちに述べるエピソードのように九大医療技術短期大学部（現医学部保健学部門）の教授となり、ダニ類や吸虫類の研究をされた。木船さんは京都大学から大学院に入り、有刺類やネジレバネ類の研究で、のちに福岡大学医学部教授。北九州市小倉の出身の木元さんは、ハムシ科の分類で、のちに彦山生物学研究所勤務を経て久留米大学教授。高知の出身の森本さんはゾウムシ類の分類で、のちに農水省で松枯れやシロアリの研究をされた後、最後は九大に戻って教室の第4代教授に就任された。神谷さんは長崎高島の出身、テントウムシの分類学研究とともに筑紫昆虫同好会を主宰されていた。後に結婚されて佐々治に改姓、福

井大学教授になられた。尊田さんは佐賀大学からの学部への転入で、植物防疫所勤務をされた。飼育室の野原さんは岩田久二夫先生がおられた兵庫農科大学（現神戸大学農学部）出身で、柑橘類の天敵研究をされて、のちに九州東海大学（現東海大学農学部）教授になられた。福井出身の村上さんはカイガラムシ類やクリタマバチなどの天敵研究で、のちに生物防除研究施設教授を務められた。以上の先輩方の他に、私が入学する前には日浦勇さんが学部を卒業されて、のちに大阪市立自然史博物館の創立に携わられた。私が3年生になった時に、1学年下の学部学生として、広瀬義躬さん、宮武頼夫さん、前田泰生さんの3人が大部屋の住人となった。更にその後矢野宏二さん、石川良輔さんも院生として加わった。矢野さんは大阪府大から大学院に、九大ではスカシバガ科やトリバガ科の分類を研究され、教室の助手になり稲作害虫関係の生態の研究をして、のちに山口大学の教授になられた。石川さんは東京のご自宅を研究の場にして、時折福岡にこられ、有剣類の分類、のちにオサムシを研究されて、東京都立大学の教授をされた。また、パキスタンからのアンワールアジムさんが天敵研究でこられていた。以上の方々が私の在籍していた昭和31年から32年頃のメンバーであった。いずれの先輩も、その後多くは大学で教職に就きまた研究所で重要な地位で活躍された。このように当時代の大部屋のメンバーを眺めると、いずれも九州大学昆虫学教室の一つの黄金時代を背負った方々であったと思う。

いま、多くの先輩は鬼籍に入ってしまったけれど、村上さん、石川さん、矢野さんの皆さんはご健在で研究や執筆活動を続けられている、日高さんからは最近の消息を得ていない。

V 大部屋の作りなど

さて、大部屋での話に戻そう。部屋の大きさは正確には覚えていないが。横幅は1m前後の机を8個ほど、主に中央を向くように並べてしかもそこに入る間があったので、10mあまりあったろう。奥行はそれの半分くらいか。中央には奥行の1/3程度の長さの実験台があり、その中央は大きな流しになっていた。部屋の左奥の隅にはドラフトがあった。ガラス戸棚なども2、3置かれていて、顕微鏡も収容されていた。学生たちの机は3面の窓側に置かれ、実験台の壁側には研究生の山本さんの机が置かれていた。入口近くから奥へ、川島さん、日高さん、尊田さん、神谷さん、木元さん、木船さん、森本さん、私、高橋さん、中尾さんと机が配置されていたように記憶しているが、余り自信はない。それ

それぞれ自分たちで白熱球の電気スタンドを用意して照明としていた。

大部屋の研究器具などとしては、大型の古い手動の英文タイプライター1台、島津製作所製の双眼実体顕微鏡が確か4台、他に昆虫飼育箱が数個、ナフタリンを融かす大型のヤカン、などがめぼしいものであった。言うまでもないが、パソコンはもとより電動タイプライター、顕微鏡照明器具、などは存在しなかった。アルミの笠のついた白熱球の電気スタンドの柄を曲げて実体顕微鏡で検鏡する材料に近づけて観察していた。カメラ類もあったが、今定かには覚えていない。おそらくアサヒペンタックスの初期の機種だったと思う。

VI 大部屋での研究生生活

昆虫採集用具はもちろん、標本箱や標本瓶、展翅版、昆虫針等一式はすべて学生が自腹で購入していた。アルコールや苛性カリ、殺虫管用の青酸カリや焼石膏などの薬品は教室で用意されていた。暗室には引伸ばし機、現像用のバット、現像液や定着液とその薬剤などが準備されていたが、文献や昆虫の撮影用のフィルム、ポジフィルムや印画紙はほとんどすべて学生が自腹で購入していた。

標本箱 研究用具類では、高価なインロー型標本箱の購入が学生にとっては大変大きな経済的負担であった。森本さんが机の後ろの壁の棚にゾウムシ類の収まった20個ほどの大型インロー箱を並べていたのが一番豊かだったと記憶している。私はミノガ科の研究をしていたが、将来はミノガと同様に地衣類食もいるコヤガ亜科の研究を志しながら、これらの標本を収容する標本箱を十分に入手できる余裕はなかった。先輩達が研究しているテントウムシやハムシ、ゾウムシ等は標本箱の中で場所を取らないが、蛾類は場所ふさがりでコヤガの研究は結局断念した。

標本箱には、粉末ナフタリンを大型の薬缶で熱して溶かし、これを箱の一边に流し込んで固めて防虫防黴にしていた（今も行っているが）。溶かすのにはドラフトを使ったが、時には熱し過ぎてナフタリンが自然発火して、黒い煤が小さな綿毛のようにドラフトからあふれて部屋の中に漂うというようなアクシデント、“原爆実験”もあった。箱に流し込んだ後にナフタリンから出た蒸気が空中で再結晶（昇華）して、微細な結晶がキラキラと室内を漂っていた。

標本ラベル ラベルの印刷は手押し小さな印刷機（名刺用印刷機？）が1台あった。鉛の小さな活字を一つ一つ拾ってラベルデータに組み、これを5 x 15 cm くらいの金属枠の中に入れて活字表面が平らになるように、木の板で

しっかり押さえてねじで固定し、金属円盤の上にインクをつけて回転させながら、これを 2 本のローラーで練って、ローラーのインクを組んだ活字につけ、インクのついた活字の組み版をケント紙に押し付けて印刷する、というのがラベル印刷であった。金属枠のサイズから組めるラベルは数枚。ローラーも自分たちで確かゼラチンなどを融かして作った。一度に印刷できる数は組んだ数だけなので、枚数を多く必要とする場合はケント紙をずらしながら何度も刷っていた。うっかりして、活字の締め付けが緩いと折角の組版の活字がばらばらに崩れ落ちてしまい、それらを拾い集めて組みなおすこともあった。

パソコンを使ってラベルデータを組んで、一瞬に A4 のケント紙に横 10 種類以上のラベルを何十枚でもプリントできる今の時代など、想像さえできなかった。同好会誌などは、今はまず見られない謄写版印刷であったが、これに長けていた神谷さんは、謄写版でラベル印刷をしていたこともあった。ガリ版と言えば、白水先生に頼まれて講義用のプリントの“ガリ切り”をしたこともあった。ガリ版と鉄筆を使って謄写版の原紙にきれいな字が切れる人は、これがアルバイトにもなった。

文献コピー 文献コピー作成は一仕事だった。当時はようやくマイクロフィルムが普及しはじめていた。それ以前の先生方は手書きで写されたこともあったという。大きな大学では図書館がマイクロフィルムの文献撮影に対応してくれた。暗室で引伸ばし機を使って一コマずつ三菱の薄手の複写印画紙に焼き付けて、現像、定着、水洗、そしてフェロ板の印画紙乾燥機で数枚を同時に乾かして、コピーが完成した。このコピーはサイズがコンパクト (15 x 21 cm) なので、私が今でも参照するのは、京大図書館に依頼したマイクロフィルムから焼き付けた 500 枚余りの A. L. Melander のオドリバエ科の *Genera Insectorum* (原本は大判 25 x 37 cm) である。

文献コピーと言えば、ある日、私が大英博物館の R. L. Coe 博士から de Meijere の旧北区のヤリバエ科の総説のコピーを送っていただいた。“普通の紙”に写真のようなコピーがされていた。当時の院生達には全く未知の不思議なコピーで、みんなでどのようにしてこのようなコピーができるか頭をひねったが当時は結局わからなかった。今にして見ればゼロックスコピーに過ぎなかったが。今ではゼロックスはもちろんのこと、文献は pdf の形で入手可能で、パソコンとコピー機で容易にコピーが作れる。しかも、インターネットを通じて Biodiversity Heritage Library のようなサイトから外国の古い文献の pdf が容易に入手できるようになった。この点でも研究条件は超飛躍的に改善されていて、

今昔の感がある。

解剖用具 昆虫の解剖の必需品はピンセットである。志賀昆虫普及社の当時ピンセットは、細部の解剖のために、オイルストーンで細く研くと、ステンレスの柔らかい鋼質のために“なまくらで”曲がったりして十分に用をなさなかった。そのころ石川さんが画期的なピンセットを紹介してくれた。今でも使っている時計修理用の硬い鋼質のピンセットである。このピンセットが紹介されてから、細部の解剖が飛躍的に進むようになった。今は志賀昆虫普及社の3C型ピンセットが鋼の質では優れているが。

実体顕微鏡や照明器具 双眼実体顕微鏡は島津製作所製が確か4台しかなかったもので、朝寝坊をして遅く教室に現れると、その日は顕微鏡を確保できず、他の作業をするしかなかった。倍率も最大70倍くらいだったと記憶している。昆虫学教室にこれが残っていたら記念に保存してほしいし、最新のものと比べてみたらいいだろう。顕微鏡の照明装置はなくて、前述のようにアルミの筐のついた白熱球の電気スタンドの柄を曲げて材料に近づけて観察していた。時には電気スタンドが知らぬ間に倒れて、熱で木の机の板が焦げることもあった。

もし当時LEDのリング照明があったなら、まさに未来の世界から現れた夢の照明器具であったろう。暗い照明で、目を凝らしながら交尾器などの細部の解剖をしていた。

タイプライター 大部屋には前述のように大型の古い手動の英文タイプライターが1台だけあった。英文論文はこれで仕上げていた。私は修士論文だけであったが、博士論文等を書かれていた先輩はどうだったろうか、今は思い出せない。インクリボンをキーで叩いて紙に印字する。間違るとホワイトで消して打ち直す。その後修正テープが手に入り、誤字の所にテープを当ててその上から打って消すことができるようになったのは、大袈裟に言えば革命的であった。間に複写紙を入れて2枚のコピーをつくることもあった。電動のタイプライターが普及し始めたのはその後しばらくしてからである。

現在の機種に比べるとかなり機能性が劣っていたが、ワープロ、パソコン、プリンター等が普及するに及んで、上記の不便さは一気に解消された。論文作成に限らず様々なデータをパソコンに取り込んで活用できる現在の状況が当たり前のような研究環境は、当時は想像さえもできなかった。

夜間採集 今ではその風景が見られなくなったが、笹崎宮の放生会などで露店が明りに使っていたのは懐かしいアセチレン灯である。二つの円筒をナットでしっかりと固定し、下の円筒の缶には石の塊のようなカーバイトをいれ、上

の缶には水を入れる。上の缶の底の小さな穴から少しずつ水滴が下のカーバイトに滴下してアセチレンガスが発生する。水滴の量を調整するねじがある。生じたアセチレンガスは下の缶から上の缶を貫通して伸びている金属管を通してその先の火口から出て、そこで燃えて明りになる。当時の夜間採集はこのアセチレン灯と材料の石のように重いカーバイトを背負って現場に行き、白布を張って行っていた。水滴の滴下位置とカーバイトの位置、滴下量で、アセチレンガスの発生量がまちまちで当然照度もばらつきがあった。燃えてる火口には、“飛んで火に入る夏の虫”もあった。

思い出と言えば、重いカーバイトを背負って南アルプス仙丈ヶ岳の北沢峠で夜間採集を試み、変わった翅の模様のガガンボの仲間を採って、のちに高橋さんに差し上げたら、珍しいアルプスニセヒメガガンボであると大変喜ばれた。また、明りに向かって地面を歩いて近づいてきた短翅型の雌のシリアゲモドキを宮本先生にお見せして大層珍しがられた思い出もある。この手の雌の最初の発見であった。

今、小型の発電機、捕虫用の蛍光管、林道を車で現地に出かけてナイター装置をセットする時代からは想像もつかない、苦勞の多い夜間採集であった。

エアコン 現今、エアコンを設置するのは家庭はもとより大学での研究室でも当たり前のことである。しかし、当時はエアコンの存在すら知らなかった。大部屋の中は夏は暑く、窓を開けると風で机上の整理中の虫が飛ばされ、冬はストーブで暖をとった。昆虫飼育室では一定温度での飼育が必要であったが、もちろんエアコンはない。安松先生のアイデアで当時は大型の扇風機を回して濡れた布に風を当てて、気化熱を奪い、空調の足しにしていたように記憶している。

消灯 当時は大学の電気代の節約のためと思われるが、確か夜 10 時になると大学の電気が止められた。消灯時間である。消灯時間が近付くと、解剖や標本作成などの作業をしていた机上をあわただしく片付けて、研究室を後にする準備に追われた。やむを得ず遅くまで電気が必要な場合は、12 時までの「延灯願ひ」という、今では死語のような書類を事前に学部の事務室に出すことになっていた。うっかり延灯願ひを出し忘れて、突然に消灯になり、暗闇の中を手探りで帰ったことも幾度かあった。思えば消灯時間のために結果的には生活のリズムができて、その後に銭湯に出かけたり、ゆっくりした時間が持てた。

議論 学生、院生の間で研究に関してかなり活発な議論を行っていた。先輩に対しても遠慮なく持論をぶつけることができる民主的な雰囲気は保たれて

いた。分類学の方向性、比較形態学の勧め、生物地理学の方法論、ハムシの幼虫の形質の評価、等々、いつもどこかで学生同士が議論をしていたように覚えている。私は教養部学生の頃に白水隆先生や形態学者でもあった宮本正一先生の薫陶を受け、また山本さんのゼフィルス系の系統論の研究を横で眺めてきたので、学部に進学してから、先輩たちの研究が記載分類学に偏っているという印象を抱いた。最年少でありながら生意気盛りの私は、このような意見の言いたい放題であったが、先輩たちは寛容に暖かく包んでくれた。民主主義が生きている大部屋であった。

学会講演 学会講演の図表は、すべて大型の模造紙（多分四六版 788 x 1091 mm）にポスターカラーや多分当時入手できたマジックインキで手書きで作成していた。学会講演の場ではこれ等の図表をT形の木枠に画鋲で止めて演台の後ろ張られた針金に吊し、これを説明した。今のポスター講演では1枚のパネルを前に演者が説明をしているが、これに似たところがあった。講演が始まるとぞろぞろと会場係がパネルを何枚か運んで吊し、終わるとまた次の講演のものを取り換えるという手順であった。

時代が過ぎて、その後スライドプロジェクター、そしてOHP（オーバーヘッドプロジェクター）が普及し、最近ではパソコンと「プロジェクター」によって、容易に講演関係の画像や映像を映写できるようになったが、前述のように今では信じがたいような私達の学会講演であった。

海外交流 江崎先生や安松京三先生が諸外国の研究者と豊かな交流をされていたので、昆虫学教室には国内の昆虫学者に限らず外国研究者の来訪も折々あった。ハワイ Bishop Museum の Dr. Gressitt やカリフォルニア大学の Usinger 教授、ハワイ大学の Nishida 教授など著名な世界の研究者に私達もお会いできる機会が持てたのは幸運であり、それを通じて国際的な観点を養うことができた。特に、Gressitt 博士との関係では、木元さん、宮武頼夫さんをはじめ多くの院生が Bishop Museum に招聘されて、東南アジアの昆虫の分類の研究をすることができた。私もその一人で、同時に平嶋先生や琉大から来た東清二（東平地）さんもおられた。

VII 遊び等々

バドミントン 大部屋の学生たちの日常の楽しみの一つはバドミントンであった。昆虫飼育室、2号館袖と渡り廊下でかこまれた空き地は、周りの建物で風の影響がおさえられて、バドミントンには最適のコートになった。みんな

揃って理学部学食で夕食を済ませた後は、このスペースにネットを張ってバドミントンに興ずるのが日常であった。この試合では各人の運動能力の違いが如実にあらわれた。最も上手だったのはパキスタン留学生のアジムさんで、小柄でありながら細かく敏捷な動きで、ネット際のテクニックも抜群、敵なしだった。神谷さんとそれに続いての木元さんが一番下手で、神谷さんは足が少し悪かったこともあり、動きはぎごちなく、また、木元さんはミスすると不機嫌な表情を浮かべるのが印象的で、「おもしろくない！」が口癖だった。バドミントンですっかり汗を流して、大部屋に戻り再び研究に取り掛かる毎日であった。

相撲 バドミントンとともに私達が夕食後に楽しんだものに相撲があった。毎日ではなくて、たまたま思い付きで始めるのだが、みんな結構熱中した。バドミントンでは少々及ばなかったが、体格がよくて力持ちの木元さんにとって相撲はご自慢の場であった。バドミンントンの憂さを晴らすがごとく、大活躍されて、敵なしだった。得意技が鯖折り。私もこれをやられて、いささか腰を痛めたこともあった。バドミントンコートの横や、植え込みの下の芝生で、取り組んだものだった。このようなスポーツを通じて学生同士の絆が更に深められていった。

将棋 教室の中には将棋盤が一つあって、しばしば将棋をさしていた。神谷さんも将棋がかなり好きで、余り上手くない 1 学年下の私をご指名で。「三枝君、いっちょやろうか？」と、優しい面持ちで勧められると断り切れなかった。高橋さんがかなり優れていたように覚えている。いつだったか、入り口近くで高橋さん（多分）がどなたかと将棋をさしていた。その時に江崎先生がそっと現れたので、みんなこれはまずいな、と固まった。しかし、対戦している本人たちは将棋盤に集中していて先生に見られていることなど露知らず熱戦を続けていた。そのうち、対戦を静かに観戦しておられた江崎先生が突然、「その飛車の動きはどうか？」と言われて、初めて対戦していた二人が先生に気付いて、愕然として恐縮したこともあった（駒の種類は覚えていないが）。江崎先生も将棋がお好きであった。

サクランボ事件 亡くなられた人のことを書けるのは生き残っている者の特権のようなものであるが、次の逸話は必ずしも本人には不名誉なことではないので書き残しておこう。木船さんはラテン音楽、特にタンゴに造詣が大層深く、確か地元 KBC ラジオ放送のタンゴ番組の解説もされていた程である。そのころ香椎の福岡女子大学の学生たちが学園祭の関係などで昆虫関係の相談に大部屋を訪ねることが時々あった。2、3 人の女子大生の中で丸顔のポチャッ

とした子がいて、私達が「さくらんぼ」というあだ名をつけていた。タンゴも好きな彼女ら、特にサクランボは木船さんのお気に入りであった。木船さんがタンゴに熱中し過ぎていた(?)ためか、安松先生が彼の研究状況を大変心配されて、当時ゴルフが普及し始めた頃で、ゴルフ場用の芝の害虫の天敵の研究をさせようと言われていた。先生がわざわざ実験用の芝を持参されて、それを木船さんが実験台の上の飼育箱に収容しておいた。もとより有剣類が専門であるから、木船さんはあまりその世話などしていなかったようだ。春休みで彼が大阪に帰省していて、早めに戻らなかった時に、安松先生が大部屋に来られて、放置気味の芝を見て、「木船君はいったいどうしているのだろうね」と不機嫌そうに心配された。これはまずいと思い、先ず我々から木船さんに大学に早く戻るように連絡しなければと考えた。電報を打とうということになり、さて文面をどうするか。そこで森本さんが提案したのが「サクランボ食われた、すぐ帰れ」であった。それだけではない、発信者として、その後に「安松」を入れることにして打電した。「さくらんぼくわれた、すぐかえれ、やすまつ」である。森本さんのお茶目な一面でもある。もちろん安松先生の承諾等得るはずもない。程なく木船さんが戻ってきた。しかし、彼も動じることなく、何事もなかったように安松先生に挨拶に行かれて、私達には「電報有難う」くらいの対応であったかと記憶している。このようなことが受け入れられる当時の教室の大らかな雰囲気であった。

あだ名 大部屋の学生・院生たちはお互いに切磋琢磨し、かつ協力しあって研究を進めてきた仲の良い集まりであった。あだ名で呼び合うのも親密さを現わしていた。森本さんは名前からケイチャン、村上さんは同じくヨウチャン、木元さんは何となく怖そうで、シンサクさん、私はなぜかオヤジとかいわれた。木船さんには直接呼びかけなかったけど、エル・タンゴ。そして、神谷さんがセンニンだった。彼は箱崎新楽町の農家の一角の部屋、山羊小屋の横に住む酒好きの仙人でした。中尾さん、高橋さん、山本さん等年長の方々には、姓で呼びかけていた。時代がすすんで、ポッキン先生、軸の旦那、とつあん、天ちゃん、にゃんごさん、たいじん、とりさん、ポンコツ先生、等々のあだ名も付けられていたが、果たしてどなたのあだ名だったか。それぞれのあだ名には、なるほどといういわれがあった。

先輩には尊敬の念を持ちながらもあだ名で親しく接することができた時代である。

川島さんの就職 昨今、大学院を出てから専門の研究を生かせる就職の困難

さは、一段と厳しくなって、日本の将来的な自然科学の基礎研究の衰退につながる点が大変心配される場所である。安松先生の偉大な一面は弟子の学生たちの就職に大変な力を注がれたことであつた。前述の先輩たちの就職先は、本人たちの努力もさることながら、安松先生のご尽力に負うところが大きかつた。そのような中で次のようなエピソードも、当時の就職事情の緩やかさをも現わしている。

ある日森本さんと二人で近くのバーで歓談していると、森本さんと同郷の医学部の院生が入ってきた。九大医学部の寄生虫学教室の所属とかで、話が弾むうちに、実は寄生虫学教室で一人助手を雇いたいのだが、来てくれそうな適当な人が見つからない、とのことで、私達にだれか心当たりはないだろうかと言われた。そのころ川島さんが私立高校の生物の非常勤教諭をアルバイトでしていた。私達の下宿の数軒西隣の「プランタン」という喫茶店の裏に川島さんが結婚して住んでいたのが、夜中であつたが、酔いに任せて叩き起こして、出てきた川島さんに、「医学部寄生虫学教室の助手になりませんか」と突然話かけた。川島さんは酔っ払いがなんの戯言を言っているのか、と思つただろうが、翌日まともな話と分かつて、これを受けることになつた。彼はその後寄生虫学教室の助手を経て医療短期大学部（今の医学部保健学部門）の教授となり、寄生虫学、特に吸虫類の優れた研究者になられた。

運命とは偶然と必然が絡み合つて織りなすものというのを地で行くような話であつた。

飲み会、コンパ 箱崎の下町には学生相手のいくつかの飲み屋や食堂があつた。当時の西鉄市電の終点、九大前停留所の前には“サヨン”という洋食屋があり、そこで働いている姉妹が九大生には評判で、姉さんの方が美人だつた。私達はよくカレー等食べに行った。

時折飲みに行ったのは、懐かしいトリスバー“窓”。箱崎の通りを西に進んで派出所をこえ、すぐ先の角を左に曲がつたところにあつた狭い間口のスタンドバーで、山本さんお気に入りの美人のマダムがいた。狭いカウンターの椅子に並んで座つて、山本さん、森本さん、神谷さんらと安いトリスウイスキーのグラスを傾けながら、遅くまで四方山話にふけつたものである。店の前の道も今は拡幅され、北に抜けるようになった。懐に余裕がある時には筥崎宮により近いところ、鳩マーケットの先に、“バッカス”というバーがあり、ここは店の女性が同席してくれる類の店であつた。それもあつて無理してウォッカ、ジンなどの強いリキュールを注文して、ひとときの酔いを楽しんだものである。奨

学金を受けていて少し経済的余裕のある院生が面倒を見てくれたことが多かった。

学部進学生や卒業生などの時期や、教室に来客がある時など、コンパをするのが常であった。“ちんや”という店のたしか2階で大騒ぎをしたものである。酔っ払って相撲を取ったり、どんちゃん騒ぎで気分を開放していた。このような飲み会も学生・院生仲間の楽しい交流の場であった。

60年安保 時が少し過ぎて1960年、私が修士課程2年の時であるが、新日米安全保障条約、いわゆる60年安保の発効を巡って6月を中心に東京の国会周辺はもちろん日本中でこの条約に対する反対運動が革新政党、労働組合、学生一般によって激しく繰り広げられた。東大生の樺美智子さんが国会で機動隊との衝突で圧死したのも象徴的な出来事であった。大部屋の院生、学生の多くもこの反対運動に参加して、市役所などで大掛かりな街頭反対デモ、いわゆるジグザグデモもやった。すでに、私より学年が若い幾人かの学生・院生が大部屋の住人になっていた時代のことである。学生・院生が国内外の政治状況について強い関心を持って、主義主張を表明し、政治を変えようとする機運が明らかかな時代であった。

VIII 大部屋周りの木々

農学部キャンパスは建物の周りが広く植え込みで取り囲まれていて、様々な樹木が植栽されていた。また北側はかつての海岸に近かったのでクロマツの林であった。当時でも太い松の幹に矢羽根型の下向きの傷がたくさん残っていた。聞くところによるとこの傷は第二次大戦中に松脂を採取するためにつけられた跡で、この松ヤニから飛行機の燃料の油を取る目的であったという。あの大戦で日本が勝てるはずもなかった。キャンパスが更地になった跡も、これらの松が残されるのであろうか。

大部屋の周囲の思い出の木々について最後に触れよう。

昆虫飼育室横の竹藪 昆虫飼育室の西側に接して5m四方くらいの範囲にびっしりと茂った竹藪があった。どちらかと言えば笹に近いような細めの竹（リュウキュウチク）であった。記憶の範囲では、この竹は農学部の植物関係の過去の先生が種から播種して育てたもので、次に開花するまでの年数を調べている、という大事な実験用の竹藪であった。誰とはいわないが、院生の中には、藪が邪魔だから塩素酸カリを撒けば簡単に枯らせる、などと説く者もいた。2号館が取り壊されて、図書館になり、この竹藪は近くに移植されて、その後良

く茂っていた。しかし、伊都への移転で、広渡教授によると今度は篠栗町の演習林に移されたとのことである。

ホオノキ 大部屋の西側に接して2本（確か）のホオノキが広がり、大きな葉で樹陰を作って大部屋への夕日の直射を遮ってくれていた。初夏には白い大きな花をいくつもつけて、夜に教室を後に宿に帰る時にこの下を通ると、あたり一面に馥郁とした香りを漂わせていた。この木の下での芝生でもよく相撲をとった。

ユーカリ 2号館の袖とその横の事務や農業土木科の一部の建物（後に生物学的防除研究施設が使用）の間の道路の際に2、3本の大変背の高いユーカリが聳えていた。2階の標本室の窓から外を眺めると、これらのユーカリが目の前に丸い葉を風で揺らしているのが見えた。何時だったか、ちょうどユーカリと建物の間の空間をホバリングする微小な銀色の虫の群飛がみられた。陽を浴びてキラキラと輝いていた。長竿を使って採ってみると、シロガネコバエ科 *Milichiidae* の *Milichiella* の1種であった。

ニンジンボク 2号館のメインの部分の道路側も樹木が豊かに植栽されていた。この中に青い小さな花が群がって咲くやや低い樹木があった。これが開花するとキャンパス内で発生する様々な蜂類が吸蜜に集まってきて、蜂の採集や観察に最適であった。名前はニンジンボク。その後しばらく年月が経って、この木がかなり切られたことがあり、“天ちゃん”がひどく憤慨していたのが印象的であった。

この他にもミカドアゲハのタイワンオガタマ、ヒメミノガ記載のタイプ標本が採集されたはずの丈の低いクロマツ、ブラシノキ、大王松などなど、数えきれないほどの種類の樹木が植栽されていた。緑濃い豊かな懐かしい農学部キャンパスであった。

昭和31年から32年にかけての昆虫学教室の主に学生・院生、それを取り巻く人々や事柄を思い出すままに綴ってみた。現在の伊都の新キャンパスでの研究室の院生・学生にとっては、このような当時の状況は想像もできないものであるが、この時代の院生・学生は、今考えればこのような厳しい条件のもとでも、しっかりと研究を続けてきたものである。

時代はまさに石原裕次郎が日活映画で活躍していた懐かしい頃である。

“そして、時が少しだけ
うつり変わって
すべて過去の思い出に変わってしまった“
(阿久 悠、あざやかな場面)

おわり

後記 それから 10 余年後、1970 年前後には 70 年安保闘争という大きな政治的な変革の時代がおとずれ、これと軌を一にするかのように、生物的防除研究施設でのある軋轢に端を発して、九州大学の昆虫学、さらには日本昆虫学会全体を揺るがすような大きな変革の波が現れてきた。その 2 年前には建設中の電算センターの建物に板付米軍基地のジェット機が墜落事故を起こして、大学を上げての基地撤去運動も行われた。時代は決して本文に述べたように穏やかな時を刻んできただけではなかった。これについてはまたどこかで回想する機会があるかもしれない。

(付記 広渡俊哉教授からは記述で不明な点や昆虫飼育室横の竹藪のその後について教えていただいた。宮武頼夫さんからは内容に誤りがないかチェックしていただいた。“ちんや”については村上陽三さんにお聞きした。記して謝意をあらわします。なお、本稿を読んだ身内が、“文中のあだ名がどなたを示すか分かれば、記録としていいのでは”、との指摘を受けた。イニシャルに限定すれば以下の通りである。ポッキン先生 (Y.MT.)、軸の旦那 (Y.H.)、とつつあん (Y.MD.)、天ちゃん (T.KW.)、にゃんごさん (H.K.)、たいじん (J.Y.)、とりさん (M.K.)、ポンコツ先生 (T.KT.)。)

疎開した標本

(088) 矢野宏二

私は 1957 年（昭和 32 年）に大学院に入り、1977 年に山口大学へ移るまで 20 年間昆虫学教室でお世話になりました。院生 5 年、研究生 2 年、助手 8 年、助教授 5 年の 20 年ですが、その中でも大部屋での院生生活と超多忙の助手生活、とくに後者の年月が身体にこびりついています。その一端を下記に。

飼育室の人たちも随時加わった大部屋での時間は、夫々の研究対象の分類群やテーマに関する話題がとびかい、動かずして知識が身につく時間でした。

学食で昼を食べ、2 階の会食に座ると、内外の訪問研究者に会うことが多く、この刺激は大でした。江崎先生が手術のあとで普通に食べられず、取り寄せたうどんをゆっくり食べておられた様子は忘れられません。院生でしたが学部の江崎先生の講義に出ると、声が出にくいので、マイクを使って話されていました。

助手になってからは毎日が戦場のような多忙さでした。安松先生、平嶋先生が関係される学会誌など（Mushi、Pacific Insects、九大農紀要、同学芸雑誌、昆虫、Acta Hymenopterologica、Esakia など）の原稿、校正、印刷などの仕事が関係者の間を年中動き廻っていました。

「昆虫」の発送では学生数人が秀巧社に行き、封筒入れの作業をしました。帰りに天神でチャンポンを食べさせてもらうのが定例でした。出張校正で同社へ行った時、工場で壁一面の活字を見たのも忘れられません。

教室ではセミナーが無かったので、高橋三雄さんの提案で院生だけでセミナーを始めたこともありました。セミナーは無かったのですが標本整理の日があり、いろんな分類群の整理をしたことは有益でした。

1960 年代後半は日米安保、大管法反対の学生運動が吹き荒れ、本部に続き教養部が封鎖され、他学部もその恐れで緊張しました。そこで各教室に寝泊まりすることになり、助手が指示されて泊まりました。助手たちはそんな相談にあずかっていないのにと、ぶつぶつ言いながら。

この時には安松先生、平嶋先生も重要書類や一部の標本を自宅に避難されました。また、入試の受験票も本部封鎖に巻き込まれたため、助手が動員されて試験室の受験生の顔写真を撮るということもありました。

学生が教室を占拠するため標本タンスをごろごろところがすことを想像すると教室の人間は息の根がとまる思いでした。そこで、せめてタイプ標本だけ

でも守ろうと、彦山生研に運ぶことになり、私が農学科の車を運転し、中立的な留学生の申さんや学生2人に標本箱を重ねてひざにのせて彦山まで走りました。普通の標本ならクッションを使って箱に入れて積めたのですが。というわけで、疎開児童のように寝床や食事の心配はありませんでしたが、また下山するまで逃避した次第です。

1968年6月には、建設中の工学部の大型計算機センターに米軍のファントム戦闘機が墜落炎上しました。夜中でしたが教室に残っていた鳶、本田、山口君らからスタッフに電話。翌日には数人の教室同窓から電話、電報で見舞いが寄せられました。

標本といえば木造の旧2号館から新1号館へ教室が移動した時、業者が荷物を運んだのですが、標本タンスについて平嶋先生がきびしく注意されたので、業者の一人は陰で「あの先生は・・・」とぼやいていました。標本に対する研究者の持つ微細さと重要性の感覚と一般の人のそれとの差でしょう。

前記した各種印刷物にかかわるものとは別に、主に安松先生が関係された内外の会議、研究会、研究班や個人的な交流による内外研究者の教室訪問は年中あり、助手の私はその送迎にも係りました。助手になって2年目に農学科と生防研共有の車が来てからは、その運転をし、駅、空港、ホテル、彦山、歓迎会場、採集地などを走りまわりました。

安松先生が実施された日米科学協力研究、学振や科研費による海外調査に他の方々と一緒に参加し、アジアの国々で野外調査を行ったことは貴重な経験になりました。これらの終了後も調査国や日本の共同研究者との交流が続き、研究生活が豊かになりました。

安松先生が退官後タイに滞在されていた期間、助教授になっていた私と種々の連絡を手紙でし、私が山口に移ってからも続きました。お互いに番号をつけて確認していましたが、たしか80通を超したと思います。全てペン書で、離れた秘書、助手役で、今ならメールでしょうが、文献や資料の郵送も多々ありました。

このような多忙な生活から得られたものは文献から得られるものではなく、実に貴重なもので、その後の研究教育の土台になったのでした。

九大昆虫学教室時代の思い出

(091) 宮武頼夫

この度は、昆虫学教室開設 100 周年、誠におめでとうございます！！

ひこさんがらがらの会会員名簿をみると、私の番号は「91 番」で、辛うじて 2 桁代に入っています。江崎先生、安松先生や白水先生に憧れて九大へ入学（倉敷からの広瀬義躬さんと一緒に）したのが 1956 年 4 月、翌 1957 年の秋から昆虫学教室へ進学したので、この時初めて会員の仲間入りとなりました。学部の講義が始まって、一番期待したのは、江崎先生の昆虫学の講義でした。しかし、先生は日本昆虫学会の会長をされており、40 周年記念事業の準備などで上京されており、10 月いっぱいには講義はありませんでした。それだけに、11 月 8 日（金）に講義があると聞き、有頂天で出席しました。先生は健康を害しておられ、声が出しにくい様子で、マイクを使って話されましたが、久しぶりに教壇に立たれ、嬉しそうに見受けられました。その後先生の病状は悪化の一途をたどり、12 月 14 日にお亡くなりになってしまいました。この時の講義が最初で最後になってしまったのです。この時のようすを、「江崎先生と最後の講義」というタイトルで、ひこさんがらがらの第 5 号（1958 年、pp.25-28）に書きましたが、全文が 1984 年 10 月に刊行された、「江崎悌三著作集第 2 巻」のはさみこみ月報に再録されました。こうして私と広瀬さんは、奇しくも江崎先生の最後の弟子であり、安松先生が教授になられてからの最初の新弟子となったのでした。

私は香川県善通寺市（生まれた時は仲多度郡善通寺町）の農家の 4 人兄弟の三男でしたが、江崎先生も三男だったそうで、何か親しみを感じました。安松先生もお名前からすると、三男だったかもしれないと思いますが、どうだったのでしょうか？三男だと、比較的好きな道に進めて、昆虫学など専攻できたのかなと推察します。

その後、1967 年 5 月に大阪市立自然科学博物館（現在は大阪市立自然史博物館）へ就職するまで、のべ 10 年間近く昆虫学教室にいたわけですが、1960 年 5 月から 1962 年 4 月までの 2 年間はホノルルのピシヨップ博物館の研究員で出ていましたから、実質 8 年間くらいを過ごしたことになります。大部屋で大学院の先輩諸氏から指導を受けながら、楽しく研究することができました。

教室での一番頭に残っていることは、昼休みの二階での話し合いの場でしょうか。ほぼ毎日、先生方や院生、学部生みんなが集まって、色々な話を聞いた

り、話したりと大事な連絡やコミュニケーションの場になっていました。当初は何回か江崎先生も居られて、興味深くお話を聞きました。我々学生は早めに生協で食餌を済まして2階に上がると、安松先生はいつも奥様手作りのトーストサンドを召し上がりながら、昔の事とか、外国でのご経験など話して下さいました。時に国内外から先生にお客様があって、一緒に頂いたお土産を頂きながら、団らんすることも多かったです。安松先生のお誕生日は2月29日だったので、4年に一度のその日は自祝と称して、大皿に山盛りの薄皮饅頭を出して下さい、みな大喜びで賞味しました。話のあいまに先生はさりげなく指示や注意、アドバイスなど出して下さって、とても有意義なミーティングでした。

この貴重な昼間のミーティングを時々破ったのは、みんなのバドミントン狂いでした。大部屋の外の空き地にネットを張って、昆虫の部屋の人たちだけでなく、動物や病理の教室の人たちも参加して大いに楽しみました。運動神経に秀でた平嶋先生と組むと、下手な私でも勝つことができ、大いばりでした。毎日昼前に大学へ行き、まず昼食を食べて、1時間ほどバドミントンをして、午後いっぱい研究に時間を費やし、夕食を食べてからまたバドミントンをし、夜中まで研究をして、箱崎の居酒屋で呑んで、日が変わる頃下宿に帰りという毎日でした。雨の日はもちろん2階でおとなしくミーティングに参加しました。このバドミントン狂いは、大阪の博物館へ就職してからも続き、建家が廃校になった旧小学校の校舎だったので、天気の日は大庭で、雨天の日は体育館で腕を磨きました。

キジラミの採集には、北海道から沖縄まで、全国を回りましたが、やはり一番印象に残っているのは、彦山生物学研究所でした。後に幼虫が白い貝殻状の皮膜(lerp)を作ることが判明したエノキカイガラキジラミを最初に発見したのは、研究所下の谷沿いの道でスウィープしたときでした。研究所の管理をされていた教員は、黒子浩先生、木元新作氏、中條道崇氏と続きましたが、どの人の時も行っているの、よほど通ったのでしょう。

九大農学部自動車部に入っていたので、自分で運転して行ったこともあります。黒子先生に以前からの日誌を見せていただくのも興味深く、時には先生のお話を聞かせていただくこともありました。屋上に常設のライトトラップ装置があって、飛来する蛾や甲虫が魅力的でした。木元さんの頃までは、食事が出て、夕食の鯉の洗いが楽しみでした。

私はもともと内気で無口で、初対面の人とのコミュニケーションが取り難いタイプでしたが、1960年5月からほぼ2年間、ホノルルのビショップ博物館の

研究員として出向して、すっかりアメリカナイズされ、性格がすっかり変わってしまいました。苦手だった英語も、向こうの人たちとしゃべったり、英文の手紙や論文を添削してもらう内に、かなり上達しました。1962年に九大へ帰ったあと、平嶋先生に英語の手紙を添削していただいた時、「君は旨くなったね」と言われたのを思い出します。博物館では週の半分は標本のソーティングなどをして、後の半分は各地のキジラミの標本を検鏡してスケッチやメモを作りました。日常の生活は刺激に乏しくまったりと過ぎていきますが、日本や米本土から来る虫屋や科学者、芸人、作家など沢山のの人に会えて、日本では味わえない思いをしました。1961年12月に博物館を訪れた、「どくどくマンボウ昆虫記」の北杜夫氏とは気が合って、下町で一緒に食事をしました。タヒチへの旅から帰った時も食事しながら、旅行中に見た昆虫の話などを伺いました。この時の様子は、「南太平洋ひるね旅」に書いてくださっています。その時以来彼のファンになり、次々発刊された著書が今も棚に並んでいます。1960年の9月にホノルルで開催された、Pacific Science Congress には多くのお客さんが日本や米本土ほかから来られ、宮地伝三郎、上野益三、森下正明、内田亨、筒井嘉隆のお歴々を、安松先生と一緒に空港へ逐次お迎えに行き、私のボロ車でホテルへ送迎しました。

もっとも記念すべきは、上皇様がまだ皇太子の時代に博物館へ来られ、館長とともに展示室をご案内したことでしょう。上皇后様からはお生まれになったばかりの浩宮様（現在の天皇陛下）のお話も伺いました。上皇様からは、弟の義宮様が昆虫好きなので、ハワイの蝶の標本をお土産にしたいとおっしゃったので、上司の Gressit 博士から許可をいただき、カメハメハバタフライなどを標本箱に詰めてお渡ししました。その後ご本人から直接お礼状が届きました。

昆虫学教室時代の思い出は、ほかにも数え切れないほどありますが、このくらいで筆をおきます。後輩の皆さんに言いたいことは、自分の研究成果で、オリジナリティーのあるものは必ず公表して、昆虫学をどんどん進歩させて欲しいということです。



写真1 江崎先生のご葬儀時の担当章 写真2 エノキカイガラキジラミ♂と
幼虫の皮膜 (lerp)



写真3 ハワイへ出発直前（1960年5月、左から安松、佐々治、加藤、
河原畑、大熊、筆者、木元）

1960
九月三日
宮武頼丈君に
おノルルでお逢いしました
思いがけず
江崎君の旦那後の
兄弟子
内田亨

写真4 内田亨氏のメッセージ



写真5 上皇様をお見送り（ビショップ博物館玄関にて）

Diapriidae の分類をやりなさい。君は明日から世界的権威者です (106) 中筋房夫

1961年九州大学に入学し、1年半六本松での教養部を終えて、箱崎の農学部昆虫学教室に進学した。当時昆虫学教室は木造2階建ての建物に入っていた。2階には安松京三教授、平嶋義宏助教授、矢野宏二、日高輝展助手、大熊千代子教務員（クモの分類学者）が居られた。1階に大部屋があり、学生の居室になっていた。

進学して間もなく、安松先生の研究室に呼ばれた。かすかに樟腦の匂いがする落ち着いた雰囲気の研究室であった。座るや否や、先生から研究テーマが「下げ下された」。最近外国で公表された *Diapriidae*（クロコバチ上科、ハエヤドリクロコバチ科とでもすべきと思うが、科の和名さえ無かった）の記載論文別刷り2冊を手渡され、「ハエの寄生蜂です。この分類群の研究者は世界でも数人しか居ません。勿論日本には一人も居ません。従って君は明日から権威者です」。

私は神戸の出身で、小学生の頃から狩り蜂が好きだった。古い蚊帳布で作った手製の網と、綿にベンゼンを浸ませて入れた殺虫瓶を持って、野山を駆け回っていた。とりわけ青い宝石のようなオオセイボウに魅せられていた。ウマノオバチを捕まえるという夢は、以後70年間叶えていない。高等学校時代には、高校は違うがハチ仲間、ヒメバチの中西明德さん（共に九大を受験、九大教養部助教授、兵庫県人と自然の博物館学芸課長）、ハバチの内藤親彦さん（大阪府立大学大学院を経て神戸大学農学部教授）が居た。当時新聞記事や雑誌「新昆虫」などで、安松先生のルビーアカヤドリコバチによる柑橘害虫ルビーロウカイガラムシの生物防除成功の記事を見て、将来このような研究をやりたいと考え九州大学を受験した。六本松には、チョウ学者として著名な白水隆教授、カメムシ類の分類学者宮本正一教授が居られた。ミノガやオドリバエなどの新進気鋭の分類学者三枝豊平先生は、私たちが入学後に助手として赴任された。三枝先生は、私や中西さんに昆虫形態学の基礎を叩き込んでくれた。私は常々生物的防除のような天敵生態学の研究をしたいと白水先生に伝えていたので、当然本学の安松先生にこのことは伝わっているものと信じていた。安松先生からいきなり寄生バチの分類をやれと言われたときの衝撃はとても大きかったが、もとより天皇と言われた旧帝大教授に、学部学生ごときが異を唱えることなどあり得なかった。

Diapriidae の分類学者に成るべく、学部2年半かけて *Zoological Record* を引

き、記載論文のカードをつくり、入手できる論文の写真複写コピーを作った。またヒメバチの分類のテーマをもらった中西さんと共に、北海道から九州にかけて採集旅行を行い、*Diapriidae* の標本を集めた。草原や灌木の葉をスーピングすれば、思いのほか容易に多様な種と思われる個体が採集出来た。これらをマウント標本にし、来る日も来る日も実態顕微鏡下で眺める生活が続いた。三枝先生は、夕方になると古巣の昆虫学教室の大部屋に顔を出し、若手の研究指導をしてくれていた。先生は、私の標本もしばしば眺めては分類のコツを教えてくださいました。先輩の分類学者から、「たくさんの標本を毎日毎日眺めていると、ある時突然、霧が晴れるように種のイメージができてくるものだ」と教えられていた。ところが私の場合、2年半かけてもさっぱりその霧が晴れなかった。三枝先生にして、このグループの分類はとても難行しそうだと言わしめた。広く全体を見渡すと、結構形態が多様に違うのだが、それは多分属以上のレベルであり、種の違いを認識することは難しかった。黒一色で、つるつるの外皮を持つ個体間の違いは、私には竜安寺の坊主頭と南禅寺の坊主頭を比較しているようにしか思えなかった。学部4年生になって、これでは卒論が書けないと思い、寄主であるハエ類の蛹化生態と、それらを攻撃する天敵類の観察で胡麻化して急場を切り抜けることとした。助手の日高先生に無理を言って、1 m 四方の木製の箱を4個と川砂を買ってもらって、中庭に砂箱を設置した。中央に魚肉やおからを置き、ハエ類に産卵させ、老齢幼虫が砂に潜って蛹化した後、区画ごとに掘り起こす作業を1年間繰り返した。キンバエやニクバエの蛹化の深さや広がり記録し、ルリエンマムシなどの捕食や9種の蛹寄生バチを確認した。残念ながら *Diapriidae* の寄生は一度も無かった。これらの結果で11月には卒論を書き上げ、安松先生の勧めで、*Kontyû* 誌に2編の短い和文論文を投稿した。かくして、私の分類学は早々に頓挫し、世界的権威者にもなり損なった。なお *Diapriidae* の分類課題は、私の全標本、文献とともに、1年後に修士に入学してきた本田（屋富祖）昌子さん（後に琉球大学助教授）に引き継がれた。彼女は何種かの新種記載を行ったが、体系的な分類には至らなかったと聞いている。近年走査電子顕微鏡が普及して、微細な形態観察が出来るようになり、坊主頭の分類も可能になったようで、外国で記載論文がぼつぼつ出ていると、京都府立大学教授の高田肇さんが教えてくれた。

私の本学進学時の1階大部屋の景色を紹介しておく。奥の院から、大学院生の森本桂、村上陽三、木元新作、神谷（佐々治）寛之、宮武頼夫、湯川淳一、小林正弘、学部生の志賀正和さんらが、それぞれに標本箱や文献を積み上げた

城を構え、入り口に中西明德さんと私の机があった。その後修士課程に、野里和雄さん、一戸文彦さんが入学してきた。旧館の外に小さな別棟(飼育室)があり、生態学専攻院生の広瀬義躬、加藤勉さんが居た。このほか、河原畑勇さんが、昆虫病理学の研究で農林省蚕糸試験場に、梶田泰司さんが、天敵大量飼育技術の開発のために武田薬品工業福知山農場(?)に内地留学中(梶田さんの場合は技術指導)であった。

前に述べたように、私は生物的防除のような天敵の生態学的研究をしたいと思い九大に入学した。本学に進学した後、本来の分類のテーマの傍ら、野外でマツカレハの卵寄生蜂の研究を精力的に進めていた広瀬さんの指導を受けた。農学部東 15 km の海岸のクロマツ林内の、高さ 1-5 m、約 600 本の松を調査木とし、産卵されたマツカレハ卵塊とそれらの被寄生卵を、全数調査するというタフな調査に志賀さんと共に加わった。この調査結果で、日本応用動物昆虫学会大会に学部 3 年生で講演する機会を与えてもらったし、共著者に加えてもらった 2 編の英文論文が、後に九大農学部紀要に公表された。広瀬さんの導きで、私は昆虫生態学の世界に踏み込んだ。分類学の師匠が三枝さん、生態学の師匠が広瀬さんと、実に恵まれた環境で学部生活を送ることができた。

この頃、和歌山県農業試験場朝来(アツ)試験地の桐谷圭治さんと法橋信彦さんらによる、ミナミアオカメムシとその天敵類の野外生態に関する英文論文が、日本応用動物昆虫学会誌毎号に、マシガンのように打ち出された。これらの論文は、私がやりたいと思っていた研究の方向そのものであると感じ、すっかり虜になった。教室院生の湯川さんは、大阪府立大学の学部生時に、桐谷さんの所で卒論研究の指導を受けており、桐谷さんを良く知っていた。そこで、湯川さんをお願いして、4 年次の正月休みに研究室を見学させてもらえるように取り計らってもらった。

朝来試験地は、南紀白浜の近く、西牟婁郡上富田町の小さな町外れにある法定伝染病隔離病棟の 1 棟に間借りしていた。研究室は桐谷さん、法橋さんと木村(東)勝千代さんの 3 人の研究員と、事務補助員の若いお嬢さんで構成されていた。事務室には、机、書棚とタイプライター、タイガー手回し計算機ぐらいしか無く、畳 1 畳ぐらいの広さの恒温飼育室(25°C)が唯一の研究施設であった。隔離病棟の病室は沢山空いており、大型の網室が何セットも贅沢に組み立てられていた。木村さんは病室の 1 室で生活していたし、客人が来れば何人でも宿泊出来た。稀にジフテリアや赤痢などの入院患者が出るそうで、隣の棟に患者が家族ぐるみで入ってきて、自炊する。近所の当番医師と看護師が通い

で診察、治療を行う。一見恐ろしげなシチュエーションに思えるが、研究員の皆さんは全く意に介さないふうであった。

滅多に客人が来ないので、学部学生の私でも大歓迎された。唯一の町の食堂で皆さんと夕食を囲み、夜は桐谷さん宅に泊めてもらい、いろいろ話を伺った。この試験地は、農林省指定試験事業「カメムシ類の生態と防除に関する研究」（1962-1965年）を実施するために設置された。指定試験は、本来国が行うべき研究であるが、研究対象の利便性から特定の県に事業を委託する。経費は全額農林省が負担し、研究者の人事も国が行う。桐谷さんは京都大学大学院博士課程を中退して赴任し、ここでのミナミアオカメムシの研究で博士の学位を取得した。法橋さんも京都大学出身で、後に農林省九州農業試験場でウンカ・ヨコバイ類個体群の比較生態で学位をとり、病虫部長になられた。木村さんは地元和歌山県職員で、指定試験終了後は農業試験場に戻り、後に病虫部長になられた。

朝来試験地への訪問で、私の決心は固まった。大学院修士課程への進学は決まっていたので、ここに内地留学をして、カメムシの野外生態学の研究をすることにした。前に述べたように河原畑さんや梶田さんが内地留学している前例があるので、私の内地留学も問題なく認められるだろうと安易に考えていた。大学に帰り、3月はじめに安松先生の研究室のドアをノックした。安松先生の研究室を訪れたのは、2年半前に分類のテーマが下げ下された時と、後にも先にもこの2回だけである。私は「修士課程の間、和歌山の桐谷さんのところで、研究指導を受けたいので、内地留学を許可していただけませんか」と申し出た。一瞬とても険悪な空気が流れ、普段は温厚な美男子の先生の顔が蒼白になり、こめかみに青筋が浮んだのを今でもはっきり覚えている。先生は「そんな所へ行行って、ちゃんと勉強できますかね」ただ一言だけであった。許可するとも、しないとも言われなかった。事前に助手の先生などに根回しをしていなかったからか、旧帝大から県農試の分場への内地留学が沽券に関わると思われたのかは定かでなかった。私は既に固い決心をしていたので、「行かせていただきます」とだけ言って教授室を退室した。この時点で、私は九大昆虫学教室を破門されたのである。1階の大部屋に戻り、先輩方に事の顛末を話すと大騒動になった。「直ちに撤回して詫びてこい」と言われた。しかし私は決心を変えなかった。直ちに桐谷さんに事の次第を伝え、研究指導を許可して欲しい旨手紙を出した。返事はすぐ来た。「君を歓迎する。研究条件は保証する」というものであった。大学院入学の手続きを済ませ、中西さんに奨学金の転送など

を頼み、3月末に博多を後にした。

朝来に着くと、桐谷さんから「安松さんから、君が行くのでよろしく頼むという簡単なはがきが届いた」と聞かされた。「まあ、怒っているわなあ」 破門された以上、私が今後九大城下町で職を得ることはあり得ないので、早速国家公務員上級職試験の勉強も始めた。

朝来ではくだんの隔離病棟の1室に寝泊まりし、1年間実に充実した研究生生活が出来た。しかしながら、この年(1965年)に朝来の指定試験が閉鎖になり、新たに「ウンカ・ヨコバイ類の薬剤抵抗性に関する指定試験」が高知県に設置された。和歌山から桐谷さんと法橋さんが赴任し、京都大学大学院から笹波隆文さんが加わった。私は大変困惑した。内地留学先が突如消滅したのである。いまさら九大には帰れない。そこで取り敢えず桐谷さんにくっついて高知に行った。高知の試験場は万事が土佐流、鷹揚そのもので、何の問題も無く、私の内地留学を受け入れてくれた。ちょうどその年4月に、指定試験室とは別組織、県側の昆虫研究室の研究員が県庁に転出した。その空白ポストに桐谷にくっついてきた学生を採用したらということになったらしく、私は試験場総務課長の面接試験を受けた。「九大で学生運動していませんか」「減相もございません(やっていた)」、「高知に長く居てくれますか」「土佐に骨を埋める覚悟です(10年後に離れた)」程度の受け答えて選考採用された。という次第で、幸運にも九大城下町の外で職にありついた。10年余り高知県農林技術研究所で研究員として過ごし、ツマグロヨコバイによるイネ萎縮病ウイルス伝搬の疫学で京都大学から学位を取得した。当時大学では学園紛争の嵐が吹き荒れて、教員人事の公開公募が始まった。その恩恵を受け、1976年名古屋大学助手、1979年京都大学講師、1986年岡山大学教授と渡り歩き、2006年に定年退職した。今は岡山の片田舎で隠居生活を楽しんでいる。

(本文は60年も前の記憶を辿って書いており、人名や年次などに不正確な箇所があるかも知れない。失礼があればお詫びする。)

最初の頃の論文

(121) 寫 洪

私が昆虫学教室の大部屋に入った 1966 年当時は、それぞれ東京や福井にいる森本さんや佐々治（神谷）さん（いずれも故人）などは分類屋としてはすでに伝説的な人たちで、六本松教養部の三枝さん（オドリバエの専門家）はハワイに出張中、キジラミの分類をやっていた宮武さんが教室で OD として活躍中というような状況であった。その宮武さんは既にいくつもの論文を出していて、当面の私の目標となった。宮武さんから頂いた修士論文を印刷したキジラミの分類の論文はとてつもなく大きく、私が修士を修了した時にそんなものが出せるかどうか、まったく予想もつかなかった。

鹿儿島大の永富先生（シギアブやミズアブの専門家、故人）からすすめられたヤドリバエの分類というものを、大学院でも続けるつもりで入学した。しかし始めたばかりで手持ちの材料は少なく、文献もあまりなかった。教室にいた宮武さんや中條さん（故人）などが学内でやっていた自動車クラブ（どういふものだったのかはよく知らない）の自動車に便乗し、あるいは国鉄バスを使って犬鳴山や若杉山へ出かけ、ハエ集めに精をだした。7 月にはおよそ 3 週間にわたって宮武さんに同行し、本州中部を歩き回った。修士の 2 年目には、六本松教養部の中西さん（ヒメバチの専門家、故人。当時助手）に連れられて九州中部山地や四国にそれぞれ 10 日間ほど採集に出かけた。ハワイから帰ったばかりの教養部の三枝さんと中西さん、それに同期の本田（屋父祖）さんとともに北海道に 1 ヶ月ほど出掛けたのもこの年で、北の材料を増やすことができた。

修論には、いちばんわかりやすく材料も豊富だと思われた *Carcelia* とその近縁の属を選んだ。日本に 20 種くらいと種数も適当で、文献的にもあまり問題がないと思った。修論しめ切り前には、教室には暗室がなかったので隣の動物学教室の暗室を使わせてもらい、嶺井さん（動物教室助手）の指導を受けながら薄い印画紙に、手書きに墨入れした絵を焼き付けた。どうにかいろんな人の助力をえて論文を提出し、1968 年末と 1969 に当時の「九州大学農学部紀要」と「昆蟲」誌上にこれを発表した。5 新種を含む 22 種を扱っている。

2021 年現在、これらの論文のうちの 2 新種を新参シノニムとし、いくつかの亜属を属に独立させた論文を準備中である。すでに 50 年以上たった今も、昔と同じことを繰り返しているかと思うと情けない。しかも、これらを最後まで完結できるかどうかは心許ない状態である。



写真 1967年の著者 石鎚山頂（上）および斜里海岸（下）

大部屋の最後が走馬灯のように

(132) 上宮健吉

創立 100 周年を迎え、6 代もの教授の足跡を共感できて感慨ひとしおです。最後の大部屋教室を年長院生で送り、新館への引っ越しに携わりました。古色然とした教室からピカピカの教室に分散し、何かしら混沌の時期を過ごしました。バケツに足を入れて暑さを凌いだ夏が、屋上の防火栓を開いて水浴びする夏になり、石炭を炊いてヒヤヒヤ暖房の冬が、シンクに足を揚げて湯を浴びる不埒な冬になりました。大部屋時代の恩徳の昔日が走馬灯のように浮かび、いまだ報恩ならずと悔やまれます。自分勝手な思い出話になりますが、大部屋で施された無欲の恩徳を感謝しつつ振り返ってみました。

大学院受験に落ちた私は、研究生として落胆と希望半ばで箱崎に向おうとしました。すると、彦山生物学研究所に助手として必ず 2 年間滞在する話があり、どうして自分が？と思いましたが、ご高配と違って従いました。安松教授はしばらく箱崎に滞在するように諮られ、この期間が感激のつぼでした。その昔、鬼才と（酒でも）崇められていた鳶洪先輩は、心もとない後輩だと面倒をみてくれました。当時流れていた“君の行く道は果てしなく遠い〜”の歌詞が意味深に聞こえ、その心細い姿を慰める意図だったのか、春寒い平和台球場に連れて行きました。プロ野球を観戦したのは後にも先にもこの 1 回だけで、東映と阪急戦で、後者の活躍を見たためにダイエーが来るまで阪急ファンでした。不慣れなことばかりの箱崎で試練がやって来ました。自祝会と称する、祝いごとはされる者が自ら手配采配して喜んでもらう教室の掟により、新人で歓迎されるから自祝に該当すると、安松、平嶋、宮本、鮎沢等の諸先生方など総勢取り揃った歓迎会の司会をせよとのことでした。焼酎の宴は普段に馴染んでいましたが、博多の宴席は不慣れの極みでした。幸い、いずこも同じく宴会はお好きなようで、留学帰りとは思えぬバンカラで河原畑助教授が「日本一の洗濯屋」を踊って盛会裏に終わり、安堵したのです。

6 月になってすぐ、九大史に残る大事件に遭遇しました。沖縄から板付に来ていた米軍ファントム偵察機が大型計算機センターに墜落炎上した惨事です。日曜日の夜でしたが、院生は夕食後も残り、勉強も佳境にはいった頃、突然の轟音に驚いて飛び出ました。火の手が松の幹から見え、ジェット機が乗っかっていました。急いで教室に戻りカメラを取り、尾翼がまだ燃えずにいる機体の写真を夢中で撮りました。すぐに MP 達が理学部門から次々と入って規制を始

めたので、カメラを教室に戻し、遠目に見ていると、尾翼が火の海になってきました。ほんの数百米先のことで、偶然にも焼失を免れた教室の貴重な標本や蔵書の幸運を皆で殊勝に喜び、矢野助手の来るまで教室を守る気構えていました。以後の半年間、機体引き下ろしまで反基地運動が起きました。私はすぐ彦山の研究所に赴くように言われ、遠くから眺めていましたが、全学が基地を取り囲んだ時には駆けつけました。並んで掲げていた横断幕を警官が突然引き回したので、転んだり、悲鳴をあげたりで、その凶暴さを初めて知りました。

彦山での任務は少なく安楽でした。緊張が緩み、夕暮れには横たわれる庭石に寝転び、定刻にムササビが研究所の屋根裏からアンテナに上がり、下界に飛び立つ様をうらやましく眺めていました。冬は-8°Cまで下がることもあり、夜はコタツに頭を入れて寝ました。さて、六本松教養部では三枝助教が熱心に形態学のゼミを主催されていました。参加を許されたのでゼミの時は下山しました。氏は筋の起始と停止に関わる硬板の作用で皺や形が決まることを基本に相同性を見極めることを説かれ、表層分類から筋肉を染めて走りを見る内部形態の世界に導いていました。大学宿舎を利用していましたが、見かねた中西明徳さんに幾度となくご自宅に泊めて頂きました。箱崎では罵さんや山口勝幸さんの部屋にも泊めて頂くなど、何度も諸兄のお世話になり、貴重な話を聞かせてもらい、幸運な彦山時代を過ごしました。次の冬が来ると、風邪で高熱になることがあり、下山した折にふいと箱崎の松田医院に飛び込み、扁桃腺除去を頼みこみ、3日間入院し、以後発熱がなくなりました。手術したことで2年目の冬を懸念されたか、大学院に合格していたからか、もう下山せよとの許可がでて、箱崎の2階で教授の手伝いとなりました。

2階は大熊女史が用務を司り、和江さんと辰枝さんの妙齢の二人が居て、天国に降りた?感でした。大熊さんはクモの卵囊に寄生する2属の稀少なキモグリバエ標本を保有しており、旧北区に2種目の新種に *chiyokoae* と献名する幸運に浴しました。女史の抱擁力は大きく、貯まったコピー代や牛乳代は忍耐強く猶予して下さいました。お里からの切り餅を2階の火鉢で焼くとき、「餅は私に焼かせて下さい」と言ったら、「私も貧乏人よ」と先を越されました。

4月から修士生として大部屋に戻りました。教室は分類や生態の院生、学生が混在し喧噪を極めていました。“標本がジェンジェン足りない”と声まねで嘆く本田(屋富祖)昌子さん、Royamaの増殖関数に悩み絶叫する山口勝幸さん、龍馬風に泰然と土佐弁で語る伊賀幹夫さんがいました。しかし、一番の喧噪はタイプする音でした。諸兄は運指が早く、本書をコピーせず、全文タイプして

いました。重たいドラムを小指で上げ、ブラインドで打って素早くアームを戻す作業を3ヶ月続けてやっと打てるようになりました。肩のコリをほぐすべく、同じ時間ほどを中庭でのバドミントンに費やしました。興じて中庭に裸電球を下げて日の暮れてまでやり、他教室の先生からお叱りを受けた輩もいました。“君は女性だけに打ち返すのか”、と非難され、また細身の人がしなりと頭脳で決めるので早々に上達を諦めました。修士の同級はタイ国からの N. スチャダさんと木本浩之君でした。彼女は水田の天敵アタマアブ科専攻で、ムニャムニャ言いつつ左手で器用に解剖し、木本君は本家のホープでカマキリ学解説の途中でアゲハチームに誘われ、天敵部門へ移りました。大部屋は本田さんが午前中を和気あいあい仕切り、午後からは鳶先輩が起きてきて、やがて機関銃のように打ち始め、鬼才から「記載の鬼」になっていました。すぐ先輩には天敵コバチ分類の矢田脩さんと宮崎稔さんがいて、二人静かにミクロの世界に没頭していました。標本箱数が1年かけては少ないので、見させてもらうと、見えないほど微かな虫を貼った台紙が隙間無く並び、これでは間を置かず並べるはずと感嘆しました。宮崎さんは立派な体躯で、胸幅があってタマゴコバチ、本田さんは腰細のハエヤドリコバチ、矢田さんは華奢なホソハネコバチと、名は体を表すかと指導教授の妙に感心しました。

夜遅くなったの帰り支度は皆一緒でした。失火の重圧から、石炭ストーブの消火を確認しあいました。飲み屋が終える前までにお開きで、最後にいやな一瞬が来ました。鍵を返しにゆく2階は夜半に無人となり、怖い所と思われて、返す番のじゃんけん決めは必死でした。気丈の本田さんも血相を変えて手を出していました。仕事はかどった先輩が呼びかけて、しばしば「カツヨ」の Copp 酒で大声を上げ、昼まで覚めない酒となりました。台湾大から来ていた朱耀沂先生は常に朝早く飼育棟に来ていました。彼は毎日山ほどの論文を読み、ベランメー調で議論にも強く、人格・体格からも大人と言われていました。他に大人と呼ばれる湯川淳一先生と双璧の風格がありますが、違いは鳶さんと並び称せられる酒豪でした。

やがて鳶さんが最後のビショップ留学生で居なくなり、安松教授が退官されると波乱に満ちた大部屋時代の終焉でした。新教室に移転して平嶋教授、矢野助教授の指導の時代となり、自由闊達で、自ら問題の解決できる学生、院生が次々と入ってきた時に九大を去りました。うろ覚えの記憶のつたない勝手回想記で失礼の段、ご容赦を。

私の思い出深い大学院時代

(137) 矢田 脩

神戸大学の岩田久仁雄先生のご紹介で昭和44年(1969年)4月に九州大学農学部昆虫学教室の大学院の門をたたくことになった。当時の昆虫学教室はかなりの大所帯で、安松京三教授、平嶋義宏助教授、矢野宏二助手、それに大熊千代子教務員、それ以外にも何人かの事務関係の方がおられた。さっそく安松教授から修士論文のテーマとしてウンカ・ヨコバエなどの卵寄生蜂 *Mymaridae* に関する分類学的研究をいただいた。そして、まずはこれを勉強するようと分厚いスペイン語の分類レビジョンをわたされた。途方にくれている私を *Zoological Record* などの文献の探しかたから、コバチ類のスウィーピング採集のしかた、標本の作製法まで手取足取り教えて下さったのは、当時の大学院の先輩方だった。とくに、クロバチの分類を研究していた屋富祖(旧姓本田)昌子さんには毎日のようにお世話になった。また、幸いだったのは私と同時に入学した宮崎稔氏がやはりコバチ(クロタマゴバチ)の分類をすることになったため、お互い協力できたことであつた。当時、コバチの分類をする学生はほとんどいなかったので研究材料を得るための交換は不可欠の手段だった。

入学して間もなく虫のシーズンになると、屋富祖さんの案内で宮崎氏と私は箱崎(桑畑や墓場周辺)から近郊の採集地(立花山、若杉山、犬鳴山)に出かけた。採集といってもモノが小さすぎて現場ではまず採集品の様子はわからない。もっぱら、研究室に戻ってからネットの底にたまつた「ゴミ」をビノキュラーの下でソーティングし、その日の成果を確かめるのだった。その当時、昆虫教室の大部屋におられた先輩の野里さんや伊賀さんもしばしば同行して下さった。夏休みに入るとえびの高原や佐多岬に足を伸ばし鹿児島大や鹿児島昆虫同好会の方々にお世話になった。鹿児島の方々となお交流があるのはこの頃が起点となっているように思う。また、中学、高校時代には十分行けなかつた信州地方(戸隠、美ヶ原、八ヶ岳)にも足を運ぶことができた。この時はコバチ類を中心とした一般採集で宮崎氏や吉安氏が同行して下さった。八ヶ岳は中学3年生の夏休み(1961年7-8月)に最初に採集にでかけた思い出深いところで、八ヶ岳農場から八ヶ岳に登る登山道にはコヒョウモンモドキ類が乱舞していた光景が私の脳裏に焼き付いている。

もちろん、大学院のゼミとして昆虫教室主催のゼミと生防研主催のゼミが毎週のようにあつた。これらのゼミは英語論文や原書を読んでまとめて発表する

という新入生にとってかなりキツイものであった。今思えば、大学院で昆虫の研究ができるというかねてからの希望がやっとかなって、私が大学院に入ってもっとも充実した時期でもあった。

この頃、屋富祖さんのお誘いもあり教養部におられた三枝豊平氏の形態学の自主ゼミに参加するようになった。三枝氏のゼミは具体的な昆虫材料を解剖しながら Snodgrass の形態の教科書と対応しながらスケッチし形態を確認していくという方法で、斬新かつ魅力的なものだった。また、教養部生物教室には、チョウの権威である白水隆先生がおられることも初めて知った。実は、私は高校までは大阪におり、チョウの採集・コレクションを主な趣味にしていた。阿倍野区の街角にあった昆虫標本店を構えていた溝口修氏のところに入りやすいようになり、昆虫団体研究会という同好会のメンバーになって同好会活動に足をつまむようになった。定期的に行われる採集会では、川副昭人、日浦勇氏らから採集のコツ、標本の作製法などを教えていただいたこともある。能勢の採集会では日浦氏から直接ピエリスの分布調査の手ほどきをうけたことが思い出される。しかし、チョウは趣味とし、大学では農学をはじめ応用に関連した昆虫類の研究をするのが当然の道とも思っていた。だから、チョウの研究をされている白水先生と巡り合えたことはある意味奇跡的なことであった。

一方で、私が入学したその前年には米軍のジェット機が九大校内に墜落し、これをきっかけに九大でも大きな学生運動が展開されていた。5月に入ると「大学管理法反対」の大衆団交や市内デモもはじまり、せっかく研究のために大学院に入ったのに、研究時間を削られるという気持ちが強かった。そして、10月には九大の拠点となっていた工学部本館について機動隊が導入された。当時、私も農学院生協議会のメンバーであったので、農学部集会や総決起集会などにも出ていくようになった。もともと病弱であった私が、その後の慣れない生活がたたって長期の入院生活を余儀なくされることとなった。しかしその後、思いもかけず、九大教養部生物教室の研究スタッフ（教務員）として採用された。そして、最初はコバチの分類とチョウの研究を並行して行うこととなった。この間、昆虫教室の皆さんには言葉では言い表せないほどお世話になりました。改めて深く御礼申し上げます。

九州大学農学部昆虫学教室の図書室

(152) 上田恭一郎

私は旧館時代の大部屋に机を与えられた最後の世代であるが、それは一年ぐらい、すぐ新館1号館の三階に移った。その建物も大学自体が元岡へ移った今ではなく、週に一度佐賀から北九州へ行く際に列車の窓から整地された現場を見るたびに、あのあたりだったかな?などと感慨にふける日々でもある。

昆虫学教室に入れていただき、ヤガ科の分類を始めようとしたのだが、当時の助手矢野宏二先生から、図書室で鱗翅目関連の文献の場所、さらに *Zoological Record* の引き方、活用方法、*Index Animalium* での種名、属名のチェックの必要性を教えていただいた。さらに中央図書館、農学部図書館（当時は生協、生防研が入る建物の横にあった）に基本的な雑誌が収蔵されており、それらの目録の場所も教示された。ネット環境が無い時代なので、当然すべてアナログである。

この図書室、および大学図書館の便利さ、充実度合いを本当に知るのは、大学を出て北九州市立自然史博物館をゼロから立ち上げる業務に従事した時であった。標本のラベルの学名を調べるのも、自分の分野以外のグループであると、当時はどうしようもなく、関連図書を探しに、しばしば勤務終了後、夜に図書室に入れてもらい、チェックする日々が続いた。大学院時代お世話になった *Hampson* の *Catalogue of the Lepidoptera Phalaenae* を始め鱗翅目関連の図書は、ヤガ上科のカタログ編纂に関わっている現在までずっと使い続けており、それらの図書に関わる思い出を書き出すときりが無い。

ただ近くにいるということで、お世話になり続けるのも問題なので、博物館が八幡駅上に仮開館して少し落ち着いた時から、教室に欠けている *Fabricius* や *Linnaeus* の単行本や *Hampson* のカタログ類を個人的に少しずつ収集し始めた。*Zoological Record* は館で購入を開始し、これもだんだん分野を増やして来たが、オランダの古書肆に1975年までの全巻が出て、いろいろ困難はあったものの館で購入できたが、これは教室での便利さが忘れられなかったからである。

雑誌類は故朝比奈正二郎先生の蔵書を館で購入させていただいた時、台湾博物学会会報、*Insecta Matsumurana* 等が揃い、故三宅貞祥先生から動物学雑誌、日本動物学彙報等を寄贈いただいたので、国内出版物は少しずつ揃ってきた。海外雑誌は諦めていたが、故岡野喜久麿氏から、収集されていた昆虫関連雑誌類約5万冊を寄贈していただいた。その整理のため早期退職をしたが、燻蒸後

整理、データベース作成で2年ついやした。Novitates Zoologicae、Proceedings of the Zoological Society of London、Transactions of the Royal Entomological Society of London、Annals & Magazine of Natural History、Iris 等が全巻収蔵されるとは夢にも思っていなかったので感動するしかなかった。

現在は Biodiversity Heritage Library を始めいくつかのネット上の図書館が大変充実しているが、日本産ヤガ上科のカタログをすべての原記載を実見して必要データを検討、書き込んでいくにはやはり不足している出版物がある。仕方ないので BM、ライデン、パリと各図書館を訪問し、お世話になるのだが、そういった図書館で閲覧、検討していると、植民地政策がもたらした欧米国家の莫大な資産がこういった形で社会に残っているという、文化的豊かさ、余裕を感じる。しかし、それに比較して貧しかった日本の明治、大正時代、岡島銀次先生、江崎先生を始めとする教室創立時のスタッフの努力で収集された鱗翅目関連の図書に、Cramer、Bremer、Oberthür、Staudinger、Moore、Hampson、Hemming といった著者達の基本的文献が含まれていることには、改めて感心せざるを得ない。

書誌学的な検討を行う際、あるいはその本の誤植・訂正を確認する場合、アナログの書籍ならば、瞬時に本の序または最後のページを開くことができるが、デジタル化された書籍の場合、探し出すのにかなりの時間を要することがしばしば起こる。またページのある部分を書籍をパラパラとめくって開くそのスピードも実は結構早く、目にも優しい、などの利点がある。オリジナルの図版の美しさはいうまでもない。第二次世界大戦敗戦後現在まで、アナログの単行本・雑誌を散逸させること無く、保存活用に務められた歴代スタッフにも深謝し、今は無き農学部一号館三階図書館の思い出としたい。



写真1 旧昆虫学教室全景（1970年12月）



写真2 九州大学農学部一号館（2015年9月23日）

パプア・ニューギニア海外調査の思い出とマイクロネシア

(154) 多田内修

江崎悌三先生以来、代々の教授は海外調査を組織し教室に大きなコレクションをもたらしてきた。江崎先生のマイクロネシア(旧南洋群島)コレクションは、太平洋地域の調査・研究を目的に掲げたハワイ・ビショップ博物館の知るところとなり、戦後その縁で同博物館と九大昆虫学教室との交流が深まった。安松京三先生時代にはアジア・太平洋地域の天敵調査だけでなく、院生を含めた多くの教室員がビショップ博物館で研究や仕事に従事することとなった。多くの先輩達から当時のさまざまな武勇伝を聞かされている。

私は助手になってから標本室の整理をしていたところ、江崎先生や安松先生が戦前マイクロネシアに調査に行かれた時代に、南洋庁の職員と事務的なやりとりしていた手紙やハガキ類をいくつか見つけた。マイクロネシアは第一次世界大戦後、ドイツの領有から国際連盟の委任統治領として日本が治めることとなり、南洋庁が置かれたからである。パラオの南洋庁には「山月記」などで知られる中島敦が、作家になる前に勤めていたことがあり、「環礁—マイクロネシア巡島記抄—」にはその時代の印象記が興味深く描かれている。私は子供の頃から切手類を集めていたので、標本室で見つけた郵便物に、パラオやトラックといった一風変わったカタカナの島名の局印を見て大変興味を持った。これが契機となり、それ以前のスペイン領・ドイツ領時代から戦後のアメリカ領時代までのマイクロネシア郵便史を調べるようになり、そのコレクション収集が私の趣味の一つとなった。のちに日本郵趣協会主催の第35回全日本切手展(JAPEX)・郵便史部門で大金銀賞を受賞することとなった。江崎先生は切手収集家としても知られており、このような形で江崎先生を通じてマイクロネシアとの繋がりができたことに、感謝とともに感慨も一入である。

私が最初に海外調査に参加したのは、平嶋義宏先生を代表者とするパプア・ニューギニアへの科研費海外調査であった。ニューギニア島は、マイクロネシアの生物相の供給源と考えられる世界第二の大島である。助手になってすぐ1982年の7月から8月にかけて約1.5ヶ月の長期の調査であった。当初私はその年の夏、数量分類学の初めての国際会議がアメリカであるというので、出席して講演をしようと考えていたが、海外調査が決まり急遽行先を変更することになった。出発の前になって、衝撃的なニュースが届いた。当時パプア・ニューギニアで現地活動をされていたビショップ博物館のJ. Linsley Gressitt博士の乗ら

れた飛行機が中国で墜落し、夫人とともに亡くなられたのである。博士は甲虫類の専門家で、太平洋地域の昆虫類の分散と進化などで幅広い業績をあげられていた。中国の広州から桂林に講演に向かう途中の出来事であった。博士は昆虫学教室とも関係が深く、京都の国際昆虫学会議（1980）のあと、教室にも寄られて講演をされ、私もその講演を聞いている。また福岡で印刷されていたと思われる *Pacific Insects* は Gressitt さんが創刊された雑誌でもある。後年私が郵便の知識があったので、教室に残されていた大量の *Pacific Insects* のバックナンバーを郵袋に詰め、ビショップ博物館宛に船便で送り届けた。調査のカウンターパート役になる予定だった Gressitt さんが亡くなられたことで、今考えると平嶋先生は現地との調整で、プロジェクトの開始や継続がさぞ大変だったろうと想像する。それでも米国人 1 人と英国人 1 人を加え、調査が実施され、無事終了したことは幸いであった。

香港経由で首都のポートモレスビーに入り、そこから滞在地ワウまでは、我々だけの 6 人乗りのプロペラ機で飛んだ。後にも先にもこんな小さな飛行機に乗ったことはなく、それも途中の中央山脈（オーエン・スタンレー山脈）を越えてから、パイロットがワウに下り降りる谷筋を見失い、何度も同じ山城を旋回したため、次第に不安が増していった。墜落事故があったばかりであり、気持ちの良いものではなかった。それでもなんとか正規のルートを見つけ、谷間のわずかな台地の草原に降り立つことができた。それがワウの飛行場であった。

Gressitt さんの現地の拠点であったワウ生態学研究所の宿舎に泊まり、時には博士が使っていたジープを使わせてもらうこともあった。毎日調査が終わると、東京医科歯科大学の篠永哲先生と村のマーケットに食料を買い出しに行き、自炊するのが日課となった。食事を作り終わる頃になると、きまって登山靴の大きな靴音をたてて、久留米大学の木元新作先生が食堂に入って来られるのであった。庭のブーゲンビリアの花にはトリバネチョウが次々に飛来し、我々の目を楽しませた。夜のベランダの灯火採集では沢山の蛾が集まり、三角紙に翅を整えて包み入れるのに時間が足りず、冷蔵庫に入れて何日もかけて整理した覚えがある。捕食者に襲われた時、胸部から有毒物質であろう黄色い泡をふきだすヒトリガをみたのは印象に残っている。また、毒液を 1 m も噴き出す巨大なヤスデがいた。目に入ると失明するのだそうだ。ピンクのランの花の中にはピンク色のハナカマキリがいて、全く見分けがつかなかった。村の子供たちは我々よりはるかに目が良く、一度も見つけられなかった巨大なナナフシやバッ

タをいとも簡単に見つけては、持ってきてくれた。ワウの小学校では子供達が集まってきて、同行した新潟の馬場金太郎先生が口からヒョイと入れ歯を出しニヤッと笑ったところ、子供たちがお化けを見たように驚いて蜘蛛の子を散らすように逃げ出したのは可笑しかった。ワウを出発する時、マラリアに罹ったアメリカ人が一緒にバスに乗り、毛布にくるまれてブルブル震えていたのに、4～5時間後、降りる時には何事もなかったようにスタスタと降りて行ったのも印象的であった。マラリアは周期的に熱が出ることを、この時覚えた。海岸近くのラエでは、放射線を使ったラセンウジバエの実験・増殖施設を見学した。隣国のオーストラリアに入ると畜産業に大打撃を与えるので、それに備えているという説明で、施設への出入りはことのほか厳重であった。

ニューギニア島の最高峰ウイリヘルム山 (4,509 m) に登ったことも思い出深い。調査中盤にはワウからラエを経て陸路で中央高地に向かった。途中、車ごと川を渡るようなところもあり、雨季には陸路は使えないということだった。ゴロカを経て山麓のケグルスグルの町を出発し、山中のキリスト教の教会に泊めてもらったりしながら、山を目指した。標高が上がるにつれて熱帯雨林から雲霧林に変わり、登山道を進むと赤道直下というのに氷河で削られたU字谷が現れた。木生シダが疎らに立つ霧の草原の先にはピウンデ湖があり、その湖畔にはオーストラリア国立大学の山小屋があった。眺めは素晴らしく、日本の北アルプス・白馬大池小屋に泊まった時を思い出させた。そこで寒さに震えながら1泊し、翌日は一日中高山病の頭痛に悩まされながらも、好天に恵まれて山頂を往復した。途中には太平洋戦争中に山腹に墜落した飛行機の残骸が見られ、山頂の岩場では氷の塊があちこちに見られた。平嶋先生はそれ以前にも登頂したことがあり、2回目の登山とのことであった。前回は山頂直下の岩の下にいる小昆虫の採集をしていたところ、高山病であろうか、気持ちが悪くなったと言われていた。今回は皆無事に下山帰国することができた。

私はこの海外調査のあと、在職中に韓国を振り出しに中国・東南アジア・中央アジア・西アジアへと調査地域を広げ、プロジェクトを何度か立ち上げてシルクロード沿いにユーラシア大陸を西へ進んで行った。中国では東北部から始め新疆ウイグル自治区まで調査し、後に主として中央アジアのカザフスタンやキルギスタンを調査地としていた。最終的にはトルコを目指していたが、ヨーロッパ各地での個人的な採集を除けば、ウズベキスタンとイランが西の最終調査国となった。トルコはヨーロッパの研究者の研究範囲なので、諦めもつく。私にとってパプア・ニューギニアへの参加は、最初の海外調査ただだけに、

40年経った今でも印象は鮮明である。貴重な体験をさせていただき、海外調査のイロハを学ばせていただいた平嶋先生に心から感謝申し上げます。近年は新型コロナウイルスはもとより、政治的事情で海外調査が円滑に進み難い状況にある。それを乗り越え、アジアに強い九大昆虫学教室として、是非伝統を守り続けてもらいたいと願っている。



写真1 パプア・ニューギニア第1回海外調査のメンバー（1982年、多田内除く）、Tambul 高原農業試験場にて、後列右から2番目がプロジェクト代表の平嶋義宏教授。写真2 調査メンバーには2人の外国人研究者が加わった。中央はハワイ・ビショップ博物館の Samuelson 博士。ワウ生態学研究所の宿舎にて。写真3 捕食者に食べられそうになると胸部から有毒な忌避物質を出すヒトリガ。写真4 新潟の馬場金太郎博士はワウの調査のみ参加され帰国された。Gressitt 博士とは親交が深かった。出発前のワウ空港で。写真5 ヤシの水を飲むハエ類の専門家英国人の Ismay 博士と多田内。写真6 ラエからはランドクルーザーで高地に向かった。車で川渡ることもあった。



写真7 ニューギニアを代表するゴクラクチョウ。Baiyer River 保護区にて。
写真8 ニューギニア高地人、Tambul にて。写真9 ウイリヘルム山中の
ピウンデ湖。湖畔に山小屋があり一泊して山頂に向かった。写真10 ニュー
ギニア島の最高峰ウイリヘルム山、高山病に悩まされた。

自分に正直に生きたいですね

(160) 山本 優

昭和46年に山口大学を卒業し、兵庫県宝塚市の製薬会社に就職。研修後、北海道札幌市に赴任。昆虫を勉強したい気持ちが強くなり退職。25歳で修士課程に入学。研究テーマとしてヒメバチ、コマユバチの分類を研究テーマとするか、大学卒業後に興味を持ったユスリカをやるかで悩みました。最終的にはユスリカの分類に決めました。3ヶ月程は朝から図書館に通い Zoological Records を調べ、図書カードを作成し、文献を集めました。研究材料収集のため、週3で若杉山に通いました。これは修士の間継続しました。修士課程入学当時、教授は平嶋先生、助教授は矢野先生でした。助手は槇原寛、吉安裕の両氏、博士課程には米田豊、林正美、多田内修、修士2年には上田恭一郎という面々がおられました。昆虫学教室の江本純、山岸健三、生防研の鈴木芳人、この3氏が同期でした。学部生には故瀬戸屋耕二、吉田、朝比奈、鶴田の4氏がおられました。暫くして大原賢二、後藤忠男、江田信豊、橋本里志の4氏が入ってこられました。当時は皆、夜遅くまで研究室に残ることが多く、標本室で寝泊りすることも多かったことを記憶しています。今考えればとんでもない事ですが、ナフタリンの匂いを全く感じる事ができなくなっていました。3人ほどが標本室で寝ているときに平嶋先生が用事で入ってこられました、「おやすみ中ね!」と言って出て行かれたことも何度かありました。

全体ゼミ、有志ゼミを含めて沢山の勉強会があり、殆ど毎日がゼミのことも。月に一回は教養部のスタッフの方々とのゼミ、生防研との共同ゼミも開かれていました。理学部の院生達との共同のゼミもありました。シーズンになると吉安、大原の両氏と九州各地に採集に赴くことも多々ありました。昆虫学会の後に行われた「昆虫分類学若手懇談会」では九大と北大で分類学に対する意見の相違があり、激しく論議することもありました。

博士号取得後、大阪の環境衛生管理会社に勤めました。昆虫とも関連があると聴いていましたが、実際は全く異なっていました。自身としては真面目に向き合っていました、一年ほどで精神的に破綻してしまいました。その時に京都府大におられた吉安さん、大学院時代の後輩、大阪府大の方々が動いて、生物調査会社を紹介してくださいました。とても小さな会社でしたが、私にとっては水を得た魚のような所でした。昆虫分類の知識がしっかり

と生かせる場所でした。それから二十数年勤めることができました。現在の状況からは考えられないかも知れませんが、大学の研究者の間ではこの種の業種は“開発に加担する企業”として批判的になっていました。このことで、知り合いの大学の先生と激しく論議したことがあります。「あなた自身は研究職という地位を得ている。しかし、大学院をでた者が皆研究職に就ける訳ではない、生き物が好きで堪らない者がその知識を生かせる所は、現時点ではこのような職種しかない。生き物に携わってほしいと言う学生をどうするか」と、反論したことがあります。何年か経ってその先生は理解を示してくださいました。

生物調査会社に入って2、3年は余裕無く働きましたが、次第に仕事と自身の研究が両立できるようになりました。単身赴任であったため、土日は自分の研究時間に。仕事さえきちんとやっていたら、有給も十分にとることができ、遠出の採集も可能になりました（西表島には十数回訪れました）。また、国際学会にも何度も参加することが出来ました。空いた時間を有効に使え論文を書くことも可能となりました。国際学会に参加することで、論文でしか知らなかった研究者とも直接に論議し、彼らは知己となり、現在も頻繁にメールでのやり取りを行ってまいります。また、研究関連で海外の研究者から直接に招待されたりもしました。今、この業界では会社での仕事とは別に自身のライフワークを定め、積極的に外部に情報発信を行なう方も増えてきています。その結果として、調査レベルも20年前と比べれば段違いなものとなっています。



写真1 中国天津にて。左から Ole Sæther 博士、Trond Andersen 博士、
著者 (2009 年)。



写真2 イタリアにて。アポロチョウ、アルプス中腹にて (2017 年)。

1974年5月の初め、国鉄（まだJRではない）の日田彦山線の彦山駅に下りた。バスを待つ間、付近を少し歩いてみたら5月というのにツマキチョウが飛んでいて驚いた。しかし、駅前から見上げても英彦山らしきものはまったく見えなかった。

なぜそこにいるかという、九州大学の昆虫学教室の研究生になりたいとお願いしたら、学生が多いのでしばらく彦山の実験所（当時は実験所と呼んでいた）にて修行せよとの連絡で、その前日は、箱崎の昆虫学教室を訪れて、当時助手であった吉安裕氏（後、京都府立大）と槇原寛氏（後、つくばの森林総研）に挨拶した。その後、助教授の矢野宏二先生（後、山口大学）に挨拶し、何の病気であったか忘れたが、その時入院されておられた平嶋義宏先生には吉安さんの車で病院に連れて行ってもらって挨拶した。

その翌日、挨拶のために彦山生物学実験所へと向かったのだ。駅から終点の英彦山神社下（当時はまだ神社で、すぐ後に神宮となった）まで西鉄バスに乗って細い道を上り、終点で下りる。銅の鳥居から延々と続いている神社への階段の旅館や土産物屋さんや並ぶ所を一区画だけ上がって右へ曲がり、九大の実験所へと向かう（現在の正式名称は九州大学農学部附属彦山生物学実験施設）。

実験所で中條道崇先生、竹野功一さん、手島健さんに挨拶した。一度鹿児島に帰り、車で簡単な荷物を運んで実験所での生活が始まった。一番奥の部屋を使わせてもらい、少しの標本と本と、こたつと布団という程度の荷物であった。押し入れに入れたインロー箱にすぐにカビが生えてきて驚いた。このあたりの事は先輩の槇原さんから聞いていたので、標本にカビが出ないように注意した。

中條先生はゴミムシダマシの分類をやっておられたが、お父さんが中條道夫先生である。当時はお父さんも香川大学を退職後、名城大学におられたのではないと思う。竹野さんは地元の方で、中央部の石の階段の角にある中央館という旅館の方で、実に優しい方であり、事務関係の処理やいろいろな作業をされ、虫は実験所の周辺でホオズキカメムシなどを調べておられた。地元の方であるので、山のあちこちの情報を知りたい時は詳しく教えて下さり、何でもよくご存じだった。手島さんは住み込みでいろいろな細かい仕事をしてくれており、樹木園の草取りや、枝の剪定などもされておられた。食事など結構お世話

になった。この3名の方が同年というのは後になって知ることであった。

この実験所は、英彦山神社の宮司の高千穂宣麿男爵が自分の昆虫研究施設の資料と、座主院の土地を九大に寄贈し、それを受けられた江崎悌三先生らの努力で昭和11年にできたというのは、昭和21年に発行された「鶯嶺仙話」にある。ここ英彦山が修験道の格式高い山であることは知らなかったが、銅の鳥居から神社までのすべての段になっているところにはすべて坊があり、当時でも大きな坊もいくつもあった。そして実験所の場所がその座主さんの屋敷跡で、一度中條先生から昔の図面を見せてもらったことがあるが、それは座主がどれほどの方であったかを物語るものすごい平面図であった。庭の池の部分はその当時のままであるという。高千穂男爵のお宅は、今はスロープカーの参道駅になっている所の石段の上にあったと聞いたが一度も入ってみたことはない。

実験所の事務室の中には、ここの歴代所長の写真が上に並べてあり、私はそこにある写真をみても江崎先生以外は知らなかったが、高千穂男爵はじめ何人かの写真があった。中條先生が、伊藤修四郎先生（大阪府立大学名誉教授）が、俳優の藤巻純さんに似ているといわれるのだと話してくれた。なるほどと納得。

実験所建物の南側に樹木園があった。この山にある樹木の見本園のようなものであったが、名前を覚えるのに非常に便利であり、またそれを利用する昆虫も手軽に見られ、この周辺のスイーピングでもよくオオカマキリモドキは採れた。

実験所は平屋ではあったが、南側に1箇所2階部分があって、白い壁が1面だけ作られており、そこにブルーライトを設置。夕方から点灯しておいて、時々上がっては来ている虫たちを見て、採集するという実にいい装備があった。その下に調理場的な場所があり、そこのガラス窓と、事務室の庭に面した窓もライトトラップとしては有効で、英彦山にだけは多いというオオカマキリモドキやいろいろな虫たちがやってきた。しかし、窓の下に落ちると待ち構えている多くのヒキガエルの餌食になるので、そこはカエルとの競争であった。雨の夜は特に厳しかった。

正面入口の一段下に1本のノリウツギがあった。花が咲くとスネケブカヒロコバネカミキリが次々に飛んでくる。不思議なことにほかの木には来ないので確かにご神木であったが、確かその何年か後にこの木は枯れてしまい、それからこのカミキリムシはあまり採れなくなったように思う。

英彦山の生活が始まった頃、槇原さんがいたために、カミキリムシを採れ・・・という命令はよく飛んできた。実験所の中や、山をぐるりと回る道沿いにある

イロハモミジの大木に花が咲くゴールデンウイークの頃、それをすくうとコバルトといわれていたルリ色のヒゲナガコバネカミキリがとれた。あれもこの付近でしか採った記憶がない種であった。

実験所の北側の角から下の溪流を越えて神社へ行く道があった。銅の鳥居から続く階段に出ていける。奉幣殿のすぐ下に出るが、ここから英彦山中岳へ登るのが普通の登山コースではあるが、これでは急すぎてきついのと、人も多いので、長い九大時代、直登コースで上がったことはないように思う。私は楨原さんから聞いた神社の宝物殿の横を抜けて山の中を登る緩いコースを使うのが常であった。そこを行くとアカガシにはキシマドリシジミの卵があったり、夏には少し上の方で、メスアカミドリシジミの群飛も見れたし、コブヤハズカミキリムシが倒木の裏側に付いていたりした。山頂のブナにはフジミドリシジミの卵もついていた。虫採りにはこのコースがよかった。

中條先生とは狙う虫が違うこともあってほとんど一緒に採集に行くことはなかったが、冬になると先生と2人、あるいは竹野さんも入っての3名で鷹巣山の方へ時々行った。お二人の狙いはキノコであり、種類も分かるし、ある場所も知っていた。ブナは意外に倒木が多く、ヒラタケやナメコなどが結構採れた。山も高くて寒いので、雨や雪などが降るとそれが帽子の形でナメコの上に凍り付き、広がれないので実にいい形のものが採れた。夜はキノコ鍋。そこで覚えた袖乃香は今でも愛用。彦山駅の前のもが一番おいしい気がする。

彦山駅から日田の方を見ると大きな切り通しのような山が見えるが、終戦直後、日本軍がトンネル内に貯蔵しておいた大量の火薬を、米軍の指示で処理中にいきなり大爆発を起こし、150人ほどが死んだという。その時に山が完全に吹き飛び、切り通しようになっており、近くには爆発踏切りという名前の踏切がある。数年前の大雨のために日田彦山線は途中から廃線となったようで、そう言う話しも聞けなくなる。

久しぶりに英彦山へ行った時、スロープカーと言うものができておりビックリした。確かにあの銅の鳥居から神宮まで歩いて行く人は減っただろうし、神宮下からでもきついのは確かだろう。英彦山小学校の校舎を利用した駅舎に実験所の展示などがある。時代の流れで子供も減って学校も休校となったのであろうが、夏に手嶋さんの子供達のソフトボールの練習につきあったこともあった。彼らのユニフォームの胸のマークは EHIKO であった。

実験所での暮らしは半年ほどで、「山にいると勉強しないから降りてこい」と

の平嶋先生のお言葉で、箱崎へと引っ越した。しかし、九大での長い時間、英彦山へは何度も出かけ、中條先生はじめ皆さんのお世話になった。3名の方が揃って退職という日、久しぶりに皆さんにお目にかかったが、その後はめったに行けなくなり、中條先生は最近亡くなられた。あの与太話がもう聞けないのが残念でならない。



写真1 階段



写真2 小学校から

昆虫学教室 1976–1990

(171) 緒方一夫

昆虫学教室に在籍する

私が昆虫学教室で机をもらったのは、学部3年生の1976（昭和51）年4月のことだった。当時、九州大学の学部教育は六本松での教養課程1.5年を終え、学科を選定して箱崎に進学するのは2年生の後期であり、卒論研究のために講座に配属されるのは3年生後期というのが一般的であった。少しフライングして、昆虫学教室にやってきたことになる。

実は、箱崎へ進学直後に、平嶋先生の教授室へ押しかけ「昆虫学教室に入りたいのですが」と直接伺ったのだが、その時は「よく考えてから来たまえ」といわれ、本当に昆虫学を選択してよいものか一時悩んだりもした。その後、1976年の2月に風疹性髄膜炎で意識不明となるという大病で入院した折には、平嶋先生と大熊さんがわざわざお見舞いに来られた。それやこれやで、3月には研究をキャリアとすることを決心して、改めて平嶋先生へ昆虫学教室への配属をお願いにいった。すると、今度はあっさりと、「では、なにを研究するかね」と問われた。とくに対象昆虫群を決めていたわけではなかったが、「誰もやっていないグループがいいです」と答えると、「それならアリをやりなさい」ということで、研究テーマをいただいた。

1970年代後半の教室点描

当時の教室は、平嶋教授のもと、矢野助教授、榎原助手、吉安助手、大熊教務員、桑平事務員という体制であった。大学院生に林さん、多田内さん、米田さん、上田さん、山本さん、大原さん、瀬戸屋さん、後藤さん、橋本さん、学部生の先輩には鶴田さんと金丸さんがいた。入室直後の4月にあった教室コンパは林さんが学位を取得し結婚したということもあって、盛大だった。これは瀬戸屋さんが料理長として腕をふるって、コールドスープから始まる豪華なメニューだった。

学生部屋は301・302・303号室の3部屋で、私の部屋303号室には、林さん、多田内さん、橋本さん、山岸さんがおり、10月には同級生の水久保君も303号室で机を並べた。毎週水曜には教職員と学生が顔を合わせる水曜会という会合があったが、学生が自主的に勉強する学生ゼミは盛んで、夕方から開催されることが多かった。先輩の指導は厳しかったが、結構いうことを聞かない性格だ

だったので、生意気だったと反省している。301号室にはドラフトチャンバーがあったが、ほとんど調理器具と化していて、コーヒーの湯沸かしやラーメン作りに重宝していた。日曜ごとにカレーなども作っていた。ときどき生防研からお呼びがかかり麻雀とかいうこともあった。

昆虫学教室を卒業する

さて、昆虫学教室を卒業したのはいつかということ、少し複雑である。履歴上は1986（昭和61）年7月1日付けで熱帯農学研究センター助手に採用されたことになっている。これは当時農学部が支援していたバングラデシュ農業大学院プロジェクトへJICA長期専門家として派遣されるにあたっての暫定的なポストである。任期が終わり帰国すると、そのポストは戻す約束であったため、実際は派遣されるまでの9ヶ月間303号室の席でプロジェクトの供与機材の選定などを行った。バングラデシュへ派遣されたのは1987（昭和62）年3月24日であった。この時は、福岡空港で昆虫学教室総出の見送りを受けた。ちょっと気恥しかったけれども、これが一つの区切りだったと思う。この後国際協力に関わっていくことになる。1988（昭和63）年3月27日に帰国し職務復帰後、一時昆虫学教室の助手職にあったものの、翌年の1989（平成元）年3月31日には辞職し、昆虫学教室の研究生に戻った。再び303号室の住人となったが、今度は同年6月からオーストラリアCSIRO昆虫学部門でポスドク待遇の留学の機会があった。キャンベラでアリの研究に勤しんでいるうちに森本教授より7月からの熱研センター助手が決まったので戻ってきなさいとの連絡を受けた。というわけで1990年6月までは昆虫学教室の研究生だったが、こんな風に昆虫学教室卒業はガラガラとなってしまった。しかし、長い間いたおかげで、先生方をはじめ、多くの先輩、後輩に巡り会えて幸運だった。



写真 1 学生部屋の様子 (1986年 11月)。狭い、汚い、臭いという印象だが、みんなここで知性を磨いた。303号室入口より、正面右側は緒方の席、左側は金沢君の席、手前は沢田君の席、暖房は石油ストーブだったけれど、今見ると危ない。写真 2 農学部 1号館の昆虫学教室の廊下 (写真 1と同じ頃)。踊り場からみたところ。消防法的に危ない環境だが…。写真 3 303号室の学生たち。右より前藤君 (DC2)、阿部 (芳) 君 (M2)、緒方 (OD1)、小西君 (D1)。学年は 1983年 3月の時点。写真 4 歴代昆虫学教室の教授。右より湯川先生、平嶋先生、森本先生、多田内先生、緒方。昆虫学教室のゼミ室にて。2005年頃の卒業式に勢ぞろいされた機会に撮影、なかなかないショットだと思う。

中西先生の想いで

(182) 前藤 薫

忘れられない人がいる。街は緑に包まれ、受験勉強から解放されたばかりの十八歳にはラジカセから流れるキャンディーズの「春一番」が心地よかった。だが、六本松キャンパスには学生運動の名残が色こくあり、生協会館前の朱文字の立看板や拡声器で歪んだアジ演説の昂ぶりがいまも思い出される。旧田島寮に荷物を入れ、授業を履修する手続きをすませると、白水隆先生の研究室にお邪魔した。チョウやトンボの次にはハチを調べたいと思っていたので、厚くましくもそのことを先生に相談したのである。そこで紹介して頂いたのが、同じ研究室の中西明德先生であった。

短髪に精悍な体躯の先生は、文字どおり牛乳瓶の底ほどのぶ厚い眼鏡をかけておられて、そこからうかがえる眼差しは鋭く、とても優しい。狩りバチやハナバチに興味があるので図鑑を紹介してくださいなどと相談したに違いないが、先生の助言はまったく思いがけないものだった。ハチに関心があるなら名前を教えるので採集して持ってきなさい、などとは仰らなかつた。大きなハチはもう大体は名前が分かるので詰まらない。小さくてまだ名前が分からない寄生バチを調べてみたらどうか。なかでもコマユバチの仲間は若い研究者がいないのでどうかと勧めてくださった。寄生バチの生態を調べている研究者は、名前が分からないと論文が書けないので困っているとも。名前を調べることは世間と繋がる糸口でもあるのだと教えてくださったに違いない。

チョウ類の研究者としても広く知られる中西先生だが、先生の研究活動の原点は寄生バチにある。昆虫学教室ではヒラタアブヒメバチ類の分類をはじめ、志賀正和氏と一緒にサクサンフシヒメバチの研究にも取り組まれた。やがて教養部に奉職されてからは、寄生バチだけでなくチョウ類の研究にも傾倒されてゆく。その頃の白水研究室では、みなで協力してチョウ類の比較生物学を進めようとする機運が高まっていた。異なる背景をもつ研究者がそれぞれの技量とアイデアを持ち寄ってひとつの研究を行い、その成果を共著論文として発表する。今ではごく当たり前の研究スタイルだが、一匹狼ばかりの当時の昆虫学界ではとても新鮮であった。中西先生はそうしたチーム研究を主導して優れた成果をあげておられる。やがて姫路工業大学（兵庫県立人と自然の博物館）に拠点を移されてからも、マレーシア・サバ州との国際研究や兵庫県内での地域研究など、人と人をつなぐ活動に尽力された。

先生には鋼鉄製の捕虫網と手作りの九大式吸虫管を使った採集法を教えて頂いた（ただ、吸い込んだ虫をクロロホルムで麻酔し、青酸カリの毒瓶に収める方法は今ではお勧めできない）。山野で網を振ると、そこに掬われる微小昆虫の多彩な様子におどろき、美しさに心奪われる。キャンパスに近い南公園や油山を手始めにひたすら網を振り、採集した寄生バチを観察しながら文献を紐とく楽しみを覚えていった。やがて進学した昆虫学教室では平嶋先生や森本先生、先輩方に指導して頂いてコマユバチの新種を発表できた。林業試験場に職を得得からも、コマユバチを同定させていただく縁によって、多くの方々と親しくさせて貰えたのは中西先生のお陰である。

瞬間にときは流れて、あらためて先生とゆっくりお話しさせて頂いたおりに四半世紀が過ぎていた。郷里の兵庫県に帰られた先生は、新しいタイプの博物館づくりに邁進され、震災後の困難にも立ち向かわれていた。お忙しいなか博物館のロビーに出向いてくださり、「前藤君にはまだ二十年はあるね」と声をかけて頂いたことを想いだす。だが、兵庫県立大学（博物館）を退職されて、ほどなくして先生は他界されてしまった。今となつては、きちんと感謝の気持ちをお伝えしなかったことをただ悔やむほかない。

末筆ながら、貴重な写真をご提供くださった内藤親彦先生にお礼申し上げる。



写真 ありし日の中西明德先生。1994年6月、中国雲南省麗江にて、内藤親彦氏撮影。

箱崎キャンパス昆虫学教室での研究生生活

(186) 直海俊一郎

幼い頃から昆虫に興味をもち、野山で友人達と一緒に昆虫採集をして過ごしていた中・高校生の時代から、将来は進学して、大学で昆虫の分類を専攻したいと思っていた。岡山大学に進学し、応用昆虫学教室で生態学を学んだ。大学卒業後に、九州大学大学院農学研究科に進学できたときは、本当に嬉しかった。そして、福岡市東区の箱崎キャンパスにある昆虫学教室(以下昆研と略記)で、甲虫目ハネカクシ類の分類を研究する日々が始まった。

毎日の研究生生活は、とても楽しかった。修士過程に入ってからすぐに、双眼実体顕微鏡でハネカクシを観察し、その体の部分構造図を描き、そして **Zoological Record** を用いて研究対象群の既知種のリストを作成したが、いずれの仕事も新鮮な気持ちで行うことができた。広く昆虫分類の知識を身に付け、ハネカクシの分類を実践し、そして分類の論文を実際に作成する。どの作業もどの研究も、分類に関することであればとても楽しく、毎日がとても速く過ぎて行った。そういった研究室での作業や研究の合間を利用して、修士課程と博士課程の初期に、1ヵ月程度の本州・四国への長期の昆虫採集を合わせて3回行ったことも楽しい思い出として残っている。

私の研究の対象であったハネカクシ科甲虫は、当時その分類が困難な群として知られていた。ハネカクシの標本については、主に岡山大学の時代に採集したものが手元にあったが、日本のファウナを知るにはあまりにも少なすぎた。しかし、私がハネカクシの分類を始めると、昆研の方々ばかりでなく、甲虫ファウナを調査されていた地方の方々も、ハネカクシを採集して下さり、そしてそれらの標本を研究のために、私に委ねて下さった。その際、種の同定を依頼されることも少なくなかったが、実際には多くの種の同定が困難であった。その最大の理由とは、種の同定に役立つ既存の論文を、十分に渉猟していないということではなく、それらの論文で記載されていない数多くの新種が、日本に棲息しているということであった。

修士課程を終えて、博士課程に入ると、私の興味は昆虫形態学に移った。そこで、私が最初に知ったのは、R. E. Snodgrass 博士が 1935 年に発表された教科書『Principles of Insect Morphology』であった。頭部 head、胸部 thorax、腹部 abdomen とそれらの付属肢 appendages 等の章を、夢中になって読んだ。これらの章を読んでみると、思った以上に早く、昆虫形態学の考え(総論と各論)を

理解することができた。そして、その後の昆虫分類学の発展を知るために、松田隆一博士の代表作『Insect Head』、『Insect Thorax』および『Insect Abdomen』の総論の一部と各論 Coleoptera を読んだ。これらの本を真剣に集中して読み、昆虫形態学の知識を知るのに、1年弱を費やした。その後、学位論文のテーマとしてハネカクシ科甲虫の形態と系統を選んだが、博士課程の初期に学んだ形態学の知識は、実践上非常に役に立ち、その結果、ハネカクシ科甲虫の形態を、かなりの程度詳しく知ることができた。

博士過程を終えてすぐには就職できなかったが、1989年に、幸いにも千葉県立中央博物館に昆虫関係の専門職員として、就職することができた。私が昆研で過ごした大学院の時代を今振り返ってみると、それは、毎日を研究で過ごした日々、実に充実した日々であったと思う。平嶋義宏教授を囲んだ教室の昼食会、教室の友人達と忘年会・新年会で、そして何度か自宅でお酒を飲んだことなども、楽しい思い出として残っている。

このたび、昆虫学教室が開設されて百年になるということで、心からお祝いを申し上げたいと思います。同時に、昆研を支えてこられた先生・先輩の方々に感謝するとともに、今後も多くの若い方々が、この研究室で素晴らしいご研究をされることを心から願っています。

昆虫学教室開設百周年に寄せて

(187) 小西和彦

昆虫学教室開設百周年、おめでとうございます。私が在籍したのは開設 60 周年付近の 1980 年 4 月（学部 3 年）から 1987 年 3 月（博士後期課程 3 年）までの 7 年間でした。同学年にいたのは、現昆虫学教室教授の広渡俊哉君と元農研機構農業環境変動研究センターの吉松慎一君です。研究室に所属した 1980 年の教員は、平嶋義宏教授、森本桂助教授、榎原寛助手、大熊千代子教務員、という陣容で、その後、在籍中に榎原助手が林業試験場に転出し、多田内修助手が着任しました。私本人にしてみれば、ほんの少し前のことのような気がしていますが、あらためて当時を振り返ってみると今とは様々なことが違うことに気づかされます。

おそらくもっとも激しく変化したのがデジタル事情で、当時はスマートフォンはおろか携帯電話もまだなく、卒論は原稿用紙に手書きでした。多田内先生が導入したオリベッティのオフィスコンピューターが初めて見るコンピューターで、それで動く原始的なワードプロセッサで修士論文やその後に掲載した論文の原稿を作成しました。現在のテキストエディタなどに比べてもはるかに不便なものではありましたが、これなしにタイプライター手打ちで原稿作成となると、論文が書けなかったかもしれません。論文用の図版をスケッチを切り貼りして作ったことや、暗室での写真の現像・焼き付け、学会前のスライドづくりなど、良い思い出ではあります。今では、これらの作業や文献の入手など、パソコンの前に座っているだけでできてしまう利便性を享受しています。でも、もし当時携帯用ゲーム機があったら、たぶん、はまってしまって研究どころではなくなっていたと思いますので、技術の発達もよし悪しかもしれません。

つくばでの就職のため福岡を離れる際、教員をはじめ昆虫学教室の皆さんが博多駅の新幹線ホームまで見送りに来てくださいました。先輩が就職で福岡を離れる際には何度か見送りに行ったことはあったのですが、いざ自分が送られる側になると何とも面映いものでした。こんな習慣も今ではなくなっていますよね？

様々なものが変化したとは言え、当時かなり頻繁に行われていた輪読や、活発な学生間での議論などは今後も変わらずに続いていくことを期待します。



写真 1984年3月、昆虫学教室の先生方と。
修士修了生3名、学部卒業生2名。

学生時代の思い出

(188) 広渡俊哉

私が学部3年で昆虫学教室に入った当時、平嶋義宏、森本桂、槇原寛の諸先生と大熊千代子さん、桑原辰枝さんがおられたが、その後、槇原さんが林業試験場（後の森林総合研究所）に移られて、多田内修先生が助手になられた。私が大学院生として昆虫学教室に在籍した頃、302の部屋には、山本優、大原賢二、後藤忠男、江田信豊、嶽本弘之の先輩方（写真1）、後に衛藤真二、安永智秀などの後輩諸氏が加わった。私の机は入口の右側で、先輩方は「窓際」の方におられたが、特に同室の先輩方には、解剖や作図の方法などを教わりありがたかった。ただ、山本さんは私の斜め後ろで、机の位置が近いこともあってそれ以外にもいろいろと相手をしていただいた。同期に吉松慎一、小西和彦の両君がいたが（写真2）、それぞれ301、303と部屋を違えていた。教室メンバーになじむように、という先輩方の配慮があったのかもしれない。

当時の昆虫学教室には、302のメンバーの他に山岸健三、緒方一夫、庄野美德、前藤薫、金沢至、直海俊一郎、などの諸先輩、沢田佳久、三浦一芸、高梨祐明、阿部芳久、阿部正喜、野村周平、吉田陸浩の後輩諸氏など、そうそうたるメンバーが在籍していた。当時、ゼミでは分岐分類学や進化生物学の話題で、喧喧諤諤の議論が行われていたが、論客揃いの中で、浅学の私はただ傍観して感心するのみであった。その他に、山本さんがユンクの無意識と意識や、今西錦司の進化論を持ち出して、「種は同時多発的に変わる」といったことを言われていたのが記憶に残っている。

我々が学生の時代、科研費を申請する制度があったのかもしれないが、当時の学生はアルバイトで研究費を稼ぐのが一般的だった。私は実家のある岡垣町で中高生に家庭教師をしたり、香椎にある小さな寺子屋のような家族的な雰囲気学習塾で中学生に英語や数学などを教えたりしていた。同時に、大橋にあった大手の学習塾でも一端の教員のように教鞭をとった。この時、緒方さんと大野和朗さん（生防研）も同じ大手の塾でバイトしていたが、このお二人は私と違って人気を二分する看板講師だった。さて、学生時代はよくバイトしよく学んだと思うが、一方でよく遊んだ。香椎の塾から研究室に戻り、午後に進んでいた作業の続きをやる。日付が変わろうとする時間になって帰ろうとしていると、同じ生活リズムの山本さんと目が合って「一局やりますか」となり、結局夜明け近くまで囲碁を打つこともしばしばだった。こう言っては失礼だが、

山本さんとは棋力が同レベルだったので楽しく打てた。しかし、有段者の直海さんともたまに休日に打つことがあったが、いつもコテンパンにやられた。また、麻雀もよくやった。研究室でも飲み会の後に平嶋先生が学生を雀荘に連れて行って下さることもよくあった。また、名人戦と称して、中洲の川丈旅館で休日に牌を囲むこともあった。これは、福岡近辺に住んでおられた昆虫学者が一同に会する催しで、主な参加者は、白水隆、宮本正一、平嶋義宏、木元新作、木船悌嗣といった先生方で、さながら学会の懇親会のような雰囲気だった。緒方さんや私などの学生は、メンツの調整でたまに呼ばれたが、いろいろな先生方とお話できるだけでなく、旅館で美味しい料理をいただけるということで、緊張はしながらも楽しい時間を過ごした。ちなみに名人戦の麻雀のレベルは高かったが、白水先生と木船先生が特に抜けていたように記憶している。この他にも昆虫学教室のメンバーや同期の野田亮君など生物研究部の面々ともよく麻雀をした。あまりにも遊んでばかりいるので、同室の先輩に説教されたこともよくあった。また、現在も続いているソフトボール大会とその後の懇親会も楽しい一時だった（写真3）。

私は、学生時代に東南アジアのシジミチョウを研究対象としていたので、教室メンバーと国内の採集に出かけることは少なかった。学部生の時に卒論で琉球列島にも分布するシジミチョウ類の幼虫の形態を調べたので、緒方さん・庄野さんと奄美大島・石垣島に行ったことや、小西・吉松の両君と石垣島・西表島に行っただらうか。その他は、たまに英彦山や熊本県の白鳥山などについていたりしたが、それとは別に教室メンバーがそろって熱中したのは、オオクワガタの採集だった。当時、どうしてそうなったかは記憶が曖昧だが、オオクワガタを探しに行こうということになった。当初は直海さんの説に従って「背振山系の山麓で広い範囲でクヌギ林がある場所」を攻めた。確か野村君の地元の佐賀県多久市で採集記録があったからだと思う。しかし、見つかるのはコクワガタばかりでよくてヒラタクワガタ。ところが、ある時、野田君が佐賀平野でオオクワガタのメスを捕まえた。これが契機となって、佐賀平野（城島、神崎など）にはクリーク沿いに植えられたクヌギで普通に見られることが分かってきた。後にも先にも、野外でオオクワガタを手づかみしたのは、この時だけだ。「クワガタ採りなんか興味ない」とか「自分の研究に集中すべき」という人もいたが、いざ現地でもオオクワガタを目にすると、「僕のや！」と叫んで人が変わった。オオクワガタの魅力は底知れない。

さて、私が大学院生の頃、直海さんが代表で「若手の会」(昆虫分類学若手懇談会)の事務局を担当した際に、ニュースの編集等のお手伝いをした。当時は、ガリ版・手書きからワープロへ移行する過渡期で、ニュースの作成は、計算機センターにある大層な和文のワードプロセッサを使って版組をした。その後、私個人としては、大阪府立大に移った後、1991~1992年に若手の会の事務局を担当した。その当時も緒方さん、直海さん、金沢さん、野村君など、昆虫学教室の出身者に原稿をいただいて助けてもらった。ちなみに、現在も「若手の会」は活発に活動を続けている。昨今のコロナ禍にあっては、教室出身の吉田貴大君が中心となってオンライン基礎昆虫学会議を立ち上げるなど、昆虫分類学の若手研究者を牽引している。2021年、日本昆虫学会の大会が初めてオンラインで開催された際に、「若手の会」のノウハウが大会運営に大いに貢献したと伺っている。このような伝統が引き継がれているは喜ばしいことだと思う。



写真1 来客・先輩たちと。(左から) Jason Wentraub、緒方、後藤、山本、江田、広渡(敬称略)。



写真2 六角堂前で。(手前から) 吉松、広渡、小西。



写真3 貝塚グラウンドでのソフトボール大会

福岡から大阪、そして箱崎から伊都へ

(188) 広渡俊哉

私は博士課程4年目の1987年12月まで昆虫学教室に在籍し、1988年1月に助手として大阪府立大学昆虫学研究室に着任した。福岡(北九州・岡垣町)出身で九州を出たことがなかったので、まさか大阪で職を得るとは思ってもみなかったが、結果的には25年余りの月日を関西で過ごすこととなった。関西はいろいろな意味で住みやすく、チョウのことしか知らなかった自分が、伝統的に小蛾類の分類を行っている研究室で鱗翅類全般を学ばせていただいたことに感謝している。大阪府立大学に着任した際には、保田淑郎、森内茂、石井実の各先生がおられたが、その少し前に退職された黒子浩先生と伊藤修四郎先生は、九州大学昆虫学教室のご出身である。また、森内先生は九大で学位を取られたが、平嶋先生が学位を出された第1号で、昆虫学教室とは所縁のある研究室だった。私自身は、関西に骨を埋めるつもりだったが、随分悩んだ挙げ句、福岡に戻るようになった。

2013年4月、私は箱崎の昆虫学教室に戻ってきたが、25年振りということもあって隔世の感があった。学生の時に平嶋先生がおられた教授室に自分がいることも違和感があった。昔のままの廊下(写真1)を歩いていると、自分の居室が学生時代に過ごした302室のような錯覚をすることもしばしばだった。そして、学生部屋の環境が昔とあまり変わらないことに驚いた。私が最初に行ったのは、学生部屋にまともなエアコンを付けることだった。また、走査電顕等の備品が老朽化していたので、更新するための申請を毎年のように試みたが、なかなかうまく行かなかった。2018年6月、箱崎での生活に慣れてきたのも束の間、キャンパスが箱崎から伊都に移転することになった。引越の直前、私が学生時代を過ごした302室を目に焼きつけようと覗いてみた。すでに荷物が運び出された部屋の中はもぬけの殻だったが、部屋の入口横には、古いインターホンが学生時代そのままの姿で残っていた。それは、当時も機能していなかったように記憶している。私は学生の時、インターホンのスイッチの部分に同期の小西・吉松両君の顔写真を貼り付けた。特に意味はなく、単なるいたずらである。そして30年近くが経過し、なぜかそれがそのまま残っていた(写真2)。

箱崎から伊都にキャンパスが移転する際に、一番大きな問題は標本の引越だった。幸い教室スタッフの紙谷聡志さんや三田敏治さんが緻密に計画を立てて手はずを整えてくれたことや、学生全員が協力してくれたことで、何とか無事

に引越を完了することができた。移転前にまずやったのは、森本先生が退職後も精力的に研究をされていたゾウムシ類の標本を同じ箱崎地区の旧工学部本館を利用した九大総合研究博物館に移管することだった。移管といっても、標本自体は備品扱いではないので、実際に行ったのは標本庫の移管手続きと標本の移動である。当時、ゾウムシ類の標本は農学部1号館3階と2号館1階、博物館分室に分散していた。農学部では収蔵スペースが拡張できないため、博物館に集中させることになった。また、中條コレクションや佐々治（神谷）コレクションといった甲虫類も、博物館に甲虫が専門の丸山宗利さんがおられることもあって、桐箱からドイツ箱に移しかえるなどの整理を進めつつ博物館に移管した。中條コレクションの一部には、中條道崇先生が移転前にご自宅から昆虫学教室に持参されたものも含まれていた。標本棚と標本箱は、公用車の2トントラックで少しずつ博物館に運んだ。また、タイプ標本についても、教室メンバー全員が一丸となって、九大式の標本箱から1種ごとをユニットボックスに入れてドイツ箱移しかえを行った（写真3）。

移転に際して、私自身は、昆虫だけでなく、動物、魚類、海藻類、植物など、農学部にある様々な標本類を移転する際の標本収蔵スペース WG の WG 長に任命された。もっとも多く標本を所有しているというのがその理由だったが、その流れで農学部にある記念碑や記念樹を移転・移植する WG 長も任された。早くから標本の存在や重要性を訴えていた甲斐もあって、移転先に標本の置き場がないという最悪の状況は避けることができたが、農学研究院から提示された収蔵スペースは最低限のものだった。ただ、昆虫学教室でもっとも古い江崎先生の時代の標本（箱崎では農学部2号館の狭い方の部屋に収蔵）は、ウエスト5号館の中央入口のホワイエ奥にある219室に、収蔵展示室として標本をまとめて収蔵するとともに一部を展示してその重要性をアピールしている（写真4）。また、箱崎の中央図書館5階の標本室に収蔵されていた杉谷コレクション（世界の鱗翅目の貴重な標本）は、植物の標本とともにウエスト5号館東側入口の119室に収まっている。

さて、私は学生時代、ドラフトのある301室で防虫剤のナフタリンをやかんに入れて加熱していたところ、少し目を離した隙に引火して爆発し、大騒ぎになったことがあった。幸い、火災等の大事には至らなかったが、それでも部屋中に煤をまき散らして多大な迷惑をかけてしまった。今では、ナフタレンは有害ということで、昆虫の防虫剤として使用できなくなっており、こういったことはなくなったが、旧式（九大式）の木製標本箱にはナフタリンが流しこまれ

ていて、どうしても完全には取り除けなかった。移転した伊都キャンパスの標本室の1つの上階の先生から苦情が出るなど、対応に追われたりした。

私が福岡に戻った際に、蚕学（現在は昆虫ゲノム科学）の日下部宜宏教授が「広渡さんが戻って来られたので、九大の昆虫学として何か一緒にやりましょう」と声をかけて下さった。当時は、研究室間の繋がりはほとんどなく教員や学生も含めて交流もあまりなかったので何ができるのかイメージしにくかった。しかし、2018年4月に「昆虫科学・新産業創生研究センター」の設立という形で現実のものとなった。全国的に大学教員の定員削減が厳しい中、これを契機に教員を追加で雇用し、箱崎では古くなっていた走査電顕の更新やデジタルマイクロスコープなどを設置することができた。そういった状況を見ると、現在の学生は研究環境が整っていて恵まれていると思う。ただ、学生が30名（2021年12月現在：大学院生21名、学部生9名）と増えすぎて、学生室の収容能力を超えているのが想定外の問題となっている。

前述のように標本の収蔵場所は依然として十分ではない。旧工学部本館を利用した箱崎キャンパスの総合研究博物館は、補修して展示スペースを充実させるなど存続することが決まっている。次は、伊都キャンパスに昆虫標本の収蔵庫を確保するのが喫緊の課題である。キャンパス移転に伴う標本の引越は大変だったが、これを契機に標本の整備に着手することができたのは幸いであった。収蔵庫の建築は実現する目途は立っていないが、100年の歴史をもつ膨大な標本が利用できるように、ジェネラルコレクションの整備を進めている。



写真1 移転直前の昆虫学教室の廊下（2018年6月）



写真2 302室のインターホン（右は拡大）



写真3 ユニットボックスに収まったタイプ標本



写真4 伊都キャンパスの收藏展示室（W5-219室）

啐啄同時

(196) 阿部芳久

「君はタイプライターを打つことができるかね」。学部 2 年の後期に六本松キャンパスの教養部から箱崎キャンパスの農学部に進学して昆虫学教室へ挨拶にうかがったとき、教授室で平嶋義宏先生から最初にかけてられた言葉である。研究者は英語で論文を書くのが当たり前なので、英文タイプライターを打てなければいけない、ということであった。自分が英語で論文を書く、ということとをそれまで現実のこととして考えたことがなかったので、びっくりすると同時に不安を覚えた。教授室を辞すとすぐに、私は助手に就任して間もない多田内修先生のところへ行き、使われずにしまわれていた手動のタイプライターをお借りして、ブラインドタッチの練習を始めた。1981 年当時は、まだ英文ワープロが使われるようになる前で、電動のタイプライターが日常的に使われており、昆虫学教室では手動のタイプライターを使う人はいなかった。では、なぜ手動のタイプライターをお借りして練習したのか。電動のタイプライターではキーを強く打っても弱く打っても印字の濃さは同じであるが、手動のタイプライターではキーを強く打つと濃く印字され、弱く打つと薄く印字される。つまり、どのキーも同じ強さで打たないときれいに印字されない。それゆえ手動のタイプライターできれいに印字されるように練習した方が、電動タイプライターで練習するよりもブラインドタッチが上達すると、平嶋先生から御指導いただいたのである。

2 か月もしないうちに私はタイプライターの指運びを覚えることができた。しかし、隣の教授室から聞こえてくるタイプライターを打つ音は物凄く速くて全く途切れることが無いのに対し、私がタイプライターを打つ音は極めて緩慢で、単語と単語の間で途切れてしまうのであった。ブラインドタッチの腕前はなかなか上達しなかったが、40 年前、このようにして私は研究者の卵としての一步を踏み出した。結局、学部で 2 年半、大学院で 5 年の計 7 年半を昆虫学教室でお世話になった。研究者としての基礎はこの期間に先生方や先輩・同級生・後輩たちから学ぶことができた。皆様の御指導と御厚情には心から感謝している。

今年、昆虫学教室はめでたく 100 周年を迎えた。これからも研究者の卵が集って切磋琢磨し、卵の殻を破ろうとしている若者が適切に指導を受けることができるような研究室であり続けてほしいと願っている。

九州大学農学部昆虫学教室の昭和～平成

(200) 野村周平

筆者は九州大学の1981年の入学であり、翌1982年(昭和57年)の後期から箱崎キャンパスの農学部に通うようになった。1985年(昭和60年)3月に学部を卒業し、大学院に入学した。1990年(平成2年)に大学院を単位取得退学となり、その後、昆虫学教室の助手に採用された。助手を退職し科博へ移ったのは1995年である。その時にはもう世の中は平成7年になっていた。つまり、院生時代(D2)の1月に昭和天皇の崩御があり、新しい元号が制定され、世の中が変わっていった。その頃のことを思い出すままに以下に書き留めておきたい。

当時、昆虫学教室は箱崎キャンパス、農学部1号館の南の端にあり、我々がすんでいた学生部屋も南西の端にあった。廊下をはさんだ向かいの端は標本室になっていて、木製の標本ダンスが並んでいた。廊下の端にドアがあり、外に出ると階段の踊り場でバルコニーのようになっており、その向こう側には鹿児島本線が斜めに走っていた。廊下の壁際には、木製の背の高い物品棚が立っており、中にはいつの頃からあったのかわからないような実験器具やガラス器具が収納されていた。

筆者はこの学生部屋の中に机をもらって、そこに手回りの文献や標本を置いて、卓上には学生実験用の実体顕微鏡を1台置いて、古いトランス付きの照明装置を付けて、アリヅカムシの標本を観察していた。アリヅカムシの標本収集には、これまで多くの甲虫屋さんたちが実践してきたような、土ふるい、朽木崩し、樹皮剥ぎなどだけでは全く不十分だった。それで土壤動物の研究者たちが当時使っていたツルグレン装置が必要だった。ツルグレン装置は高校生のときから知っていて試作したりしたこともあったが、筆者が昆虫学教室に入った時には適切なものがなかったのである。

ツルグレン装置を探しているときに、彦山生物学実験所の中條道崇先生から、大きな助け舟が出てきた。実験所で持っていたツルグレン装置が10台ほど、教室のどこかに眠っており、それを「使っていいよ」といつてくださったのである。そのツルグレン装置はだれが作った物かはわからなかったが、多分九大まわりの理化学機器屋に命じて作らせたものであろう、ということであった。それは、トビムシやダニなどの採集にはやや大きすぎ、ふるいの目が粗すぎるものだった。しかしそのサイズ、ふるいの目の粗さがアリヅカムシの採集には

最適だったのである。

筆者は、先に述べた廊下の木棚の反対側の壁際にツルグレン装置を何台も並べて、日本全国からシフターでふるい出してきた土をかけては、片っ端からアリヅカムシの抽出に勤めた。それは卒論に取り掛かった 1983 年頃から、筆者が教室の助手を退職して科博へ移ることになる 1994 年頃まで 10 年以上にわたって、年中稼働していた。このツルグレン装置による採集品は、筆者の研究基盤としてその後大活躍した。それだけにとどまらず、琉球列島を含む日本全国の土壌甲虫、土壌昆虫の研究材料として、各群の専門家のところへ譲渡された。例えばその時に採集されたハネカクシの採集品は、筆者の先輩である直海俊一郎博士によってさらに整理され、丸山（2021）によって紹介された総合研究博物館の所蔵コレクションである「直海・野村・丸山コレクション」の一部になっている。

アリヅカムシやその他のハネカクシばかりでなく、土壌中から抽出されるゾウムシ類も、抽出品のソーティング時にピックアップされ、すべて森本先生に引き渡された。その中には多少とも面白いものが入っていたらしく、毎回喜んで受け取ってもらっていた。その他に森本先生から使っていただいたものももう一つある。それは、ツルグレン抽出がすんだあとの腐葉土である。筆者は各地に採集に行くと、シフターでふるった土を 1 地点ごとに土のう袋に入れて、教室に持ち込んだり、そのころやっと普及してきた宅急便で教室に送りつけたりしていた。その土をツルグレン装置にあけて、数日間抽出した後は不要になるので、教室の外に数本植わっていた、シンジュ（ニワウルシ）の木の根元に捨てていた。森本先生はその捨てた土を時折掘り取っていかれては、ご自宅の鉢植えの土などに使われていた。「すごく栄養のある、いい土なんだよ」といつて喜んでおられた。

このシンジュの木にも思い出があって、ある時気が付いて調べてみると、幹にシンジュキノカワガの繭がかなりついていて、美麗種として有名な本種の成虫は全く見るができなかったのに、歴然と本種の繭がついていたのには驚いた。ちなみにこのシンジュキノカワガの繭は、シンジュの木の木肌に溶け込むような色合いと肌合いをもっていて、見事な隠蔽擬態になっている。そこにそういうものがあるという認識がないと、決して偶然に見つかるようなものではない。この時代の昆虫学教室のすぐそばには、こんな生物進化の見事な見本があったのに、それが失われてしまったのはかえすがえすも残念である。

昆虫学教室は伊都キャンパスに移転してしまい、すっかりきれいにはなった

ものの、筆者らには全くなじみのないところなので、あんまり居心地が良くない。しかしそれでもここは昆虫学教室の名を継ぎ、毎年後輩たちが入学しては卒業して行くだろう。昆虫学教室 100 年の節目をお祝いし、益々の発展を祈念してやまない。この度の記念事業を運営されている広渡俊哉主任教授以下、教官、院生ならびに学生諸氏にも厚く御礼申し上げる。

<引用文献>

丸山宗利 (2021) 甲虫コレクションガイド 24 九州大学総合研究博物館の甲虫コレクション. さやばねニューシリーズ, (43): 32-35.

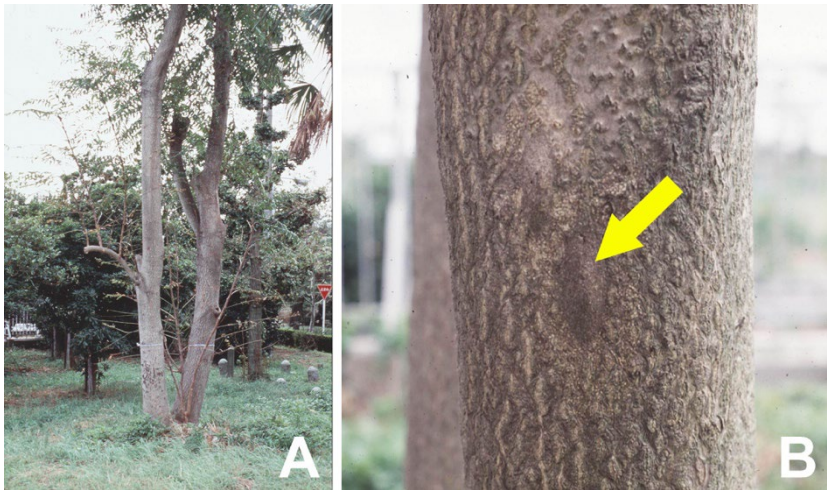


図 A 旧昆虫学教室（箱崎キャンパス農学部 1 号館）の外にあったシンジュの木。図 B シンジュキノカワガの繭（黄矢印）（いずれも 1992-3 年頃）。

昆虫学教室の思いで

(209) 八尋克郎

九州大学大学院農学研究科の修士課程に入学し、昆虫学教室に入ったのは1987年のことである。その当時、昆虫学教室は平嶋教授、森本助教授、多田内助手、大熊さんがおられた。先輩には山本さん、後藤さん、江田さん、直海さん、沢田さん、阿部芳久さん、阿部正喜さん、野村さん、吉田さんがおられ、同級生に安永君、後輩には紙谷君、中村君、上野君、竹松さんがいた。諸先輩は、蒼々たるメンバーである。昆虫学教室では、スノドグラスの昆虫形態のゼミ、マイヤーの系統分類学のゼミなどがあり参加した。後々大変勉強にはなったが、その当時は正直ついていけなかったのが実感であった。

私が昆虫学教室に在籍していて良かったと感じるのは、昆虫学教室の先輩や後輩の人脈である。これは昆虫学教室を出て就職してから強く感じたことであるが、さまざまな分類群で昆虫の分類を専門とする先輩や後輩たちがいるので、ある分類群のことについて何かわからないことや頼みたいことがあれば、先輩や後輩に気軽に聞いたり頼んだりすることできた。このことは、博物館に就職した私にとって仕事を進める上で大変助かった。

昆虫学教室に在籍していたときのことを思いだして、次に記憶に残っているのが平嶋先生宅で行われた麻雀大会のことである。昆虫学の知識では、諸先輩に太刀打ちできない。麻雀はかなりやっていて、少々自信があったので、腕の見せ所だと思って麻雀大会は張り切っていた。1988年に行われた麻雀大会で優勝して、平嶋先生がニューギニアかどこかで購入されたチョウの工芸品を優勝賞品としていただき、非常にうれしかったことを覚えている。工芸品の裏には「贈 優勝 八尋克郎君 1988年5月14日 平嶋義宏」と平嶋先生直筆のサインが入っている。現在でも職場の棚に飾っている(写真)。

日本全国に昆虫採集に出かけたが、特に思い出に残っているのが、小笠原への採集旅行である。同級生の安永君、後輩の紙谷君、中村君、上野君と小笠原に昆虫採集に行った。博多から紙谷君の実家がある東京まで運転をかわりながら走り、東京で1泊して小笠原に行った。小笠原へ行くフェリーでは、トランプをやりながら時間をつぶした。小笠原では、事前をお願いしていた植物防疫所の方から車を借りたのだが、ディーゼル車に間違えてガソリンを入れるという大失態をいきなりおかす。ガソリンタンクを洗浄して事なきを得て運転できたが、目的であったオガサワラクチキゴミムシは採集できずに、後輩たちに旅

費の単価が高くなると、からかわれながら小笠原の昆虫を採集したのを覚えている。ハプニングだらけのほろ苦い採集ではあったが、虫屋にとって憧れの地である小笠原の自然のなかで昆虫採集ができて、楽しかった思い出がある。



写真 平嶋先生からいただいたチョウの工芸品

九州大学昆虫学教室に在籍して

(210) 竹松葉子

私は、現在山口大学で、昆虫学関連の授業を学部生相手にしているが、学生相手にする授業から脱線したおもしろエピソードを語ろうとするとほとんどが昆虫学教室に在籍した時のことである。しみじみと、私の昆虫学者としての経験はこの教室で培われたんだと思う。せっかくなので、昆虫学教室 100 周年の節目に、学生たちに「ウケた」いくつかのエピソードを紹介しようと思う。登場人物の名前は伏せるのだが、きっとわかる人にはわかるのだと思う。

その 1 「メイガはメイガ、ヤガはヤガ！」

昆虫の同定が全くわからなかった私は、昆虫の種名を調べるときは毎回図鑑を 1 ページからめくっていた。目レベルはわかるのだが、ひどい時には科の同定すらできなかつたのである。毎日毎日図鑑を最初のページからめくっていき、どんだんグループを覚えていって、目的のページをすぐに開けるようになっていった。その当時在籍していた先輩方に科レベルの同定方法を教えてもらいながらの悪戦苦闘だった。

科の同定がすぐにできるようになる目もあれば、いつまで経ってもわからない目もあった。そのわからない目の最たるものが「蛾類」である。せめてメイガかヤガかシャクガかってくらいはわかるようになれば楽なのにと想着、ある先輩に「メイガとヤガの見分け方ってなんですか？」と尋ねた。

しばらく考えた先輩の答えは、

「メイガはメイガ～ってしていて、ヤガはヤガ～ってしているんだ！」

今は、先輩の気持ちがよくわかる。確かに、メイガはメイガ～ってしていて、ヤガはヤガ～ってしているのだ。

その 2 蛇のマウス丸呑み事件

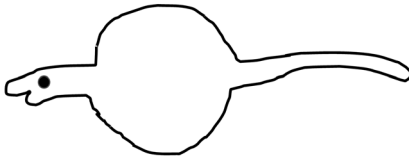
私の研究材料は家屋害虫のシロアリである。時には生きたままのシロアリが小包で送られてくるのだが、ちょっと忙しくて放置していると、段ボールを食い破ってその付近の木の机や椅子が被害に遭うこともあった。流石に研究室が食われてしまつては大変だと言うことで、私の研究材料は箱崎駅の近くにあった小さな飼育小屋に追いやられてしまった。当時、シテムシの子育行動の研究

をしていた私の後輩もシデムシの餌として生きたマウスやラットをたくさん飼育していて研究室中がネズミ臭で臭かったので、一緒に追いやられてしまった。似たような理由からか、その飼育小屋の隣の部屋は動物学研究室の蛇小屋だった。

ある日、動物学教室の学生が訪ねてきた。

「蛇が逃げたんですが、見ませんでしたか？」

昆虫飼育室を探すと、鳥籠に飼っていたシデムシの餌用のマウスが全部丸呑みにされていた。蛇は獲物を丸呑みにすると本当に漫画みたいになるんだと（こんなの↓）、丸々太って鳥籠から出られなくなった蛇を見て思った。



その3 どうしてシロアリを研究始めたか

私は特にこだわりの昆虫はない。ただ、動物（生物の中でも動くもの）が好きで、それに触れていたいと思ったのだ。

みんな小学1、2年生の頃に「将来の夢」という作文を書いた記憶があるだろう。今の子供は Youtuber とか公務員とか書くらしいが、私の時代は男の子はみんな野球選手、女の子はお菓子屋さんやスチュワーデスさんだった。その中で私は「大学の理科の先生」と書いた。変な子だったんだと思う。その頃は動物学者という単語は知らなかったので、ジャングルなどに探検に行っているいろいろな動物を観察できる職業と思って考えた結果だった。当時はテレビで「野生の王国」が人気で、その中に出てくる動物の研究者みたいになりたかったのだ。

だから、昆虫学教室に配属された時、先生から「何を研究したいですか？」と尋ねられたときに、「特にこだわりはないですが、ジャングルに行きたいです！」と答えた。

指導教官「じゃあ、シロアリの研究はどうだね？家屋害虫で社会的なニーズがある。真社会性昆虫で、原生動物と共生関係にあるので、生態の研究も面白い。なんととっても、熱帯昆虫なので、熱帯に行き放題だ！」

私「シロアリやります！」

そうして、私の時間のほぼ半分はシロアリに捧げられることになった。
今思えば、その時の決断は間違っていなかったと思っている。
そして、子供の時の夢を実現している。

たった3つのエピソードしか紹介できなかったが、もっともっとたくさん
のエピソードがある。研究室の他のメンバーのエピソードには私も登場する
ことがあるのだろう。このようにして、昆虫学教室があるかぎり、脈々と逸話が
語り継がれていくのは面白い。

1990 年代の飲食生活と学会発表の思い出

(217) 紙谷聡志

現在、新型コロナの影響で、教員や学生が集まってコンパなどができる雰囲気はありません。学会の大会も、密を避けるために、大半がオンライン開催という状況となっています。人と人のコミュニケーションがとりやすかった約 30 年前の大学における飲食生活と学会発表の思い出を記しておきたいと思います。

私が昆虫学教室に配属になった 1989 年は、平嶋義宏先生がご退職される年でした。この頃は何かにつけて、お酒を飲む習慣がありました。例えば、毎年 10 月に農学科で開催されていた新歓ソフトボール大会後や、2 月に博多リーセントホテルで開かれていた卒業パーティー後の二次会など大人数での飲み会では、箱崎の海門という居酒屋へよく行っていました。海門は現在でも営業していますが、大人数で飲食ができるので、頻繁に行った記憶があります。個人的な思い出としては、修士 1 年生になったばかりの農学科での歓迎会で、今では考えられないような大人数で騒いだり、激しくお酒を飲んでいました。当然、翌日は二日酔いで、記憶が一部なくなったりしました。

大きなイベント以外では、ゼミ室で飲んだり、居酒屋の藤よし、[対州](#)などいろんなお店へ行っていました。訪れる居酒屋も 2000 年代に入ると、学部学生の数が増えたことから研究室の年齢層が下がり、訪れる居酒屋も次第に変化して、クレア、串太、串ぼうず、喜楽、陣太鼓、男家などに多く行っていたかと思います。二次会が終わると、三次会の場所を確保するために、(ネットで予約ができなかったため) 下級生が箱崎を走り回ったりしていました。また、最後のメは、九大前のバス停の前にあっただるまラーメンや、地下鉄箱崎九大前の赤のれん&とん吉、筥松の白雲軒などに行っていました。

夕食は、自炊している者以外は、あまり美味しいとはいえない生協の学食を避けて、[サヨン食堂](#)や[ふなこし](#)、ハロー、[味勝](#)、[あと山](#)、[はこぎきとんかつ](#)などの定食屋を回っていました。時には、研究室の先輩たちに、車で(あと山ではない)焼肉食べ放題へ連れて行ってもらうこともありました。研究室から最も近かった味勝へ行くためには、農学部門から行くと遠回りになるため、農学部 3 号館前にあった、普段は使われていない古い通用門を使って、最短距離で訪問していました。かなり頻繁に通ったため、けもの道ができるほどでした。普段は、豚バラたれ焼き定食 600 円(最初のころは 550 円だったと記憶してい

ます)でしたが、体調がいい時には巨大な味チキン勝定食 690 円に挑戦したりしていました。味勝は 2008 年に閉店となりましたが、最後に、研究室に大量の味チキンカツを差し入れてくれました。

次に、研究室での生活で大きく変わったことの一つが、学会発表の形式です。現在はオンラインで開催されることが多くなったため、会場へ移動することなく、自室から発表するようになりました。しかし、学会はいろんな地方で開催されていたため、日本中を旅行する機会に恵まれていました。また、発表そのものは、1990 年のはじめまでは、スライド映写機を使って発表をしていました。スライドを作るのも、電算室の共用パソコン(NEC PC-9801)でプリントアウトしたものが荒すぎて使い物にならなかったために、図は手描き、文字はレタリングシールを使って作っていました。さらに、これを、自作したミニコピーフィルムを装填した一眼レフカメラで撮影し、暗室で現像していました。その後は、アンモニアでジアゾ化した青焼き(背景が青く・文字や図を白い)フィルムにする作業を経て、ようやくスライドを完成させていました。現在のよう、PowerPoint や Keynote などで、自分の講演時間直前までプレゼンを修正し続け、そのまま液晶プロジェクターで投射したり、Zoom などのオンラインで発表するのと比べて、時間と労力がとてもかかっていました。このため、発表練習で修正点を指摘されると、修正がとても大変だったことを今でも覚えています。その後、現在のような文字や図・写真を綺麗に印刷することのできるプリンターが Apple 社から発売されたことによって、パソコン上で作図やスライド作りができるようになり、大幅に作成時間を短縮できるようになりました。さらに、スライドから、フィルムを使わず、複写機で作成することのできる OHP に移行しました。これによって、暗室作業からも解放されました。OHP は 2 年ほどで廃れ、液晶プロジェクターによる投射方式に早々に置き換わってしまいました。発表にかかる労力の総時間は昔と今も変わらないため、楽になった気がしないのが残念ですが、プレゼンの質は格段に向上していることは間違いのないと思います。

研究室での飲食生活や学会発表は、今後も変化し続けいくことと思います。学生や教員による研究が発展するように、良い部分を残しつつ、よりよくなることを願い、本稿を締めたいと思います。

※ 飲食店名のハイパーリンクは「箱崎九大記憶保存会」のウェブサイトへのリンクです。



1990年の卒業式



1993年の卒業式（生防研にお礼の挨拶をしに行った時の記念撮影）



1994年ごろの農学部1号館3階の廊下



1996年のコンパの様子



電算室の NEC PC-9801

昆虫学教室にまつわる諸々

(220) 東浦祥光

福岡を離れ山口県に奉職して22年、思えば遠くへ来たものかと思いますが、昆虫学教室が一世紀を迎えるといひ、今の私を形作る多くを与えて頂いたことへの感謝の念と共に、心からの祝意を捧げます。僭越ながら、在籍当時の何がしかを文字に残せればと筆を執りました（なお、基本的に私の在籍時に職員として大学に居られた方々に「先生」と書かせて頂いております）。

私が昆虫学教室に在籍していたのは、学部3年生であった平成2年の秋から博士課程単位取得中退の平成9年12月までの7年間です。森本桂先生の教授在任全期間と湯川淳一先生の最初の1年となりましょうか。教養部の頃から教室界隈をウロウロしておりましたし、平成10年までは特別研究員として在籍していた野菜茶業試験場久留米支場から週末の度に戻っていましたので、平成最初の約10年は居たようなものと思います。私は、高校までは地元の奈良公園で食糞性コガネムシを集めて喜んでいる程度のうすい虫屋もどきでした。その程度の虫好きが何故、昆虫学教室を志望して九大を受けたかという理由として、高校3年の時に愛媛大昆虫出身の生物の先生へ「大学は虫の研究ができる所に行きたいのですが」と進路相談したら「九大が良いよ」と唆、もとい勧められたことと（相談相手に強力なバイアスが掛かってたなどは後に思いました）、当時愛読した「ロン先生の虫眼鏡」で言及されていたことがあります。少し長いですが、後者を引用します。“今でもそうだが、九州大学農学部の昆虫学教室は、日本の昆虫研究の総本山（メッカ）ともいうべき存在だった。今は故人となられた江崎悌三博士を総帥として、その下に、わが国のハチ類の研究の第一人者ともいうべき安松京三博士があり、さらに若い新鋭の研究者が綺羅星の如く居並ぶという陣容だった。この九大昆虫学教室は、昆虫の研究を志す者にとって、つきないあこがれの場所であり、知識の源泉のように思えたのだった。”（光瀬龍「ロン先生の虫眼鏡 Part2.」所収「狩人の耳にカメムシの唄が聞える」より） 光瀬龍は日本SFの大家ですが、私にとっては永遠に虫眼鏡の「ロン先生」です。この話では、中学三年生の光瀬少年が抱いた疑問に、縁あって江崎先生が丁寧に応えられたというエピソードが大きな軸になっています。上記随筆内で光瀬氏はこう熱弁を振るっています。“だから今も思う。いかなる位置や立場の人でも、小学生や中学生からの質問や意見を、決して無視してはならない。届いた一枚の回答に、子供は輝かしい未来を見ることだってあ

るのだ。”

さて、上記のような受験生が九大で二次試験を受けた後、「落ちたら再挑戦は許されまい」と思ってウロウロと悩んだ挙句、どう調べたかすっかり忘れてましたが農学部1号館の昆虫学教室にたどり着き、中にいた人に「教室を見せて頂けませんか」と頼むという思い切った挙に出ました。部外者にはちょっと、と断られるかと思ったのですが、親切にも標本室や図書室などを案内して下さいました。その方は私の教室配属時に最古参に近かった阿部正喜さんだったので、教室には外へ開かれた昔の先生の風が残っているのだろうと感激した記憶があります。時代は違っても、来る者に誠実な美風はこれからもずっと続いて欲しいと思います。

当時は「九州大学農学部農学科昆虫学教室」と簡潔に書けた時代の末期でした。伊都へ移転した今となっては文字に書き残すのも幾許かの価値はあるでしょう、箱崎キャンパスの農学科1号館3階は北から蚕学、植物病理学、昆虫学の3教室が並んでいました。廊下を挟んで東側に北から電算室、ゼミ室、事務室、助教授室、図書室、標本室。西側に電頭室、教授室、学生室×3。...だったと思います。私がいたのは一番南端の301号室でした。この部屋には今思えばドラフトの成れの果てであるコンロ置き場と、流しがありました。学生でお茶代を集めて買って来た安売りの挽コーヒー缶が常備されていたものです。皆でアメリカンもここに極まれりという感じのコーヒーをポットになみなみ淹れていたのが思い出されます。コーヒーの湯を沸かす横で、誰かが錆びた浅皿で虫をKOH処理していたなどという風景は昆虫学教室ならではのものでしょう。1号館の他、2号館に標本室が2つ、図書館にも標本室が1つ、キャンパス農場内に飼育室、私がいたころは毎年草刈りをするだけだった実験圃場がありました。...他にも九大出版会の建物にスペースがあったかな？ かなりタコ足だったという記憶があります。教室内でクーラーがあったのは、教官室を除けば標本室、図書室、ゼミ室、飼育室、電算室で、学生室に設置されたのは私の在籍期間の終盤だったと思います。学生より標本、文献、生きた虫、パソコンの方が優先されて冷房化されていたと後に友人に話したら、「理系あるあるという感じで面白い」と言われたものです。電算室のパソコンはPC-98が主体で5インチフロッピーから3.5インチへ変わる頃でした。深夜に5インチフロッピーを抜き差ししながら、PCゲーム「信長の野望」をやったというのも懐かしい思い出です。「ちょっと一野望して帰るつもりが、つい徹野望になった」という言い回しがあったかと。インターネットの黎明期でもあり、個人アドレスが配

布されたのは学生時代の後半という感じでした。

このような環境で、全国から昆虫の研究を志す学生が集まる状況は光瀬少年が憧れの目で見ていた頃と変わらなかった訳ですが、当時の農学科進学生の中では、お世辞にも昆虫学教室の人気の高かったとは言えず、学科内では「変わり者の溜まり場」的に見られていたかと思います。少し前の先輩方は大層ラフな格好（「パンツ一丁に近かった」とまで膨らんだ風聞の記憶があります）で廊下を行き来され、他教室の女子学生から伏魔殿のように思われていたとか何だとか。今ではかなり状況が違うと思いますが、入った頃の教室はとにかく男の園で、同期の神毛恵さんが教室始まって以来3人目の女子学生と言われていました（それより前は琉球大に居られた屋富祖昌子先生と、我々より3学年上の竹松葉子さん）。その後、後輩に女子学生が次々入って来るようになりましたので、時代の転機にいたのかもかもしれません。

私の研究対象はトビコバチという微小寄生蜂ですが、最初に森本先生にお会いした時、漠然と「蜂に興味があります」と言った事が源流でした。「コバチというグループがあるのだけれども、研究者が少なくてね」と森本先生から勧められた直後に、その時はまだ院生だった野村周平先生から「友人が集めていたコバチ標本をあげよう」と主に美しいコガネコバチの類が入った標本箱を頂き、それをお見せした三浦一芸さんに「コバチってそういう大きな綺麗なのばかりじゃないんよ」と粉の様に小さなタマゴヤドリコバチが入った液浸瓶を見せて頂いた、というのが一連の私の原体験というべきものです。コバチという生き物は凄まじいまでの多様性を誇りますが、何も知らない学部生がその一端を衝撃をもって経験させられたということかと思います。そしてそれをできるだけの人の豊富さが昆虫学教室にあったというべきであり、その末席に居られたのが誇らしく思える次第です。

連年転勤の可能性に晒される県職員生活にあって23年中、実に20年試験場に配属され、相手は時期時期で違うものの害虫担当として働いているのは、ひとえに約10年間教室で鍛えて頂いたからに他なりません。地方農試は当然ですが応用昆虫学系出身の人が多く、分類学系出身が少ないです。分類自体を仕事にできるわけではないですが、その知識とスキルは極めて役立つ世界でもあります。入庁2年目の病害虫研修で講師に「これ、なんだ？」と見せられ、「何とかサルハムシですね」と答えたところ、「さすが、そっちから分かるか」と言われたことがあります。正解はダイコンサルハムシでした。「大根の害虫でハムシ→ダイコンサルハムシ」というのが県職員の虫屋では一般的な考え方ですが、

虫そのものの特徴から「寄主は何か分からないけど形がサルハムシ」という見方は特殊かもしれません。私の中のコバチ以外の虫への親疎は、同時期に在籍していた人達の専門の虫は取りあえず採っておすそ分けするという慣習による部分があるため、紙谷聡志先生のウンカ・ヨコバイ、上野輝久さんのヒラタムシ上科、小島弘昭君のゾウムシ、高橋直樹君のジョウカイボンというようなグループは馴染みがあります。蜂屋のくせに今でも「お、ヒメマキムシだ」とか思えるのは、やはり隣の席に上野さんがおられたからでしょう。こういう「いつの間にか育ってしまう虫知識」が得られる、多士済々な環境であり続けて欲しいと思います。

そして一応コバチ屋として今でも私に声がかかることがあるのは、やはり本筋の「分類学者を育てる」ための環境・教育の賜物です。特に、私が配属されたころ、愛媛大学を定年退職されたばかりの教室の大先輩でもある故立川哲三郎先生が標本と文献を教室に寄贈して下さいましたこと（今でも日本有数のコバチコレクションです）、修士1年時に多田内修先生が英国へお連れ下さったおかげでBMのトビコバチの大家に面識ができたことが、今に至る基礎になっています。素晴らしい環境・教育の結果、一人前の分類学者になれていないのはひとえに私の菲才と不徳によるものですが、生きているうちという長めのスパンで挑戦し、そしていずれは私のささやかなコレクションも教室へ引き取って頂くことを希望しております。

取り留めがなくなりましたが、最後に一つ私の仕事と昆虫学教室の思わぬ縁について。私は5年前まで6年間、農試の柑橘分場におりました。日本の西南暖地には昔からミカンバエというミバエ類がありますが、1959年に安松京三先生、永富昭先生、中尾舜一先生による論文が2報あり、生態及び防除の基礎文献として知られています。8年ほど前にミカンバエの特効薬が販売中止になって大騒ぎになり、安松・中尾（1959）で試験されたバイト法を今の資料で試すという仕事をしました。これは教室の業績が私の今の仕事にストレートに役立った事例なのですが、当時色々調べている中で、学生時代以来常に机の脇にある立川先生の著作集に収録された新聞コラム等に、学生時代の立川先生が卒論研究の最初の対象としてミカンバエの寄生蜂を探索され、それが失敗に終わったことが書かれていたことに気がきました。当然かつて読んでいたのですが、その対象がミカンバエであったことをその時初めて認識したのです。前出のように学恩深遠な立川先生がよりによってミカンバエ！と驚くとともに、今に残るミカンバエ基礎文献が、生態の安松・永富（1959）、防除の安松・中尾（1959）

に加え、天敵の安松・立川（1959）になっていたかもしれないという、安松先生の構想に衝撃を受けました。その時天敵が発見できず、それならと安松先生から与えられたルビーロウムシ天敵の研究を皮切りに立川先生がトビコバチ分類の泰斗になられたこと、安松先生の孫弟子であり立川先生の弟子とも言える私が巡り巡ってミカンバエを相手に仕事をしていること、もうこれは奇縁というべきものでしょう。また、これは単なる偶然のエピソードというだけではなく、ミカンバエの天敵は少なくとも私の経験内でも見つかっておりませんので、昔も今も日本で確認されていないのは事実です。しかし、ミバエにはそれ専門のコマユバチが寄生すると言っても良いようで、ミカンバエが分布しているけども特に問題視していない国に何かいるんじゃないか、とは神戸大の前藤薫先生にも伺ったことがあります。こういうのは地方農試の者には手が出せません。ぜひ、九大昆虫の出身の方に解明して欲しいと希っております。

以上、思いつくまま思い出すまま綴りましたが、更なる百年に向け、九大昆虫学教室が日本の昆虫研究の一方の中心として益々発展されることを心より祈念しつつ、擱筆致します。

標本箱

(237) 後藤秀章

ほとんどの昆虫の分類研究者がたくさん持っているのが、文献と標本箱。私が就職した時、まず他分野の研究者に驚かれたのが、文献を自分で買っていたことです。今ではインターネットの発達などでずいぶんと便利になりましたが、当時は国内で手に入らない古い文献など、こつこつと自分で買い集めていたものです。海外の古本屋に関する情報交換も、研究室で盛んに行っていました。それでも昆虫学教室ではコピーが只でできたので、それが本当にありがたかったです。

次に標本箱。私の学生時代、標本箱とその置き場所を確保するのは、すごく大変だったような記憶があります。今でこそ 100 箱単位で購入し、またそうでなくては仕事にならないのですが、当時は標本箱（主にインロー箱とその中に入れるユニットボックス）が十分になくて、助手時代の紙谷さんが、学生の箱を確保するのにかなり苦勞しておられました。そういえば、私は最近異動したのですが、その異動の際の引っ越しで思い出したのが、九大時代の標本箱を今でも使っていること。確か卒業すると標本箱を返却することになっていたのですが、就職後に研究室に問い合わせたのですが、「今は十分にあるので、そのまま使っていていいよ」と、これも紙谷さんに言っていただきました。あのときは、ありがとうございました。その箱の中には、森本先生にいただいたものもあります。正確には森本先生のキクイムシの標本をいただいたのですが、標本の入っていた箱がその当時ですでに茶色を通り越して黒くなったような年代物です。それでもありがたく使わせていただきました。あと標本箱の置き場、確か“領地”と言っていたように思います。標本箆笥の上が学生の場所で、そこにうずたかくインロー箱が積み上がっていました。余談ですがこれは今から考えると本当に危険で、私は熊本地震を熊本で経験しましたが、その時にだいぶ標本を壊してしまいました。今はそんなことはしていませんが、標本箱を積み上げるのはお勧めしません。学年が上の方は広大な“領地”をお持ちでしたが、研究室に入ったばかりの頃は、場所の確保にも一苦勞でした。卒業者が出ると、空いた場所を取り合います。私は確か八尋さんの跡地をいただいて、だいぶ楽になりました。このような些細なことですが、今思い返すと学生の頃の楽しい記憶とつながった良い思い出となっています。

ヴィッテは神社の馬の像にまたがったのか？

(240) 保科英人

平成 27 年 3 月、私は故伊藤修四郎・大阪府立大学名誉教授（平成 28 年 12 月 3 日没）を訪ねた。当時、私は九州帝国大学附属彦山生物学研究所の設立者である高千穂宣麿（1864-1950）について調べていた。そこで、戦争中、同研究所の事務嘱託をされていた伊藤先生に、高千穂の逸話を語ってもらうべく、御自宅にお邪魔したのである。

故伊藤先生からは高千穂にまつわる貴重な話をおうかがいすることができ、保科（2015, 2016, 2021）で十二分に活用させていただいた。ただ、故伊藤先生からうかがった一つの話が、妙に気になっている。それは、先生の恩師にあたる江崎悌三に関する思い出話である。江崎は、ドイツ人の義父のフリードリッヒ・ヴィッテ（シャルロット夫人の父）（写真 1）が、英彦山豊前坊高住神社で馬の銅像にまたがった写真を、故伊藤先生に見せたというのだ。故伊藤先生は「日本人ではとても真似できないことをするなあ」と感心されたとのこと（保科, 2017）。

私は幸いにも現在の江崎家関係者の方々の知遇を得ることができた。そこで、これらの方々に、フリードリッヒが馬にまたがった写真を探していただいた。しかし、出てくるのは江崎悌三の家族が「牛」の像にまたがった写真ばかりである（たとえば写真 2）。写真 3 は現在の豊前坊高住神社の牛の銅像である。銅像の台座や背景の大木から見て、写真 2 は同神社で撮られたものと判断して、間違いあるまい。

そもそも、戦前の豊前坊高住神社に、馬の銅像は本当にあったのだろうか？現在の同神社に聞いてみても、はっきりとしたことはわからなかった。来日した外国人が、神社に奉納されている馬の像に、面白がってまたがるというのはありがちな話だ。しかし、結局のところ、フリードリッヒが、実際に豊前坊高住神社でお茶目をしたかどうかは不明というほかない。江崎との思い出を語った故伊藤先生にしても、なにぶん半世紀以上前の話である。御記憶の混同があっても、決しておかしくはない。もちろん、フリードリッヒが馬の像に乗った写真はたしかに実在したが、現在は失われただけ、との可能性も大いにある。

最後に、一人の老兵から昆虫学教室の若人たちへの助言である。完全オンラインの学術誌なり同好会誌なりに、和文で何かを発表しておくことは重要である。たとえば、「〇〇コレクションは現在行方不明である」と、どこかに書いた

としよう。すると、それを読んだ読者から「そのコレクションなら、どこそこの博物館で保管されていますよ」との思わぬ情報が得られるかもしれない。同好会誌等への報文の投稿は、研究業績としてカウントされないため、軽視されがちだ。しかし、完全オンラインの『きべりはむし』に寄稿したが故に、保科(2017)はありがたくも江崎家の方々の目に入った、との事実がある。写真2はそのような経緯で提供いただくことができた。

末尾ながら、写真提供にご協力いただいた阿部えり、江崎悌一、鈴木頼奈(五十音順)の御三方に厚く御礼申し上げる。

補記

昭和14年6月17日付九州日報によると、同月14日に玉屋(かつて博多にあった百貨店)の別館にて、江崎悌三ほか5名が昆虫標本製作講習会を開いたという。昭和初期の名古屋の松坂屋では、モリアオガエルが生体展示されたこともある(昭和2年6月21日付新愛知)。このように、戦前の百貨店は、科学普及の場としても機能していた。

<引用文献>

保科英人(2015)博物学者高千穂宣麿先生小傳. 日本海地域の自然と環境, (22): 133-223.

保科英人(2016)若人に託した科学一等國の夢～昆虫男爵高千穂宣麿の生涯. きべりはむし, 38(2): 38-47.

保科英人(2017)追悼伊藤修四郎先生. 高千穂宣麿最後の知己. きべりはむし, 39(2): 53-57.

保科英人(2021)近代華族動物学者列伝. 勁草書房. 258 pp.



写真1 フリードリッヒ・ヴィッテ（中央）と江崎悌三博士の御令嬢の
るり（左）とはる（右）（鈴木頼奈氏提供）



写真2 シャルロツテ夫人と4人のお子様方（阿部えり氏提供）



写真3 現在の豊前坊高住神社の牛の銅像（筆者撮影）

コーヒータイム

(245) 徳田 誠

2017年秋、箱崎キャンパスへのお別れの機会を兼ねて、湯川淳一先生にご指導を受けた卒業生有志による湯川先生の喜寿のお祝い会を開催した。午後からの一次会はカフェを借り切った卒業生たちの近況報告、夜の二次会は居酒屋で湯川先生を囲んでの歓談を楽しんだ。この会では参加者にアンケートをとり、在学時の湯川先生との思い出などを記入してもらった。

私自身は昆虫学教室で学部から博士課程までを過ごし、2003年3月の学位取得後もタマバエの研究を続けながら、四半世紀にわたって湯川先生にお世話になり続けていることもあり、研究に関するディスカッションや、マン・ツー・マンで論文の添削をしていただいたことが思い出として最も印象に残っているが、参加者の中では、車で野外調査に連れて行っていただいたことや、海外（国際会議や調査）に連れて行っていただいたこと、いう回答が多かった。そして、もっとも多かった回答は、私としては意外であったが、ゼミ室での“コーヒータイム”で色々なお話をうかがったこと、であった。

誰が名付けたか定かでないが、“コーヒータイム”は、湯川先生がご在職当時の昆虫学教室で育った世代には欠かすことができないイベントである。それは不定期に訪れるもので、平均すると頻度は週に1回程度であっただろうか。時間は夕方、たいていは、湯川先生が長い会議から戻って来られた時に発生しやすかったように思う。湯川先生ご本人が学生部屋に来て、「コーヒー飲もうか?」と言われることもあれば、技官の山口さんが伝えに来られることもあったはずだ。

そして、手の空いた（あるいは、空けられる）学生たちはゼミ室に集い、コーヒーを飲みながらの談話が始まる。話題は様々で、研究や学会に関することもあれば、世の中を騒がせている事件に関する事、あるいは研究室のメンバーに起こった出来事など、とりとめのない話のことがほとんどであった（図1；筆者注：コーヒータイムの写真は見当たらなかったため、代わりにゼミ室での懇親会の様子を載せた）。

私が好きだった話題は、湯川先生が語られる過去の昆虫学教室の逸話や先生ご自身の体験談であった。この会は、おそらく平均で1時間ほど、話が盛り上がった時には2時間ほど続き、ひと段落した所でお開きになった。そして、そ

の後は各自の作業に戻ったり、湯川先生に論文を見ていただいたりという時間になる。

大学は研究を通して社会の未解決課題に対応できる人材を育成する場所であると思うが、人類が抱える問題を解決する際に重要となるのは、単なる研究遂行能力ではなく、周りの人を良い意味で巻き込んで大事を成し遂げられるような“人間力”、つまり、人としての魅力であると思う。

佐賀大学に着任し、研究室を運営するようになって丸 10 年が経った。私自身は、学生たちがやりたい研究を円滑に進められるように、そして、何かに行き詰まった時に、当人たちが主体的に物事を解決するためのヒントを与えられるように、学生にとっていわば“コンビニエンスストア”のような存在でありたい、と思っていたが、この機会に喜寿お祝い会の際のアンケートを読み返し、本当に目指すべきは、便利だけで顔を覚えられないようなコンビニの店員ではなく、その人と語り合った時間が学生にとって生涯の糧になるような、行きつけの“カフェのマスター”のような存在ではないか、と思い直した。

大学教員の雑務の多さや研究時間の減少、日本の研究力の相対的な低下が取りざたされている昨今、大学にとって、そして社会にとって本当に憂慮すべき問題は、一人一人の学生たちと真摯に向き合って人格をぶつけ合い、変革の時代を生き抜くための芯となる人間性を育むための時間が削られていることではないだろうか。

さて、ではどうやって“カフェのマスター”になるための時間をこじ開けるか、数分おきに届くメールの着信音を聞きながら、パソコン画面に向き合って一人、コーヒーを片手に思案している。



図1 ゼミ室での懇親会の様子（1999年頃；左から井上広光さん、筆者、小島弘昭さん、安部順一郎さん。まだフィルムカメラの時代で、この時は誤ってモノクロフィルムを入れて撮影したため、現像するとすべて白黒写真になってしまい驚いた）。

再び昆虫学教室に戻って

(295) 吉松晶子

ひこさんがらがらの会の皆様、昆虫学教室開設 100 周年おめでとうございます。平成 21 年 3 月に修士課程を修了した吉松と申します。この度、ひこさんがらがら（教室 100 周年記念号）に投稿させていただくことになり、大変恐縮しております。

修士修了後は、高校で生物の教員として教鞭をとっております。趣味の範囲で教室の同期仲間（田津原、木村）と年に数回の頻度で水生昆虫（ゲンゴロウやタガメなど）の採集をする程度で、本格的な研究ができておりませんでした。期せずして長期専門研修（1 年間）の機会を昨年度頂き、昆虫学教室に 12 年ぶりに戻ることになりました。

農学部が新キャンパスに移転して初めての昆虫学教室訪問となりましたが、昔の箱崎キャンパスの建物とは全く印象が異なる巨大なビルになっていて、その変貌ぶり（とてもきれいで衛生的です）に啞然としてしまいました。内心ビクビクしながら教室を尋ねましたが、広渡先生や紙谷先生、三田先生、屋宜先生、室員の皆さんに暖かく昔と変わらない雰囲気でお迎えいただきました。

今回の長期研修では、学生時代にできなかった系統解析にチャレンジすることにしました。なぜなら、学生時代に取り扱っていたヨコバイ科のアオズキンヨコバイ属は外部形態の差に乏しく、分類が難航していたからです。また、近年の高校の生物では DNA や遺伝子などの分子生物学的内容が増え、さらに次年度始まる新課程では遺伝子解析・系統分類から進化へのつながりがより重視されています。サンプル集めなどの準備やプロトコルの試行錯誤、プライマーの検討など大変でしたがとても有意義で楽しい時間でした。

先生方や室員の方々には親切・丁寧でいろいろと教えていただき、無事に研修をおえることができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。この研修を通して、皆さんの研究に対する熱意や新たなことを学んだりチャレンジしたりする行動力に触れ、自分にとってとても刺激になりました。特に、このコロナ禍でも様々な障壁を打破しながら前に突き進んでいく学生の方々の姿が印象的でした。皆様のご健勝と一層のご発展をお祈りいたしております。

昆虫学教室で出会った方々

(317) 金尾太輔

この度は、昆虫学教室開設 100 周年という記念すべき節目に、心よりお祝い申し上げます。私が 2015 年 3 月に昆虫学教室を卒業してから早くも 7 年が過ぎましたが、在学中から今まで、昆虫学教室の諸先生方や諸先輩方、在学生を含む後輩の皆さんのご活躍は断続的に見聞きしており、昆虫学教室は日本の昆虫分類学を牽引する活発な研究室であることを実感している。また、卒業してから海外の研究者と知り合う機会も増えたことで、昆虫学教室のように「大学に属する昆虫分類学に特化した研究室」は世界を見渡しても稀有であり、なおかつ毎年のように博士を輩出する場は他にないのではないかと感じるようになった。さらに、昆虫学教室に関係する皆様の多様な学問分野や業種におけるご活躍から、昆虫学教室で学ぶ分類学的素養や基礎科学的知見の重要性を度々再認識させられる。昆虫採集の経験もほとんどないまま昆虫学教室の門を叩いた当時の私は、自分のことに精一杯で、このような昆虫学教室の環境や歴史、日常について冷静に考えたことがほとんど無い短慮な学生だった。その反面、昆虫学教室で経験することは私にとって非常に斬新かつ強烈な場合が多く、今でも多くのことを鮮明に思い出すことができる。

私は、広島大学総合科学部を卒業後、2010 年 4 月に昆虫学教室の一員となった。当時は、多田内修教授（現名誉教授）と紙谷聡志准教授が昆虫学教室をまとめられていた。また、総合研究博物館には着任後間もない丸山宗利助教（現准教授）が在籍されており、私は好白蟻性ハネカクシの分類について師事することになった。加えて、故・森本桂名誉教授や湯川淳一名誉教授も頻繁に大学に訪れ、精力的に研究教育活動を行われていた。多田内先生が 2012 年 3 月に退官されたのち、教授不在の 1 年間を経て、2013 年 4 月から高校の大先輩でもある広渡俊哉教授が着任された。吸収すべき事が多い学生時代に、これほど多くの先生方の教育研究活動に対する姿勢や学生との接し方を目にする事ができた幸運は、現在の私の研究者としての振る舞いの基礎になっている。

私が昆虫に興味を持ったのは小学生の頃で、夏休みの自由研究に毎年昆虫標本を提出していた。しかし、中学以降はほとんど昆虫に触れておらず、大学卒業まで部活動やアルバイトに励むごく一般的な学生生活を送っていた。そのため、昆虫学教室に入ってから昆虫漬けの生活はまるで異世界に来たような感覚で、修士課程の 2 年間は勉強や研究に追われて毎日頭がパンク状態だった。

昆虫学教室で出会う学生も、幼少期からずっと昆虫を追いかけてきた人や、焼酎の一升瓶を片手にいつ見ても机で作業している人など、それまで私が出会った事がないタイプの人が多く、「ここでは友達ができないかもしれない...」とよく思ったものだ。しかし、私が博士1年生になり、修士1年生として有本晃一さん（現日本学術振興会特別研究員 P D）が昆虫学教室に入ってきた事で、その考えは払拭される。彼は例に漏れず幼少期から昆虫に親しんでおり、その知識量は私の比では無かったが、話すとすぐに頭の良さも私の比ではないことが分かった。また、彼は物事を鳥瞰することに長けており、それまで私が抱えていた悩みを同じ目線で共有でき、共感してくれたことは本当に心強かった。彼とは国内外で何度も野外調査を共にし、今でもよく連絡をとる仲になった。また、昆虫学教室では、技官の山口大輔さんにいつも気にかけていただいていた。山口さんが昼から仕込んだおでんを囲んで飲むお酒は美味しく、毎回とても良いリフレッシュになった。熱帯農学研究センターの細石真吾研究員（現助教）は、マレーシアやカンボジア、屋久島で調査をご一緒させていただいただけでなく、昆虫学教室のゼミや私が企画した輪読会にも積極的に参加して下さった。研究に行き詰まった時などはよく細石さんに相談し、穏やかに励ましていただいた。初めはどうなることかと思った昆虫学教室の生活だったが、このように多くの方に支えていただき、自分なりに成長できたように思う。

幸運にも、私は 2020 年 4 月から山形大学理学部の助教に着任し、今後も自身の興味に基づき自由に研究を続けることができる立場を得た。着任と同時にコロナウイルスが流行し、未だコミュニケーションを気持ちよく取りづらい状況ではあるものの、少しずつ意欲的な学生にも出会うことができ始めている。今後は学生を育てる立場として、昆虫学教室で学んだ知識や経験を良い形で学生に還元していきたい。また、昆虫分類と関連する基礎科学の発展に微力ながらも貢献できるよう、自分なりに骨のある研究を継続していきたいと思う。

2013年4月、筆者は大阪府立大学から九州大学の昆虫学教室へ、指導教官の広渡先生を追いかける形で進学した。受験時には他の大学への進学も視野に入れていたが、昆虫学教室は優秀な先輩方が多く在籍しており、多くの助言を得られる魅力的な環境だと考え、九州大学を選んだ。このように書くと聞こえは良いが、実際は、すこぶる低いTOEICスコアのせいで夏の大阪府立大学の院試に一人だけ落とされ、後がないなか冬の院試を何とかパスして、這う這うの体で進学した。目論見通り、在籍期間は室員の皆さんから多くの刺激を受けることができた。とくに、分類学を進めながら役に立つあるいは面白い研究を遂行せよ、という社会で生きるために突き付けられる無理難題に対して、真摯に取り組む皆さんの姿勢は大いに参考になった。どんな形であれ、昆虫学教室へ進学した判断は正解だったと信じている。

また、いまでこそ隙あらば海外出張をする筆者であるが、進学当初は勝手が分からない海外調査に消極的であった。2014年3月に有本さんと伊藤さんにタイへ連れ出していただいてから、海外調査の魅力に気づき、さまざまな国に調査へ出掛けた。各国を巡った経験は人生の糧となった。マレーシア、ラオス、台湾、ニュージーランド、アメリカ、チリ、ルワンダ、世界各地の調査に同行していただいた室員と北大の小川さんには感謝の念に堪えない。2015年9月～11月の約2か月、有本さんと二人でヨーロッパ各国（ドイツ、チェコ、オーストリア、イタリア、スイス、フランス、イギリス）を巡り歩き、各地の自然史博物館で標本調査をしたこともあった。大荷物を抱えながら、電車で国境を越えて、できるだけ安いホテルを二人で探しながら、学会発表を2回こなす、楽しくも過酷な旅であった。駅の料金所の説明が読めず、適当に買った電車の切符がペット料金であることが車掌の巡回で発覚し、違反金を支払う羽目になったこともあった。しかし、各地の博物館で撮影したタイプ標本の写真の数々はいまでも極めて重要な資料となっているし、各地で出会ったキュレーターの方や訪問中の研究者の方との交流はたいへん有意義であった。昨今、感染症情勢により、海外渡航の難しい状況が続いているが、自由に海外へ行き交える日が来た折にも、昆虫学教室には、当時の私のような及び腰の若者に視野を広げる契機を与えられる環境であってほしい。

さて、ここまで昆虫学教室を真面目に褒めてきたが、実はかなり無理して執

筆している。というのも、執筆にあたり、昆虫学教室で過ごした日々を思い返すと、何故か酒を飲んだ記憶しか浮かばないからである。長期調査に行く前日には酒を飲み、誰かの就職が決まると祝杯をあげ、なんでもない日も酒を飲んでた。仕事と睡眠を両立したい筆者は、24時間働き、12時間寝る36時間サイクルで生活していたのだが、ずれた生活リズムが災いし、起きてすぐ酒を飲んで仕事にならないこともあった。私にとっての朝飯をゼミ室で食べようと扉を開くと、目的不明の宴会が始まっており、大原さんから「お！よく来た！」とコップを差し出され、朝飯は酒の肴になった。被害者ぶった書き方をしたが、実のところ、基本的に筆者は加害者側である。室員向けに発信したメールのうち、飲み会のお誘いの占める割合はかなり多い。室員の中には、酒好きでない人も存在したが、皆さん（少なくとも表面上は）にこやかにお付き合いいただき、ありがたい限りであった。

美味しいものもたくさん食べた。さすがは福岡、どこに行っても料理が美味しかった気がする。金尾さんが在籍していた頃は、だいたい毎晩、金尾さんの車で夕飯を食べに行っていた。また、三田さんに燻製の作り方を教わって以来、年に数回、燻製を作って飲み会をしていた。なぜか筆者のなかで、卒業式と燻製が関連付いてしまい、卒業式といえば燻製だ、と主張して、自身の卒業式の日もスーツ姿で肉やチーズを燻していた。伊都に移って初めての卒業式でも、燻製を企画し、燻し場所に困って喫煙所で燻製したところ（喫煙者はみんな煙が好きだろうという算段）、クリームが入ったようで、施設課から立ち退きを命じられた。あと1時間もすればしっかり燻されるので...と嘆願して、何とかなかった。

虫を採って、虫を視て、旨いものを突き、酒を飲む生活はたいへん楽しいものであった。100年続く昆虫学教室は、構成員の移ろいとともに、時々刻々と雰囲気も変わってきただろう。しかし、室員の皆さんは、どの時代も一貫して、研究を楽しんできたのではないだろうか。これからも楽しく研究生活を送ることができる環境であってほしいと思う。

英彦山での経験と先輩方

(336) 屋宜禎央

研究室配属も意識しだした学部2年時は、ちょうど多田内先生が定年を迎え、教員は紙谷先生1人の時期だった。植物も多少好きだったこともあり、当時は漠然と植食性昆虫の研究がしたいと思っていた。したがって、ヨコバイの分類をやることになるのかなと思っていた。しかし、学部2年の終わり頃、広渡先生が教授として着任されることが耳に入り、好きだった蝶と同じ鱗翅目である蛾類の研究の方が絶対とつきやすいと思い、広渡先生に師事することに決めた。

そこで最初に与えられたのが、英彦山でのライトトラップによる蛾類相調査である。早速分類をやる前に、色々な蛾類を知っておくべきだと助言された。恥ずかしながら当時の私は、蛾類を研究しようと思っているにもかかわらず、ライトトラップをほとんどやったことがなかった。黒子先生の『彦山昆虫目録 I. 鱗翅目』を読んで、たくさんの蛾類が採れるのは頭では分かっても、一晩にどのくらいの個体数の蛾類が採れるかということさえよく分かっていなかった。ただ、とにかく色々な蛾類を採らねばという気持ちが強く、ひとまず色々な植生の地点で採集すべきだと考えた。そこで、彦山生物学実験施設からブナ帯のある北岳まで合計8地点に往復約5時間かけてボックス型のトラップを仕掛けに出かけ、次の日の朝トラップを回収に行く2往復の登山を15回行った。当時、実験施設の技能補佐員だった大原直通さんに毎回車で大学から送迎していただいたのは、ありがたかったとともに、車の中では疲れもあり寝てしまったのは申し訳なかったと思っている。確かに体力的に大変ではあったが、高校の頃は山岳部だったのでトラップを背負った登山はまだ良かった。一方で、多いときは次の調査の前日までかかってしまった回収後のソーティングと、調査終了後の永遠に続くかと感じるような同定作業が何より大変だったと覚えている。しかし、他の方にとっては、トラップの設置・回収の方が強烈だったようで、その後飲み会の席等で、「今後、君の研究と同じような研究を誰かがすることになった時、絶対同じことはできない」と言われたのをよく覚えている。確かに最近運動不足の自分も今となっては困難だと思う。

卒論は当時は確かに大変ではあったが、その後の研究生生活において役立つこともあったと思う。その最たる理由がサンプルの確保である。実は卒論と並行して、実験所で深夜までスクリーン型のライトトラップも行なっていた。下手

をすると大蛾類を対象とした卒論のソーティングよりも時間をかけて、小蛾類だけでも数千個体は展翅したはずである。修士課程からは、モグリチビガ科の分類を行うことになったが、九大には標本がほぼなかった。そこで、まずは、英彦山で自分で採集した標本を見ることから始めた。その中で、一番多くライトトラップで採集していたキイロモグリチビガを見てみると、前翅の帯が太いものと細いものが見えた。そこで解剖をしたところ、交尾器にも違いがあることが分かり、英彦山の標本をホロタイプとして私にとって初めてのモグリチビガの新種記載を行うことができた。その後も、当時英彦山で採集した標本を使って、学外の研究者と論文を書くこともでき、英彦山での研究は現在も自分にとってはなくてはならないものとなった。

このように、大量に採集することは、学部 1、2 年の時に米田洋斗先輩など様々な方と採集に行った時に、大量に色々な昆虫を採っている様子を見て学んだことである。種内・種間変異を見極める上でも、解剖の練習に使う上でも、その他様々な理由でサンプルが大量にあるという状況が非常に望ましいのはいうまでもなく、そういった考えを先輩方などから早目に学ぶことができ、英彦山での調査でそれが深く自分に根付いたのは非常に良かったと思う。本当に昆虫が好きで、豊富な経験をお持ちの先輩方が多く在籍していたので、様々な昆虫に関する話や採集の様子などを見聞きできたのは、刺激的でかけがえのない財産となった。

経験も知識も足りない修士課程の前半、自分に必要なサンプルがなかなか集められない状況で大量に採集する習慣は激化し、調査中昼間は幼虫採集とスウィーピング、夜間はライトトラップで、深夜から午前中までサンプルの展翅という寝る時間はいつなのか分からない採集習慣が出来上がったのは、目の当たりにしてきた多くの優秀な先輩方のすごさに少しでも付いて行きたかったからだと思う。その一方で、研究機関に所蔵された標本にはありがたさを痛感し、恩返しではないが、自分以外の分類群もたくさん採集することを心に決めた。2022 年現在、昆虫学教室で蛾類を研究する学生は 8 人もいるが、学生から私の採集した標本が彼らの研究にとって貴重なサンプルだったという話を時々聞く。そういったとき、今までの頑張りが少しでも学生を支えとなっているかなと嬉しい気持ちになる。

ひこさんがらがら 13号
2022年4月30日発行
編集・発行 ひこさんがらがらの会
福岡県西区元岡 744
九州大学農学部昆虫学教室
印刷 株式会社 春日

